
銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

三田弾正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

【Nコード】

N3863X

【作者名】

三田弾正

【あらすじ】

銀河英雄伝説～門閥貴族・・・だが貧乏！

執筆前に、元々このネタで行こうと、考えていた物です。

幻の皇后、シュザンナ・フォン・バーネミュンデ侯爵夫人の子供の一人に転生し、これから来る破滅を何とか、避けようとする、皇女の物語です。

この小説は「らいとすたっフルール2004」にしたがって作成されています。

第一話 お母様は、シュザンナ（前書き）

劇中の暗殺者は、CV真柴摩利（シーマ・ガラハウ）さんのイメ
ージです。

第一話 お母様は、シュザンナ

……暗い……それと暖かい？

耳に入るのは、ドイツ語らしい女性の声で、『私の可愛いベービ、今度こそ無事に生まれてきておくれ』

んん！

体が流れるー！ー！ー！ー！ー！ー！？

眩しい此処はどこだ？？

『お生まれになりました、美しい皇女様です』
誰かが言う声が聞こえる。

薄目を開けて見てみると、レトロな看護服を着た、女性が喋っている。

なるほど、さっきのは母親の胎内ですか。今は産まれた所のようなようです。

母らしき人が、『おお、私の可愛いベービ、今度こそ守りますからね』

看護婦が、『侯爵夫人様、皇女様のお体を、清浄して参ります』
そう言って、私を連れて別室へと移動しました。

看護婦が、体を拭きながら、恐ろしいことを、言い始めました。
『フツ・・チョロいもんだね、あんたに恨みはないが、生まれるところを間違えたのさ、自分の生まれの不幸を、呪うがいい』

うわああああ、シャアの台詞じゃあるまいし、目つき変わってる

耳に聞こえるのは、『宮中警備隊を、呼べ』とか『侯爵夫人と皇女様を別室へ』とか、『背後関係を探れ』とかが聞こえてきます。

そのまま、別室で、清浄され、母親に抱かれて、病院らしき所から、彼女の家らしき、邸宅へ連れて行かれて、邸宅内の、赤ちゃん入れるプラ製箱に、入れられました。

しかし、いきなり暗殺されそうになるとは、私はいったい誰なんだ？

侯爵夫人とか皇女様とか宮中警備隊とか、現代じゃ聞き慣れない言葉だし。

侯爵夫人が、母親らしい。

皇女が私。

で宮中警備隊があると、どっかの王宮かな？

疲れたんで、少し寝よう。

ん、ガヤガヤする、また暗殺か？

ホッ、母親が、立ち上がったのか、ん？

『皇帝陛下のお成りでございます』

誰かがそう言っている。

皇帝陛下？？？

『シュザンナ、無事か』

『陛下』

『おお、この子が、予の子か』

『陛下そうでございます』

『おお、シュザンナに似て憂い子じゃ』

『陛下、危ういところでございました』

『聞いておる、大事に育てるのじゃ』

『警備も強化させよう、ようがんばった』

『陛下』

『今宵は、親子三人で過ごそうぞ』

『陛下』

意識が薄れていった……ZZZZZ

一ヶ月ほどたって、私の、立ち位置が判明しました。

こんにちは、私は、テレゼ・フォン・ゴールデンバウムと申します。

ゴールデンバウム王朝第36代皇帝フリードリヒ4世 と寵姫シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人との間に生まれた、第3皇女です。

大きな声では言えないのですが、実は私、転生者なんです。

ゴールデンバウム王朝と言えば、銀河英雄伝説の世界ですよ。

第36代皇帝フリードリヒ4世と言えば、ラインハルトの、篡奪を知りながら、あえてそのままにした、あの皇帝ですよ。

シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人と言えば、子供4人ぐらい殺されて、アンネローゼに嫉妬して、フレーゲル男爵に、そそのかされて、暗殺狙って失敗して、死んだ人じゃないですか。

私も暗殺されかかったし、これからも、危険がいっぱい。

今年って何年なんだろう、喋れないし、字も書けないから、どうにもならないよ。

食っちゃ寝、食っちゃ寝を繰り返すこと、2年で、やっと、喋れるようなり、ムッター、ファーターと言うようになり、シュザンナ

母様と、フリードリヒ父様が、目を細めて、喜んでくれた。

どうも警備が完璧なのと、女だから、帝位に関係ないから、敵からは放置され始めたみたいな感じ。

ノイエ・サンスーシだからか、カレンダーとか無いし、年度が判らない、困った。

つたない言葉で「お母様、私の、お誕生日は、何年なの」って聞いたら。

『テレーゼ、難しい言葉を、覚えたのですね』
にこやかに、話してくれました。

『あなたのお誕生日は、471年2月3日生まれですよ』

「お母様、ありがとうございます」

女官が来て、『テレーゼ様、お昼寝の時間でございます』
と来て、ベットへ寝かされました。

考えようとしたけど、寝てしまいました。

翌日から、これからの人生について考え始めた。

ん、お父様が487年に亡くなられるから、そのとき、16歳か、ラインハルトが、クーデター起こすのが、488年だから、17歳、お母様が、フレールゲルにそそのかされるのが、486年で15歳、お母様が、暗殺未遂したら、私もとばかり食うかも知れない。それで生き残っても、アンネローゼを狙った女の娘じゃ、酷い目に遭いそうな気が。

それで、無事でも、リップシュタットの後に、あのランズベルク伯に我が儘小僧と共に、誘拐されるかも知れない。
路頭に迷うのはいやだ。

アンネローゼが後宮に来るのが477年ぐらいだから、あと4年

か、6歳に時に、父上に甘えまくって、アンネローゼが来るのを、
阻止できれば、安全だ。
よっし、それで行こう。

第一話 お母様は、シュザンナ（後書き）

いつか、続きを書きたいです。

第二話 韜晦作戦準備よし（前書き）

お待ちせしました、少ないですが第二話です。

第二話 韜晦作戦準備よし

帝国歴473年7月10日 13時

■オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸

「テレーゼ私の可愛いテレーゼ、陛下より沢山のドレスが送られて来ましたよ」

「お母様、お父様からですか」

「そうですよ、あなたのお父様からのプレゼントですよ」

「わーい、綺麗」

「本当に綺麗ね」

「お母様、着たいですう」

「そうですね、ヘレーネ、クラリツサ、支度をなさい」

「かしこまりました侯爵夫人」

「わーい、わーい」

帝国歴473年7月10日 19時

■オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸 テレーゼ・フォン・ゴールドンバウム

ふうう、疲れたよ。

お母様ったらノリノリに成っちゃって、あれからお茶の時間を挟んで4時間も着せ替えだもの。

無邪気な2歳児を、演じるのも大変だよ。

相変わらず夕食はドイツ料理だし、たまには梅干しとお茶漬け食べたい。

お米と紅茶はあるから、探せばあるかも。けどお母様が食べるの許

してくれないな。

しかし、私を暗殺しようとした黒幕は誰なんだろう。

470年に、兄様が死産と言うことに、なってるけど暗殺の可能性が大だな。

確か母様は4回妊娠してるから、あと2人生まれるかも知れない。無事に男子が生まれてくれれば皇位継承が拗れないかも知れない。まあ私が生きているから妊娠しない可能性もあるけどどうなるやら。

暗殺の黒幕って、原作じゃ、ブラウンシュヴァイク公とかリッテンハイム候とか言われてるけど、ルードヴィヒ兄様が、生きている限りあの2家に帝位が行くことはないのだから、ルードヴィヒ兄様が、急死する事を知らない訳だから、そんなことをするんだろうか。それとも、ルードヴィヒ兄様の急死事態が、ブラウンシュヴァイク公とかリッテンハイム候とかの、策謀だったとしたら、あり得ることだ。

しかし此処に、私というイレギュラーが、発生したそうになると、最低2人暗殺しないと成らなくなった、図らずもリスク分散が出来る訳か。

こうなると、あまり才気を見せると、敵の的になりそうだな。

暗殺から、逃れるためには、注意しつつこれまで道理、無邪気な皇女を演じ続けよう。

韜晦しなければ命が危ないからね。

これこそ韜晦作戦だ。

第三話 暗殺の裏幕（前書き）

短いです、すみません。

サブタイトルのに、此処で分けないと駄目だったので。

暗殺者経歴は、お察し下さい。

第三話 暗殺の裏幕

■オーデイン 某所

「あの女、大言壮語吐いたくせに失敗するとは！」

「手練れの物が居たのでしよう」

「あの者から、こちらの正体が知れることはあるまいな？」

「それは、ご心配無用でございます。」

かの者は叛徒共からの亡命者。ガンダルヴァ星系とかで植民者の反乱に毒ガスを使い住民を虐殺したとか。上層部の命令で暴徒鎮圧用無気力ガスだと、だまされたそうですが上層部がそれを隠すためにかの者達を事故に見せかけて皆殺にした中で唯一逃げてきた者、我々が突き出せば死有のみでございましたからな。生きるためには何でもしましょう」

「フフフどうせ成功しても始末するつもりであったのであろう」

「これは手厳しいすべては閣下の為でございます」

「おぬしには苦勞かけるの」

「いえ臣の成すところでございます」

「しかしこれであの赤子の周囲に手を出し辛くなった」

「しかし男児ではありませんのでさほど気にする必要はないのでは」

「うむそうじゃな、去年の赤子は男児であったあのときは見事に死産と言うことになってくれたからの」

「今回の事で、去年の死産は暗殺だったとの噂が真実味を持ってまことしやかに流れ始めておりますから」

「ここ暫くはおとなしくするのが肝要であろう」

「御意」

第四話 皇帝即位20周年記念（前書き）

連続投稿です、お待たせしました。

第四話 皇帝即位20周年記念

帝国歴476年2月3日

■オーディン ノイエ・サンスーシ「黒真珠の間」

「皇帝陛下、在位20周年、万歳」

「テレーゼ皇女殿下、御生誕5周年、万歳」

「万歳」

「いや、めでたい、お美しい皇女様のご尊顔を拝謁出来ましたな」

「皇帝陛下もまだまだお若い」

「テレーゼ様の初お目見え、楽しみでしたからの」

「僅か5歳であの美貌、あと10年もしたら、銀河一の美貌と成りましょう」

「今の内に、誼を結んおこうかの」

「我が家の、嫡男に是非とも降嫁して欲しいものよ」

「なんの、卿の嫡男は17ではないか、遅すぎるわ、それに比べて、我が息は8歳でちょうど釣り合う」

「卿の息子は、卿に似てぶ男だそうじゃの、釣り合わんよ」

「なにを、なにを、我が息子こそふさわしい」

「話が弾んでおるの」

「これは、ブラウンシュヴァイク公」

「テレーゼ様は、お美しいの」

「奥方が、嫉妬しますぞ」

「ははは」

「伯父上」

「おおフレীগエル」

「それではまた」

「ヨヒアムよ。お前、テレーゼ様をどう思う？」

「お美しい、お方ですな」

「どうだ、お前が望むのなら、いずれ陛下に、お頼み申す事も出来るが」

「しかし、あの噂がございましょう、あの女が、首を縦に振るとは思えません」

「確かに、あの噂はあるが、わしは知らんぞ」

「しかし、2度続けての降嫁など出来ましょうか」

「オトフリート4世陛下の時代には、一人に3度続けての降嫁もあったぐらいじゃ」

「なるほど」

「お前も、誇り有る、ブラウンシュヴァイク一門の男としての矜持を見せてみよ」

「伯父上」

「考えておくことだ、権門とはそういうものだ」

「さてヨヒアムよ共に挨拶に参るぞ」

「おお、このランズベルク伯アルフレッド、皇女殿下に、詩を、献上いたく存じます」

「皇女陛下、我がヒルデスハイム邸に是非とも、行脚いただきたく存じます」

「なんの、我がヘルクスハイマー邸にこそ是非とも、行脚いただきたく存じます」

「これこれ、テレーゼが困っておろう、まだ幼いのじゃ、驚かすでないぞ、ハハハハ」

「皇帝陛下」

「おお、ルードヴィヒよ、おぬしの妹じゃ、可愛かろう」

「はい、可愛ゆうございますな」

「ほれ、テレーゼや、兄上じゃ」

「兄上ですか？」

「うむそうじゃ、兄上のルードヴィヒじゃ」

「兄上様、こんにちゅあ」

「ああ、こんにちは」

「父様、ごきげんうらわちくって、言うの？」

「よいよい、まだそこまでは無理じゃろう、のう、ルードヴィヒ」

「そうでございますね、幼き子に未だ未だ無理がありましよう」

「ううー」

「どうした、テレーゼ？」

「おちっこー！」

シャーーーーーー

「わあああん」

「陛下お召し物が」

「よいよい、長きにわたり、此処にいたのじゃ、子供には、辛からう、

すまぬが、ルードヴィヒ、着替えて参る、

暫く、儂の代わりをしていて欲しい」

「判りました、陛下」

「テレーゼも疲れたであろう、今日はもう休むのじゃ」

「おとうしゃま、ぐすぐす」

がやがやがや

「皇女様が、お漏らしとは」

「未だ5歳じゃしかたあるまい」

「最近、陛下もテレーゼ様に会いによくベーネミュンデ侯爵夫人

の所へいくそうじゃ」

「それで、夫人のご機嫌がよいのですな」

「面白いことよの」

「これは、リッテンハイム候」

「先ほど挨拶してきたが、皇女殿下がこの目出たきときに、お漏らしとは、我が家のザビーネは3歳だがその様なことはないぞよ」

「侯爵、不敬ですぞ」

「なんの、酒の上での、戯れ言よホホホホ」

帝国歴476年2月3日 深夜

■オーディン 某所

「今宵の宴はいかがでしたか？」

「ふむ、初めて、あの娘にあったが、挨拶中に、お漏らしをしておったわ」

「ほう、恥を搔いたわけですな」

「そうよ、舌足らずに、喋っておった、そのまま、陛下のズボンに、漏らしおった」

「前代未聞ですな」

「あの女が甘やかして居るのだろう、聞いたか、今回着る為に、陛下から、ドレスが10000着も届いたそうだ」

「よいではございせんか、馬鹿な寵姫と、その娘、我が儘に育てただければ、誰も支持しません」

「そうよの、適齢期が来たら、どこぞの門閥貴族へ、降嫁させるように、お勧めすればよいの」

「さようでございます」

「今回の姿を見て、安心したわ、あれは、捨て置いても平気よ、ただ寵姫達に、男児が生まれたら、始末せねばならんな」

「御意」

第五話 皇帝即位20周年記念裏側（前書き）

第四話の主人公側です

第五話 皇帝即位20周年記念裏側

帝国歴476年2月3日

■オーディン ノイエ・サンスーシ「黒真珠の間」 テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

「皇帝陛下、在位20周年、万歳」

「テレーゼ皇女殿下、御生誕5周年、万歳」

「万歳」

父様と私のお祝いに、帝国中の貴族、廷臣、軍人、そして、令嬢や令息達が、これでもかって、着飾って、来ている。

贅を尽くして、豪勢すぎるわ、ドンだけ金かけてるのよ。

貴族連中が、集まっては、降嫁とか、うちの子にとか、狙われてるのありありですね。

おっ、あれは、ブラウンシュヴァイク公じゃん、リアルに見ると、なんかねー。

一応、義兄になるわけだけど・・・ねー。

誰か近づいていていった、ん？あの髪型、あの顔、未だ若いけど、フレーゲルじゃない？

2人で話し始めたみたい。

ジュースでも飲みますか、演技も疲れるし。

「お父様、おれんじじゅーすが欲しでしゅ」

「誰か、テレーゼに、オレンジジュースを持ってまいれ」
「はっ」

「お父様、ありがとうございますでしゅ」
「うむうむ」

うげ、ブラウンシュヴァイク公とフレーゲルがやって来たよ、いやだな。

「皇帝陛下、皇女殿下にはご機嫌麗しく」
「うむ、公爵」

「皇帝陛下、皇女殿下、此処にいますのは、甥のフレーゲル男爵です、どうぞお見知りおきを」

「ヨヒアム・フォン・フレーゲルと申します、皇帝陛下、皇女殿下の御意を得まして、子々孫々の譽としたく存じます」

「そうか、フレーゲルよ、励め」
「御意」

フレーゲルかよ、この頃から、嫌みっぽく感じるな。

また貴族が来た、今度は誰だ？

「皇帝陛下、皇女殿下にはご機嫌麗しく」
「うむ、候爵」

ああ、この髭、リッテンハイム候じゃん

次々に挨拶来るから、かったるい。

「おお、このランズベルク伯アルフレッド、皇女殿下に、詩を、献上いたく存じます」

うげ、誘拐犯の、えせ詩人じゃん、この頃から、下手な詩を、作ってたのか。

「皇女陛下、我が、ヒルデスハイム邸に是非とも、行脚いただきたく存じます」
自意識過剰の、自己陶醉来たー。

「なんの、我が、ヘルクスハイマー邸にこそ是非とも、行脚いた
だきたく存じます」

ん、ヘクスハイマーって聞いた気が………あつ、指向性ゼ
ツフル粒子事件と遺伝子欠陥か。

「これこれ、テレーゼが、困っておろう、まだ、幼いのじゃ、驚か
すでないぞ、ハハハハ」

あつ、考えていて、無口になっていた。

「皇帝陛下」

「おお、ルードヴィヒよ、おぬしの妹じゃ、可愛かろう」

「はい、可愛ゆうございますな」

「ほれ、テレーゼや、兄上じゃ」

ルードヴィヒ皇太子か。

「兄上ですか？」

「うむそうじゃ、兄上のルードヴィヒじゃ」

敵を欺くには、まず味方からと言うから、馬鹿をやりですか。

「兄上様、こんにちゅあ」

「ああ、こんにちは」

「父様、ごきげんうらわちくって、言うの？」

「よいよい、まだそこまでは無理じゃろう、のう、ルードヴィヒ」

「そうでございますね、幼き子に未だ未だ無理がありましょう」

しまったな、トイレに行きたくなってきた。

此処は、漏らそう、死にたいぐらい恥ずかしいが、これほどのイン

パクトはあるまえ。

「ううー」

「どうした、テレーゼ？」

「おちっこー！」

シャーーーーーー

「わあああん」

お父様、冷たいでしょうが、申し訳ありません。

「陛下お召し物が」

「よいよい、長きにわたり、此処にいたのじゃ、子供には、辛からう、

すまぬが、ルードヴィヒ、着替えて参る、

暫く、儂の代わりをしていて欲しい」

「判りました、陛下」

「テレーゼも疲れたであろう、今日はもう休むのじゃ」

「おとうしゃま、ぐすぐす」

ああー恥ずかしい！！

一生言われるんだろうな。

冷たいし。

早く着替えよう。

第六話 士官学校探訪（前書き）

書くのが止まらない。

第六話 士官学校探訪

帝国歴476年7月8日

■オーディン 帝国軍士官学校
ライエンフェルフ中将

アルノルト・フォン・フ

本年度の士官学校入校式に、皇帝陛下のご臨席を、賜る事になった。

国防の第一たる士官達にお言葉をいただけるそうだと。

その後、在校生の授業も見学するとのことだ。

本来であれば、入校式当日は授業はないのだが、本日は普通道理行うことと成った。

長い一日と成りそうだと。

■オーディン 帝国軍士官学校
イエンタール

オスカー・フォン・ロ

全く今日についていない、昨夜の女は良かったが、旦那が居るとは知らなかった。

いきなりベランダから逃げる羽目になるとは、まったく。

しかも隣には、朝からテンションが異様に高い鶏冠頭が居るし、五月蠅い頭が痛いだろうが！

皇帝の臨席だって全くくだらん、気まぐれはやめて欲しい物だ。

■オーディン 帝国軍士官学校
ヒ4世

皇帝フリードリ

士官学校へ行くことになった、本来であればこのようなことは、する気が無いのだが、テレーゼが兵隊さんの学校を見てみたいというので行くことにした。

■オーディン 帝国軍士官学校
ゴールデンバウム

テレーゼ・フォン・

やって来ました、士官学校、父様がへんな女に、引っかからないように、最近色々なところへ、連れて行ってもらっています、上目遣いのおねだりモードで大概OKです。

それに、今年の入学生には原作キャラが居ないけど、在校生には、ロイエンタール、ミッターマイヤー、ビットェンフェルト、ワーレン、アイゼナツハとか居るし、顔見せには良いかなって。

父様と一緒に侍従武官やらと共に学校へ行くと、宇宙艦隊司令長官ヴィルフリート・フォン・ベヒトルスハイム元帥が校長のアルノルト・フォン・フライエンフェルフ中将と共に、迎えに出てきた。へー、ミュッケンベルガーは未だ長官じゃないんだ。

挨拶が終わって早速、入校式で訓辞を行う、父様と長官、今までこういう事は余りないことらしくて、校長が卿達は名誉であるとか言ってる。最後に私が、「お兄ちゃん達、頑張ってください」って言ったら、結構盛り上がってしまった。萌はこの時代にも通用するんだね。

次に4年の授業を見学、戦略理論見てたら、教官が良いところ見せようと、前の方の学生にこの問題を解けて言って、立ち上がったのが、錆銅色の髪で後頭部が跳ねてるって、アイゼナツハじゃない？

この頃から無口だったんだな、ヤーとかしか言わないし。

次に行くのか、話してみたいんだけど、仕方がないか。

続いて3年にやって来ました、3年生は格闘術ですか、体操着を着てやってますね、まあ皇帝の手前、装甲服は着れないんでしょうね、勝ち抜きをやっているようで、ベスト4が決まったようです。

ここから、天覧試合と言うわけですね。

残ってるのは、やっぱり、ロイエンタール、ビットェンフェルト、ワーレンですね、残り一人は見たこと無いので、モブキャラですね。

始めの合図で、4人が戦闘始めましたね、おっビットェン強いモブを一発ですっ飛ばした、ワーレンとロイエンタールは、間合いを計ってる、ワーレン出るけど、ロイエン軽く足払い、すっ飛んだー、最後は、ビットェンVSロイエンですか、ビットェン相変わらず猪突猛進、ロイエン飛んだ、再度突っ込むビットェン、ロイエンそのまま受け流しながら、足払いしながら、一本背負いだ。ロイエンタールの勝ちだ。

ロイエンタールには、父様から金時計が贈られました。私は、「父様絵本で見たんだけど、勝利の女神がキスするのってありですよ」って言ったら。『よいよい、テレーゼの好きにするがよい』とにこやかにOKしてくれました。

その後、ロイエンタールのホッペにキスしました。

ロイエンタールは、ビックリしましたね。

ビットェンフェルトには、持ってきていた、銀製の櫛をあげました、喜んでいたよ。

ワーレンには、ハンカチをあげました、恐縮ですって言った。

■オーディン 帝国軍士官学校

オスカー・フォン・ロ

イエントール

驚いた皇帝から金時計を下賜されるとは、さらに驚いたのは皇女が俺にキスしたことだ、勝利の女神うんぬんと言い、皇帝の許可を受けほったにキスしてきた、明日から噂が流れるだろう、マールバッハの家からと言ってくるかも知れんな。

■オーディン 帝国軍士官学校
ビットェンフェルト

フリッツ・ヨーゼフ・

皇帝陛下のご臨席による授業と聞いて、俺たち平民には関係ないと、ワーレンと話したのだが、まさか陛下から、お言葉を賜るとは思わなかった、それにだ、皇女様が、にこやかに来て、『すごいです』とおっしゃて、『髪が乱れてますう』とご自身ご使用の銀の櫛を賜されたのだ、大変感動した、大事にしよう。

■オーディン 帝国軍士官学校
ワーレン

アウグスト・ザムエル・

皇帝陛下のご臨席による授業と聞いて、俺たち平民には関係ないと、ビットェンフェルトが話してきたのだが同感だった、しかし俺たちが、最後まで生き残り戦い終わると、4人とも皇帝陛下から、お言葉を賜るとは正直驚いた。

しかも、皇女様が、『汗がすごいですう』と言い、ご自分のハンカチを、俺に下賜されるとは驚きだ、使うわけにもいかんから、大事に保管しよう。

■オーディン 帝国軍士官学校

テレーゼ・フォン・

ゴールデンバウム

3年の授業が済んで、いよいよ疾風ウォルフの2年生です。

戦術理論の授業か、教官理屈倒れのシュターデンじゃん、うわー、『皇帝陛下の御為に』とかそんなことばかり言い始めたよ、父様の前だからみんな真剣に聞いているけど、眠くなるねこれ、んーウォルフ居るかなー、前の方には居ないな、あっ居た後ろの方で、なんか書き物しながら見てる。残念、前にいれば喋れたかも知れないのに、仕方ないか。

結局シュターデンの眠くなる授業のせいで、途中から寝てしまい、気がついたら、宮殿に帰る車の中でした。

帰ったら、お父様とお母様と一緒に御夕飯を食べて寝ました。

最近とみに、お父様とお母様の仲が良いので、アンネローゼフラグを断ち切れそうな勢いです、このまま行けば、ラインハルトは只の人だね。

帝国歴476年7月8日 深夜

■オーディン 某所

「して今日の動きはどうじゃった」

「間者の話ですと、格闘戦を見て、喜んでいたとのこと」

「くだらんな」

「さらには、勝者に話しかけ、頬にキスをしたとか」

「立場が判らん、子供じゃ」

「まことに」

「最早、放置しても良いかもしれん、あの者は、どう言っておる」

「無邪気で、思慮の足りない子供だと」

「陛下もあの女の元に通い詰めておる、最早又、子ができるやもしれん」

「そちらに力を入れるようにと命令せよ」

第六話 士官学校探訪（後書き）

次回予告

パッパパーパラー、

皇帝の浮気癖を阻止しようと、テレーゼは行く、そして母に運命の日が！

次回、銀河英雄伝説Ⅲラインハルトに負けません

第七話 初夏の風そして

銀河の歴史が又1ページ

第七話 初夏の風そして

帝国歴477年3月31日

■ オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸
テレーゼ・フォン・ゴールドンバウム

最近お母様の機嫌が非常によい。

やはりお父様が毎日のように来てくださるからだろう。

昨日もオペラ鑑賞に連れ立っていった、ローエングリンらしいがよく知らない。

メックリンガーなら知ってるだろうけど、未だに繋がりが無いし。

このところは、ロリコン趣味の女遊びが絶えてきて真つ当な生活環境へと変わってきている。

たくよー50過ぎの男が15歳を愛人にするんじゃないよ。

それを勧める、茶坊主どももどうしようもない。

やっと女の陰を薄くできたから、これから変な女に、アンネローゼ引っ掛からないようにさせなければならぬ。

帝国歴487年にお父様が亡くなられるのを、防ぐためお酒をあまり呑まないように、あちらこちらへと一緒に動いて出かけるようにしている。

最近は顔色も良く息切れも無いようだ。

この半年でも山登り（庭園内の丘だけ）やハイキング、乗馬など一緒に楽しんでいる。

意外だったのはお父様は乗馬がヘタだったことだ、若い頃放蕩三昧だったため遊んでばかりでやってなかったらしい。

出来るなら何とかして役立たずの門閥貴族を潰して、帝国を再生したいな。

まずは、グリーンメルスハウゼン爺様に繋ぎを作って、相談に乗って貰わないとだめだな。

んーしかし、いきなり会うと他の者に不審がられるから何とかチャンスを作らないと。

そう言えば、ケスラーって何時から、グリーンメルスハウゼン爺様の部下だっただろう。

映像見るとずいぶん親しそうだし、個人的にかなり前から繋がりがあったのかもしれないな。

472年に士官学校卒業してるから、25歳で大尉ぐらいかな？
ケスラーが来てくれれば、これほど頼もしいことは無いのに。

帝国歴477年4月1日

■ オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸
テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日お母様から重大な発表があるとのこと。

お父様が臨席する夕食時に発表するからと待ちの姿勢。

夕方6時にお父様が来てくれました。

そしてにこやかな、お母様から発表がありました。

『テレーゼに弟か妹が出来ますよ』

流産予定の子供か。守れたら守りたいな。

「お母様、わー嬉しいおめでとうです」

お父様も喜んでくれました。

良しこれで、当分の間他の女は排除できるだろう。
エイプリルフルじゃないよね。

帝国歴477年4月

■オーディン 某所

「あの女が又妊娠したと」

「あの者よりの知らせにございます」

「早い内に始末させるのだ、小娘のように生き残る可能性もあるのだから」

「流産と言うことでよろしいでしょうか」

「お前に任せる」

「御意」

帝国歴477年6月30日

■ オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸

テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ふうふう、そうなんだよね。

新しい寵姫としてアンネローゼがやって来たそうだ。

お母様が非常に怒っておられた、危険な兆候だ！

アンネローゼが来たのって、宮内省職員が自分の点数稼ぎのために見つけてきたんだよね。

そうならないように、お父様をお母様の元へ日々通わせる作戦だったが、

子供が出来たから夜のお勤め無いから、お寂しいであろうと勝手に連れてきやがった。

余計なことをしくさってからに！

ここの所お母様の所へ度々通っていたから、安心してアンネローゼを探せ作戦を行わなかったけどか探せるわけがないけど。

原作道理起こるのか、イベントが！

歴史の修正力というやか、はたまたバタフライ現象か。これでラインハルトがやって来る！！！！

帝国の危機だー！

お父様も押しに弱いから、認めてしまうし。

お偉いさん達もあまり、お母様に権力が行くのが危険と感じたのだろう。

クソッ、コルヴィッツめ一時は出世して喜んでいるだろうが、いつか必ず後悔させてやる！！

とにかくも信頼できる味方を探さなきゃだめだ。

グリーンメルスハウゼン爺様に早く繋ぎを取らないといけなくなった。

帝国歴477年7月

■オーディン 某所

「陛下に新たな寵姫が出来たな」

「はっ宮内省の役人が市井で見つけてきたとのこと」

「平民か？」

「いえ一応帝国騎士ですが、平民以下の生活だったとか」

「歳は幾つだ」

「15歳で在ます」

「良いの、こここの所。陛下は酒もあまり飲まず健康になりつつあるから、

新しい寵姫に性を吸われれば早くに衰弱しよう」

「まことに」

「政権にしがみつきたがるあの老いぼれ共に、

侯爵夫人の権勢が増えたと困ると、

囁き新たな寵姫をもって侯爵夫人を牽制せよと言ったが、

これほど早く決まるとはおもわなかった」

「これで流産すれば万々歳じゃ」

「御意」

第八話 織り姫VS彦星（前書き）

時間が中々進まないのので、戦闘シーンが殆ど無い銀英伝に。

第八話 織り姫VS彦星

帝国歴477年 7月7日

■オーディン ノイエ・サンスーシ オルテンシア庭園
テレーゼ・フォン・ゴールドンバウム

本日非公式ながら新寵姫アンネローゼと顔を合わせる事にした。
本来であればこの様なことは異例なのだが、

数日前お父様に『会わせないと二度と一緒にお風呂に入らない』と
だだをこねて今日という日を迎えた。

その際に弟も見たいから連れてきてと無理矢理に連れてこさせるこ
とにした。

お母様にはコッソリと泥棒猫の顔を見えますと言ってきた。

形式的には庭園散歩中の、皇帝父娘が偶然庭園に来ていた新寵姫姉
弟に会うという良くあるパターン。

取りあえず一発目が肝心なので、如何にも皇帝の娘という態度をと
らなきゃね。

庭園の東屋で待っていると侍従に先導されたアンネローゼとライ
ンハルトがやってきた。

おうおうアンネローゼの人生あきらめた感じとラインハルトの苦虫
つぶしたような顔を無理に平常にしているような感じがよくわかる
な。

此方の侍従がわざとらしく大きな声で『皇帝陛下ご臨席でございま
す』と言うと

お父様が『うむご苦労、して其所に居るのは誰じゃ』と言え
向こうの侍従が『グリューネワルト伯爵夫人とその弟にございま
す』と返す

お父様『此方へ来るが良い』
ですぐ近くへ来たというわけ。

「伯爵夫人此所はどうじゃな？」

「このように綺麗な庭園は初めてでございます」

必死に自分の運命を諦めて居る方は気の毒なだけだね、けど貴女こそ最大のキーパーソンですから。

「そこもこは誰じゃな」

「伯爵夫人の弟にございます」

「面を上げよ」

「良い目をしておるな」

目の奥に憎悪の炎が見えるよ。
この目を見て良い目だなんて、お父様この時からラインハルトに期待していたのかもしれないな。

「今年より幼年学校で学ぶとのことだす」

「励めよ」

「はっ」

ぶっスゲー演技腹の中は煮えくりかえってるだろうに良くやるよ。

で帰って一人で怒りを滾らせるんだね、
キルヒアイスが未だ来てないから。

さて私の出番だ一丁やりますか。

「お父様その方が伯爵夫人ですか？」

「そおじゃ伯爵夫人じゃ」

「グリューネワルト伯爵夫人ご機嫌麗しく、私テレゼ・フォン・

ゴールデンバウムでございます」

「テレーゼ皇女様ご機嫌麗しく、アンネローゼ・フォン・グリューネワルトでございます」

「弟御の名は何とおっしゃるのですか」

いきなり振られて驚いてるな　くくく

「テレーゼ皇女様ご機嫌麗しく、ラインハルト・フォン・ミューゼルと申します」

ここでいたぶるのも一興だけれど、必要以上に憎悪をたぎらせる必要もあるまい。

普通にやりますか。口元を扇で隠してお母様のような口調で。

「ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、さぞやおなごにもてようぞ。

将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみじゃ。」

ふふ、とまどって何を言ったらいいかわからんだろうね。

「よいよい、名誉なことと戸惑っておるのじやろう」

「お父様―昼餉に行きましょう」

「そうじゃの」

帝国歴477年　7月7日

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　オルテンシア庭園
ラインハルト・フォン・ミューゼル

今日姉上と共に皇帝に会いに来た、姉上を奪った敵の姿を見てやる！
案内役が姉上と俺を連れて行く、偶然を装い会うらしいがくだらん

作法だ、俺が宇宙を手に入れたらくだらん作法など廃止してやる！

皇帝とその横に小さな少女が居る、皇帝の娘か。

「伯爵夫人此所はどうじゃな？」

「このように綺麗な庭園は初めてでございます」

わざとらしい挨拶が続く。

皇帝が俺の存在を聞いてきた、知ってるだろうにくだらん。

憎悪の目で見たが、皇帝は気がつかないようだ。

「良い目をしておるな」

「今年より幼年学校で学ぶとのことですよ」

「励めよ」

言われたので「はっ」と言っちゃった。

いつか貴様にその犯した罪にふさわしい最後をくれてやる！

キルヒアイスはこうしているんだろう？

姉上に皇女が挨拶してきた。

そのうちに俺の名前を聞いてきた、姉上に迷惑がかかるといけないのでしっかり作法道理に名乗ってやった。

するとだ『ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、さぞやおなごにもてようぞ。』

将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみじゃ。』

上から見下すような傲慢な態度で話してきた！

近衛だとふざけるな！

俺は案山子になるつもりはない！

姉上のため俺は宇宙を手に入れるのだから。

帝国歴477年 7月7日

■オーディン ノイエ・サンスーシ オルテンシア庭園 アン
ネローゼ・フォン・グリューネワルト

今日皇帝陛下よりテレーゼ皇女殿下が私とラインハルトに会いたい
と言うことで参内させるようにと連絡が来たため、ラインハルトを
連れて庭園へ向かった。

侍従の案内で皇帝陛下にお会いし、ご挨拶後にテレーゼ皇女殿下が
私に挨拶していただいた、私も挨拶を仕返した。

テレーゼ皇女殿下はにこやかに挨拶してくれその後にラインハルト
にの名前を聞いてきた、

ラインハルトがしっかりと挨拶できるか心配したのですが、ちゃん
と挨拶できて安心したのですが、

皇女殿下が『ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、
さぞやおなごにもてようぞ。

将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみ
じゃ。』

とおっしゃった所ラインハルトの顔がきつくなって来たのです、
あの子は少々気の短いところがあるので何かしないか心配でしたが、
皇帝陛下が「よいよい、名誉なことと戸惑っておるのじゃろう』
とフォローしていただいたのでありがたかったです。

第八話 織り姫VS彦星（後書き）

アンネローゼ側を入れました

第5次イゼルローン攻略戦の並行追撃作戦対策作戦は有るんですが、
そこまで行くのが大変。

第九話 それぞれの昼餉（前書き）

ぎりぎり12日更新です

第九話 それぞれの昼餉

帝国歴477年 7月7日 昼

■オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸
テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

アンネローゼとラインハルトとの面会を終えたあと、お父様と馬車でお母様の待つ館へ向かう途中

「お母様の真似をして喋って見ました」

「はははそうかそうか」

どうやら誤魔化せたようです。

今日は昼餉をお母様とお父様一緒に食べるようにして貰っていますので、

あとは本人達の気分次第で落ち着くのではないかと思うのですが、悪なら私が出て仲裁を計るつもりです。

館に着いたらお母様がお出迎えに出てきていました、

やはり焦りがあるのでしょう普通なら執事が迎え入れる物なのですがね。

お母様はにこやかに「陛下きていただき有り難うございます」

ふむ普段の母上の苛つきが消えている良いことだ。

食事中は当たり前障りのないお話や私の教育に対する話などだったのですがねー

デザートになるとお母様が『新しい寵姫の寝心地はどうですか』ってジャブな嫌味を一発

うわー母様ストレート過ぎます子供がいるのですよ

すると父様『テレーゼが嫌がったから、まだじゃ、元々國務尚書等が勧めてきたので仕方なくな』
すると母様少し考えてから、『若い寵姫を求めるのは仕方がない事です
ですがテレーゼの為に館への行脚は出来る限りお願い申し上げます』

おっ母様手を未だ出してないと聞いて少しは和らいだ。

まあ数日前から母様をフォローし続けたかいがあったよ。

他の寵姫の手前毎日来るのは無理だけど、出来るだけ多く来てくれると父様が約束してくれました。
家庭円満に成らなきゃだめだね。

結局その日はお父様はお母様と私の教育について話し合うことになり館に泊まることになりました。
お母様は夕餉の際には数日前までの苛つきやドンヨリした空気が無くなり晴れ晴れとしていました。
よかったよー。

けど今年の九月から始まる私の本格的な教育について話があったので、

私としては内容が厳しそうなのでブルーに成りましたよ。

てか、紅茶の銘柄だとか、お香の銘柄、とかいらねー！！

ご学友を誰にしようとかも話が出たし、話が合うか不安だね、

こちらら、皇女でも根が庶民ですからね。

なまじ原作知ってるし下手に親しくなっ
てその子が不幸になるとか知
ってる
と絶えられないじゃん。

逆に災いになるのだとどうしていいやら。

なまじ軍事知識があるのも善し悪しで、口を出したいんだが出せないもどかしさ。

アルレスハイム、サイオキシン麻薬、イゼルローン攻防戦、ティアマト会戦とか

軍事的に教えたいのが教えられない、教えたら教えたで変に思われるし

暗殺の黒幕も未だに解らないし、下手に爪を出すわけにはいかないんだよね。

こまったもんだ。

相談できるブレインが欲しい今日この頃。

グリーンメルスハウゼン爺さんに早く会いたいのに機会が全くない何とかしてくれー！

帝国歴477年 7月7日 昼

■オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸

フリードリヒ4世

本日テレゼが、新しき寵姫アンネローゼとその弟に会ってみたいと言われたために場を設けることにした。

わしは、娘には弱い父親なのでついついテレゼに甘くしてしまう。アンネローゼの弟に会うのは初めてじゃったが、あやつに会った時心地よさを感じてしまった、

あの目あの表情、普段皇帝たるわしに媚び諂い裏では罵っている者たちと違う

わしを恨み憎む目がはっきりとわかった。

あの者こそわしの長きに渡る鬱積とした心を流してくれるのではないか。

あやつは、わしの願いをかなえてくれるであろうか。

だがテレゼとシュザンナを巻き込みたくはないものじゃ。

テレゼも何か感じたのか、あの者に挑発的な態度で臨んでいたの、普段のテレゼとは何か違うテレゼを見たようじゃ。

テレゼ自体はシュザンナのまねをしたと言っておるが、あれはわしと同じかも知れん、50年間周りを謀り続けたわしのように。

テレゼがそうであれば、また違うやり方もできるかも知れん、グリーンメルスハウゼンに相談してみるか。

帝国歴477年 7月7日 昼

■オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸
シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ

本日テレゼが憎つくき女を見に行くという。

そんな女見に行く必要がないと言ったが、『お父様を連れてくるし泥棒猫を見てきます』と

健気なことを言ってくれたので送り出すことにした。

昼餉の用意をさせ待っていると、テレゼが陛下をお連れしてくれた、

玄関へ迎えた時テレゼとにこやかに手を繋ぎながら馬車から降りてくる姿を見たとき

今までの鬱積した気持ちが消えていく気がした。

けれども少しは陛下に怨みの一つも差し上げようと、

『新しい寵姫の寝心地はどうですか』いってあげましたわ。

陛下は慌てて『テレゼが嫌がったから、まだじゃ、元々國務尚書等が勧めてきたので仕方なくな』

まあ寵姫のもとへ行くのも仕事のうちですから、そこところは納得してあまり行き過ぎないように、

『若い寵姫を求めるのは仕方がない事ですがテレゼの為に館への行脚は出来る限りお願い申し上げます』と釘を刺しておきました。

今日のこともテレゼが私のことを思い行ってくれたこと、

本当にこの子は健気で可愛いのでしよう、

ずっとずっと守りますからね、私の大事な大事なテレゼ。

帝国歴477年 7月7日 昼

■オーデイン ノイエ・サンスーシ グリユーネワルト伯爵邸

「ラインハルトいよいよ明日から幼年学校ですね」

「はい姉上」

「ラインハルト別に軍隊へ入らなくても、官吏とかでもいいのじゃない、あなたが危険なところへ行く必要はないのに」

「姉上僕は軍隊へ行って出世したいんです」

「無理をする必要はないのですよラインハルト」

「いえ自分の決めた道です」

「そうですか」

一人で大丈夫なのかしら、ジークが居てくれたら。

「ラインハルト一人で大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ姉上、もっともキルヒアイスが居ればもっといいでしょうけど」

「それではジークが言いといえれば入学できるよう
皇帝陛下にお願いしてみます」

「姉上そんな事が出来るのですか？」

「ジーク一人なら可能だと思います」

「姉上よろしくお願いします」

「けどジークが行きたいと言ったからですからね、無理やりはいけませんよ」

「わかっていますよ、けど絶対キルヒアイスは来てくれます」

「そうなるといいわねラインハルト」

「ええ」

第十話 ロイエンタールはロリエンタール？（前書き）

士官学校の一年後です

第十話 ロイエンタールはロリエンタール？

帝国歴477年7月8日

■オーディン 帝国軍士官学校

リヒャルト・オイゲン

今年も新学期が始まる私も此で2年だ。

士官学校は2人部屋で1年と3年、2年と4年という感じで、上級生と下級生をペアにして部屋割りをしている。

私が去年大いなる大志を抱いて入校したのが昨日のように感じる、まさかの皇帝陛下と皇女殿下のご臨席、そしてお言葉を賜るなど、平民としては破格のことだった。

さらに皇女殿下が『お兄ちゃん達、頑張ってください』と仰った時の同期生の興奮ぶりは今でも耳に残っている、あれで皇女殿下のファンになった同期達が多数でた、かく言う私もファンだ。

そのあと陛下達は各授業を見学していったそうだが、3年の格闘授業で決勝者4人に陛下お褒めのお言葉を賜ったそうだ。

それよりも全校生徒が注目したのは、優勝者であるロイエンタール先輩が皇女殿下にキスされたという話だった、この話は噂好きな連中の手で夕方には全校生徒に知れ渡り、

テレーゼ皇女様ファンクラブ（当日の昼過ぎには雄志が作成していた）の面々が『ロイエンタールの女ったらしー！』や『ロリエンタール！』と騒ぐシーンも見られた。先輩方の話によるとロイエンタール先輩は入校当初から女癖が悪く彼方此方の女性と浮き名を流していたそうだ、彼女を寝取られた方も居るそうで、その男が我らがアイドル、テレーゼ皇女様のキスを奪ったと尾ひれが付いたらしい。実際には頬にキスだったそうだが、食堂の灼熱ぶりは凄まじかったものだ。

そのほかテレーゼ皇女様が2位のビットェンフェルト先輩に銀の櫛を3位のワーレン先輩にはハンカチを賜った後が大変だった。

先輩方が貰った物を是非見せてくれと行列を作り、ハンカチに至っては香りをかがせろとか、変態じみた方々が多数出現した。

大騒ぎになりシュターデン教官が怒りまくっていた懐かしい思い出だ。

しかしその当事者の一人ビットェンフェルト先輩とルームメートの私にしては先輩が貰った櫛をコッソリ見せてくれたの、舐めさせろだの言われて困ったものだった。

ルームメイトとして先輩と住みだして4日目だからこういう反応をして良いか迷った物だ、

先輩は概して豪快、大雑把、猪突猛進と来ているが悪い人ではないし、親身になって色々教えてくれている、だが歯止めがきかないときは自分が押さえ役として動かざるを得ないのが何ともいえないな。

2年に成ってルームメイトが変わるかと思ったが今年もビットェンフェルト先輩と同室である意味期待ある意味ガツカリな自分が居るが微妙なところだろうな。

先輩はさっきから洗面台で髪型の調整をしていて最後の調整にあの銀の櫛を使っている。

さてあと一時間もすれば新学期だそろそろ支度をしよう。

■オーディン 帝国軍士官学校
ビットェンフェルト

フリッツ・ヨーゼフ・

もう4年長かった士官学校も今年で終わりだ、去年は始まって早々皇帝陛下とテレーゼ皇女様をご臨席して銀の櫛までいただいた、

今でもテレーゼ皇女様の笑顔が目には浮かぶ、貰った櫛はこの髪型の仕上げに大事に使わせて貰っている、うむそろそろ支度をせんと遅刻してしまうな、「オイゲンそろそろ行くかー」

■オーディン 帝国軍士官学校
ワレーン

アウグスト・ザムエル・

あれから1年か格闘授業で3位になり陛下のお言葉と皇女殿下からハンカチを賜ったのが昨日の事のように、ハンカチは大事にしまっておこうとしたが、どこから噂が漏れたのか『見せろ』『香りをかがせろ』などの輩が多数寮の部屋にまで押しかけて来るようになった、部屋の鍵を開けようとする馬鹿まで現れたので、仕方なく額に入れ両親に預けて実家へと避難させた。本当は持ち歩きたいのだけど仕方がない。

■オーディン 帝国軍士官学校
イエントール

オスカー・フォン・ロ

やっと4年だ去年は散々だった。

いきなり皇帝から金時計は貰うわ皇女からキスを貰うわ。

其れだけなら良いそれに尾ひれが付いて『ロイエントールが皇女のキスを奪った』だの『5歳児に欲情するロリエントール』『女の敵』『馬鹿野郎ー』『テレーゼ様汚した悪い奴』だのさんざん言われまくり、

遊び相手の女達にも『ロリなんでしょ』『ツルペタが好きなのね』

『皇女様相手では分が悪すぎます』『皇女様のお相手を奪うことは出来ません』とか言われまくって女があまり寄りつかなかったのだ。

俺が何をしたと言うのだ、みんな勘違いではないか！

最近疎遠だったマールバッハの伯父もいきなり連絡してきてパーティーに招待され行ってみれば、

会う人それぞれに『テレーゼ皇女殿下より接吻を賜り有望な甥でございます』と紹介はするわ

『オスカーどうだ養子に成らんか』と言ってくるし、全くろくな事が有りはしない。

早く卒業して任務に付きたい物だ。

■オーディン 帝国軍士官学校

ウォルフガング・ミ

ッターマイヤー

今年も新学期が来たいよいよ俺も3年か、去年は学校中がテレーゼ皇女様で盛り上がっていたな、3年生のロイエンタールという先輩がキスしたとかで、大波乱が起きていたが、自分はエヴァ一筋だから気にしなかった。

卒業したらエヴァにプロポーズしたいが、エヴァが受けてくれるか不安なんだよな。

■オーディン 帝国軍士官学校

リヒャルト・オイゲン

大変な事が起こった。今年もテレーゼ皇女様が来て下さるはずだったのだが、校長フライエンフェルフ中将与シュターデン教官が昨年の新学期早々の学校で起こった騒ぎ（ロリエンタール事件）を鑑み今回はご遠慮願ったらしい、其れを聞いた在校生は大騒ぎを起こ

し、『校長を変えろ』『シュターデン消えろ』とか大変だった。皆ガッカリしている残念だ。

第十一話 刃物女とお友達（前書き）

第十話最後を補填しました。

第十一話 刃物女とお友達

帝国歴477年7月25日

■オーディン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 テ
レーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日9月から一緒に勉強するご学友との顔合わせが有るのでパーティーを開くことになった。
いやね一々そんなことでパーティー開くのも馬鹿馬鹿しいと思うんだけど、貴族社会じゃ此が常識で議会無いからこういう時に色々な決め事とかもするんだって。

いつもの通り『皇帝陛下の御為に』『皇太子殿下万歳』『皇女殿下万歳』

とか言ってるんだけど、大半は内心お父様を侮蔑してるんだよね。
虎視眈々と次の皇帝の位を狙う物達や媚びを売って要職に就こうとする者千差万別だね。

向こうでは、ルードヴィヒ皇太子がにこやかに挨拶しているんだあ。の元気な兄上が483年ぐらいに急死って怪しくない？殺られたんじゃないかと推測してますよ。

OVAでヘルクスハイマーがリッテンハイムに死産したと言われている兄上を殺したんじゃないかと言って、私は知らんがブラウンシュヴァイクならやりかねないと言っていたから、しかも483年と言えば父様も重篤に陥っていた、その時に後を継ぐべき皇太子が急死し残るのは門地の後ろ盾がない1歳ほどの赤子どう見てもブラウンシュヴァイク、リッテンハイムが絡んでいるとしか見えないんだ

よね。

フェザーン&地球教という可能性もルビンスキーが482年に自治領主に就任しているし前の自治領主は地球教の支持から逸脱して処分されている訳だし就任記念の実績作りに暗殺した可能性もあるな。ただあの時点では帝国同盟とも戦力はほぼ拮抗。所謂48対40対12の状態でわざわざ帝国が滅ぶ様なことをしないだろう、後半のルビンスキーなら独自の判断でしただろうけどあの当時そんな力はないはず

しかし注意しておくことには手を抜かないようにしないと駄目だな。

しかし今日は私のご学友候補と顔合わせと家庭教師役やお姉様役の夫人や令嬢も来てるから会場に大輪の花が咲いたがごとくなり、その花に群がる貴族の子弟がナンパして居るみたいに見えるね。

私の所にはご機嫌伺いに来る方々の多いこと多いこと、腐っても皇帝陛下の権力は未だあるようです。

アマーリエ、クリスティーネ姉上達は既に売却済みで残りは私だけだからみんな来るよね。

各爵や軍の重鎮達や宮廷の廷臣達の子弟達がわらわらと来ては挨拶をしていくし挨拶し疲れます、帝国貴族だけで4000家以上居るけどまあクロプシュトック候のようにハブされてる方々も居るから全部じゃないけどね。

まあ男児はご学友には成らないから将来の許嫁候補で感じだね。

さっき来たのはあのフレージェル、来た瞬間ウゲッて思ったけど顔に出さないのが仕事だしね、『皇女殿下私も来年には士官学校入校でございませう、是非来年の視察ではエスコートさせていただきますたく存じます』

とか言ってくるから適当に煙に巻いておいたよ。

ミュッケンベルガー元帥いやこの頃は大将の子息のフリーデグットさんは14歳だけど大将ソックリな堂々とした体格で好感の持てる方でしたね。

おっ今度来たのはどつかで見た顔だけど誰だっけ？んトウルナイゼン・・・あああのラインハルトの幼年学校同期生でへまやって精彩を欠いて閉職に回されたトウルナイゼンか伯爵だったんだな、まあ普通にご挨拶っと。

今度はマールバッハ伯爵がロイエンタールを連れてきたよ、まあ伯父甥の関係だから有るんだろうけど、にこやかに『マールバッハ伯レオンハルトで御座います、皇女殿下にはご機嫌麗しく、此処に居るのは我が甥オスカーで御座います。先年は皇帝陛下皇女殿下には類い希なる栄誉をいただき祝着至極に御座います』

『マールバッハ伯が甥オスカー・フォン・ロイエンタールで御座います皇女殿下ご機嫌麗しく存じます』

「マールバッハ伯痛み入ります、ロイエンタール卿一年ぶりですね息災にしていましたか」

「はっ皇女殿下も御息災で何よりで御座います」

こんな感じで挨拶するんだけどロイエンタールは嬉しくないんだよねきつと、女性に対して母親の増悪があるから。

オフレッサーとかは未だ此処に出られるほどの地位じゃないみたいで姿が見えない会ってみたいのに残念、いずれ装甲擲弾兵の閲兵を父様に頼んで連れて行ってもらおう、今年士官学校へは校長とシユターデンのせいで行けなかったのだから、せめて卒業式には参加したいな。

一休みして午後からはご学友候補のご令嬢方とのパーティーです。同じ歳だけどブラウンシュヴァイク公令嬢のエリザベートとかは来てないんだよね。

館で古典文学を教えて貰う講師としてベアトリクス・フォン・マリンドルフ伯爵夫人が紹介されたんだけどヒルダのお母さんだよね？一緒に付いて来ている子供ってヒルダじゃない？

「ベアトリクス・フォン・マリンドルフと申します、この度皇女殿下へ古典文学をお教えすることと成りました」

「ヒルデガルド・フォン・マリンドルフと申します以後お見知りおきを」

「よろしく願いますね」

ヒルダショートカットじゃない綺麗なロングじゃないつ頃切ったんだろう。

お外の学校でも習うらしいけど来た方が、ヴェストパーレ男爵夫人だったけど年取ってるよ似てるけど年増です、どうやらお母さんのようですね。

「マルグリート・フォン・ヴェストパーレ男爵夫人で御座います、この度皇女殿下のご教育の一環として我が校の総力を挙げますのでご安心下さい」

総力なんか挙げなくて良いからさ適当にいこうよ><

「マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレと申します以後お見知りおきを」

男爵夫人だこの美少女が芸術家の愛人を7人も囲う方になるのですね、メックリンガーに未だ会ってないのかな？今度聞いてみよう。

次から次へと教師役とお姉様役とのご挨拶が続いていよいよご学友登場か。

ケルトリング侯爵家のクラリッサ嬢、エーレンベルク元帥の曾孫のブリギッテ嬢、メクレンブルク伯爵家のヴィクトーリア嬢と順番に紹介されていく5人いるそうだけど次の言葉にん？って思ったです。

リヒテンラーデ侯爵家エルフリーデ嬢？？？てか彼女刃物女じゃな

いか？うわーリヒテン爺さん養女にして入れてきたのかよ、刺されるのはいやだー！けど見た限り大人しくて可憐な美少女なんだけだな。

やっぱり家族殺されて極寒の流刑星に流されたのがやさぐれさせたんだな。

「皇女殿下私エルフリーデ・フォン・コーラあつりヒテンラーデと申しますよろしくお願いいたします」

間違えなんて可愛いじゃん彼女を不幸にしないように頑張ろう。

最後が・・・えっグリーンメルスハウゼン子爵家のカロリーネ嬢・・・
・グリーンメルスハウゼン爺さんの縁者だよね、そうだよ？

「皇女殿下私カロリーネ・フォン・グリーンメルスハウゼンと申しますよろしくお願いいたします」

えーと取りあえず後で聞けばいいか今日はグリーンメルスハウゼン爺さん来てないみたいだし。

「私こそよろしくお願いいたします」
しかし爺さんこんな孫？いたのか。

まあ此で9月からは6人で勉強だ、科目が多くて憂鬱だね。

第十一話 刃物女とお友達（後書き）

明日から出張でUP出来るか未定です。

第十二話 裏の事情（前書き）

出かける前に今日の分だけは更新、今夜は難しいです。

第十二話 裏の事情

帝国歴477年7月25日

■オーディン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 ヨヒアム・フォン・フレール

本日我が妻になるテレーゼ皇女のご学友お披露目会が開かれた、許嫁候補も居るだろうという輩も居るが其れは間違えた、テレーゼ皇女の夫は私ヨヒアム・フォン・フレール男爵以外には考えられないのだ。本日も謁見時『皇女殿下私も来年には士官学校入校でございます、是非来年の視察ではエスコートさせていただきますたく存じます』と言ったら、にこやかに接してくれたのだ。伯父上も全面的に協力してくれるから他の連中には負けはしないのだ。

■オーディン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 フリーデグット・フォン・ミュッケンベルガー

祖父に連れられテレーゼ皇女殿下のご学友お披露目会に参加した本来なら幼年学校4年であるから授業があるのだが免除されたのだが、本来ならばミュッケンベルガー伯爵家の本家たる再従兄弟が出るのが普通なのだが既婚者なので私にお鉢が回ってきたようだ。どうやらお披露目会と将来の婚約者候補を絞り込むための会だったようだ。テレーゼ皇女殿下とお話したが可愛らしいかたであった。フレール先輩がニヤニヤと自分の世界に入っていたようだ。が、氣にしないことにした。

■オーディン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 オスカ
ー・フォン・ロイエンタール

マールバッハの伯父にどうしても言われ行く気がなかった不敬にあたると言われ仕方が無く皇女のご学友お披露目会なるパーティーに参加した。

仕方がなかったがパーティーに群がる無数の艶やかな花達、手折ってみたいと感じたが皇女への挨拶に連れられ挨拶をせざるを得なくなった。伯父だけ挨拶で良いだろうと思ったら俺に振ってきた『マールバッハ伯痛み入ります、ロイエンタール卿一年ぶりですね息災にしていましたか』

はあ！息災じゃないお前のせいで去年は散々だったんだぞと言えないから『はっ皇女殿下も御息災で何よりで御座います』と心にもないことを言ってきた。しかし伯父が又噂を流すかもしれないなんとかしてくれ！

■オーディン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 ヒル
デガルド・フォン・マリールドルフ

お母様に連れられてテレーゼ皇女殿下のパーティーへ出席した、お母様が古典文学を教えるそうで私はお姉様役で遊び相手とかするらしい、テレーゼ様はにこやかでたいそう可愛く可憐なかたでした、今度会えるのが楽しみです。

■オーディン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 マ
グダレーナ・フォン・ヴェストパーレ

お母様の学校でテレーゼ皇女殿下のご教育をお手伝いすると言う

ことで、ご学友お披露目会に参加しご学友も観察するために一緒に参加した。皇女様は私顔を見ると一瞬ジーとみましたがすぐに笑顔で挨拶を返していただきました、9月からは私も参加する事になりそうですから頑張らなければなりませんね。

■オーデイン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 エルフ
リーデ・フォン・リヒテンラーデ

緊張するな、7月になっていきなりリヒテンラーデ大叔父様から父に私を養女に欲しいと連絡があった何でも皇女殿下のご学友として私が選ばれるそうでビックリした、今日初めて皇女殿下にお会いしてご挨拶したけど、いきなり自己紹介で名字を間違えるんて恥ずかしいよー皇女様は変に思わなかったか其れが不安だよ。けど優しそうなたで良かった9月からが楽しみです。

■オーデイン 某所

「今宵のパーティーは如何でございました」

「小娘の学友選びと婚約者候補選びが茶番だったな」

「そうでございますか」

「うむいくら教師が良くても役に立たん知識ではどうしようもあるまえ」

「御意」

「其れよりあの女の流産はどうした」

「あの者からですと自然に流産させないと怪しまれる為特殊な薬を使うとの事です」

「急がせよ」

「御意」

■オーデイン グリンメルスハウゼン子爵邸 リヒャルト・
フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ皇女殿下のご学友お披露目会に参加したカロリーネが帰ってきた。

「カロリーネご苦労であった」

「はっ御屋形様」

「テレーゼ様はいかがであった？」

「御屋形様の仰る通り皇帝陛下と同じかと」

「やはりな、自分をお隠し有られる方か」

「御意」

「兄も暗殺され自らも生まれながらに暗殺されかけたお方じゃ陛下と同じ様に成られるのも判る気がするの」

「御意」

「カロリーネ済まんの無理を言って」

「何を仰います御屋形様、私のような者を養女として育てていただき何不住無く居られるのも御屋形様のお陰にございます」

「此から辛かろうがテレーゼ様を守ってくれ」

「御意」

「カロリーネあまり鯨張るでないぞ」

「御意」

第十三話 退屈なる日々（前書き）

相変わらず遅い時間経過。

第十三話 退屈なる日々

帝国暦477年8月15日

■オーデイン ノイエ・サンスーシ 桃珊瑚の間 テレー
ゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日9月からの勉強で宮殿内からヴェストパーレ男爵家が主催する学校へ通うための侍従武官との初顔合わせが行われるのです。お母様は私が外の学校へ通うのは前代未聞だと反対したのですが、お父様が世間を見るのもよいことじゃとお母様を説得し（お父様がお母様のところへ通う回数を増やす約束をしたらしい）週2日通う事に決まり残り2日は館で勉強し1日は見学等の野外学習日で残り2日が休日という感じになるそうだ。

女官に連れられて部屋に入ると既に4人の男女が待っていました。男性2人女性2人で身のこなしから相当な腕の持ち主ではと感じました。

最初にリーダーらしき30代に見える男性から挨拶がありました。「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官に任命されました、クレメンス・ブレンターノ大佐で有ります」

続いて20代ぐらいの男性が「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、ハインリヒ・フォン・ヴィッツレーベン大尉で有ります」

それから20代前半ぐらいの女性士官から「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、マルティナ・フォン・バウマイスター中尉で有ります」

最後に同じく20代前半ぐらいの女性士官から「皇女殿下ご機嫌麗

しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、ヴァーリア・ディーツゲン少尉で有ります」

4人から丁重に挨拶がされました。こちらも此から命を預ける訳ですから丁重にぺこりとお辞儀をしながら「テレーゼ・フォン・ゴールデンバウムです、此から苦勞をかけると思いますがよろしくお願いいたします」

あまりの丁重さと腰の低さに驚いているようです。普通皇族どころか貴族もこんな態度取らないよね。

まあ最初が肝心ですし嫌々守られるよりは愛想良くしておいた方が良いでしょう。へんな貴族の紐付きだったら嫌ですけどね、その辺は追々判るでしょう。

顔合わせが終わって4人が退席したので自室に帰って何となくボーツとしながら考え事。

今日は日本じゃ終戦記念日かあもう日本もないし関係ない日になってるんだけどね、元日本人としてはしみじみする訳ですよ、甲子園も高校野球もない夏の日。

スイカが食べたい気がしますね後で侍従長にスイカがないか聞いてみましょう。

そう言えば来年に第4次イゼルローン攻略戦が有るはずですが原作に載って無いので判らないですよねOVAでアキレウス級旗艦戦艦がトールハンマーで沈むシーンが出てますが、トールハンマーで沈んだアキレウス級旗艦戦艦は記録上無いので478年に戦没したらしい第4艦隊旗艦アキレウスが該当するんじゃないかと言われてましたからね。けれども来年イゼルローン攻略戦が有るとは言えませんしね、何か手は無いですかね。

そう言えば同盟の大規模戦闘のパターンは評議会選挙の年統合作戦本部長改選の時に活発化しましたね、帝国領侵攻作戦が前者でしたし、

ヤンのイゼルローン攻略が後者でしたね。

同盟の選挙と改選のパターンさえ判ればかなり正確に攻撃がわかるのでは無いでしょうか、研究する価値はありそうですね、問題は一人ではないと行けないと言うことで時間が足りないし資料が集まるかどうか、せめて軍務省と統帥本部の協力は欲しいが、あまり動き回るのも駄目だし・・・ん・・・困った知識も宝の持ち腐れだよ。カロリーネと学友になれたからグリーンメルスハウゼン爺さん家に遊びに隠れて会いに行って相談するかな時間いつが良いんだろう本人に聞かなきゃ駄目だから暫くはむりだな。

■オーデイン ノイエ・サンスーシ 小部屋

「グリーンメルスハウゼンその娘がカロリーネか」

「陛下そうでございます」

「カロリーネ、テレゼはやはり儂と同じか」

「皇帝陛下皇女殿下は韜晦なさっております」

「鯨張らずに喋るが良いぞ」

「いやしかし恐れ多い事なれば」

「良いのじゃ儂は堅苦しいのは嫌いでな」

「カロリーネ此から陛下には直接度々連絡をするのだからそうせい」

「はっ陛下」

「未だ堅苦しいぞハハハ」

「してグリーンメルスハウゼン今回付けた護衛はどうじゃ？」

「私の部下から選りすぐりの者を選びました、ケスラーは私の代理ですので動かさせませんが、ブレンターノ、ヴィッツレーベン、バウマイスター、ディーツゲン4人とも腕利きでございます」

「女官も4人紛れ込ませております」

「他には？」

「外出時には装甲擲弾兵出身者からなる護衛部隊を2個小隊用意し

ております」

「100人か見事じゃの」

「しかし油断は禁物でございます」

「うむ、カロリーネご苦労じゃがテレーゼを頼むぞ」

「もったいないお言葉でございます」

「これ。またじゃな、ハハハ」

「カロリーネご苦労」

「陛下失礼いたします」

「さてグリーンメルスよ幼年学校のあの者はどうして居る」

「はい成績は優秀であります共に連れて行った赤毛者も成績優秀でございます」

「ほう思わぬ拾い物であったか」

「そうですな、しかし」

「どうしたのじゃ？」

「あの者達校内でも孤立しており度々喧嘩沙汰を起こしており、さらに姉の悪口を聞くと逆上し石で相手の頭を殴り続けました、幸いにも死者は出ておりませんが問題になっておりまして、放校の可能性も出ております」

「うむその辺は儂が姉に頼まれたとして事を荒立てないよう伝えさせよう」

「そうですね陛下」

「しかしあの者がどう化けるか楽しみよのフッフ」

「グリーンメルスよ此からも頼むぞ」

「御意でございます」

第十四話 退屈なる日々その2（前書き）

すみません、今回話の関係上凄くつまらないです。

第十四話 退屈なる日々その2

帝国歴477年9月1日

■オーデイン
デンバウム

テレーゼ・フォンゴール・

本日より憂鬱な授業が始まります、夏休み明けなのに宿題未だ出来てない心境です。

いやね歴史、科学、国語、数学、語学、とかの実用な物は良いんだよ、けど貴族のたしなみお香当てやお茶のブレンド当て（伊藤園にでも勤めるつもりか？てかヤンにやらせれば100点じゃねー？）とか実用的じゃねー！

通うために用意された地上車を見ればあくまで外見は普通の車の様に見えるんだよね外見はさ……でもさーサイズがでかすぎ戦車みたいな大きさなんですこれ、乗ってみると又々冗談かと思うような装甲板ですガラスも厚いです後で聞いたら戦艦用装甲板の流用だそうです……てかさ其処までしないと外出られないなら出ること無いんじゃない？と思うが皇女じゃあ仕方がないかぁ。

んで朝7時に起きてお母様と朝食後身支度をしたらお出かけです、ただねーノイエ・サンスーシってだっ広いから町へ出るまで40分かかるので飽きるよね、出れば20分で着くのによ、宮殿内だけでもヘリでも使いたいですよね。

9時にやって来ました、ヴェストパーレ家の学校へ皆さん来てらっしゃいます、因みに学友5人と共に学園長たるヴェストパーレ男爵夫人にご挨拶です。

早速の授業は無いですが此行われる教育の方針とか何を習うとか先生はどなただとか淡々と説明されていきます。

其れが終わると懇談会で先生方と我々生徒達が雑談します、お菓子を摘みながら紅茶で喉を潤す、んー良いねこのままなら良いんだけどね、明日から地獄が始まるのだね。

其れで2日目早速文学の勉強ですか、まあ良いですけど。美術の勉強ですね教師を見るとメックリンガーじゃないですね普通のおばさんです、未だ娘さんはメックリンガーは未だ付き合っていないようですね、8人も愛人居るなんて親が聞いたら泣くよねふしだらな娘ですって、まあそのうちメックリンガーを連れてくるんだらうねその時が楽しみです。

夕方はみんなでお茶会明日は用事がないのでお休みです。

本日は何もやることがないのですよ、仕方がないので作戦を考えましょう。

どっかオーデインへのルートの惑星にグランドキャノン作れないかなと妄想、金と時間がかかりすぎて没、移動要塞で機動防御だとガイエスブルグで失敗検討を求める、んーろくな事が考えつかんなこんな日はやめよう。

今日明日は宮殿で習い事です、学友が来てダンスにお花にお香にお茶に歌とオペラ鑑賞。

あああくびが出ますね、習いたいことが全然出来ません。歴史と科学と軍学とか習いたいのですが駄目ですね、お父様に相談するか迷いますね。

休みの日です今までは毎日が休みでしたが休みが減った割にはやる事が有りません退屈です。

いっその事何処かへ行きたいのですが母様は妊娠中父様は謁見で暇

がないそうですタイミングが悪いですね、誰かの家に行こうにも先に連絡して準備をしないと駄目なので時間がありませんでした、次回からはちゃんと連絡をしておきましょう。

帝国歴477年10月

■オーディン

テレーゼ・フォン・ゴ

ールデンバウム

9月から始まった勉強も一ヶ月が過ぎ少しずつ落ち着きを得て来ました。

週1回のペースで順番に学友の家にお呼ばれし同じように週1回で館へは5人全員を呼ぶ形で過ごしてきました。

最初にリヒテンラーデ侯爵家へ行きましたよ、流石國務尚書の家ですね立派です凄いですね、まるで美術館のようです訪ねると侯爵自ら出迎えてくれましたよ。この人映像で見るとスゲー悪そうに見えるんですよ、ところが我々を迎えるときには笑顔なんですよ不気味ですね。越後屋とか似合いそうな感じがして少し笑いそうになりましたよ。エルフリーデは映像を見た感じと全然違って優しいよい子ですから可愛くて仕方有りませんからロイエンタールの毒牙から守ってあげたいですよ。リヒテンラーデ侯とも話をしたいけど今の年齢じゃ駄目でね何とかしたいのは山々だけど年相応の対処しかできないです。

次がケルトリング侯爵家この家は武人の家系ですからね同盟のブルース・アッシュビーにボコボコにされてから家運が傾いたんですが、ミュッケンベルガー伯爵家とのつながりは非常に強いですからねその筋から復活しようと頑張ってるんですよ。やはり当主のケルトリング少将がお出迎え、雰囲気からして前線方の武人に見えま

すね、ただ此処も同じで話を殆ど聞くことが出来ないんですよ、折角の現場の声が聞こえないもどかしかが残念です。

メクレンブルク伯爵はごく普通の門閥貴族で大げさでなんかランズベルク伯を思い出しましたよ、可もなく不可もない極点的な門閥貴族ですね。相談等はしてもしょうがないタイプふむ員数あわせて集めたような人材だね。

エーレンベルク元帥は子爵です、元帥本来は仕事だけど皇女が来るというのでお出迎えしてくれました、きっと帰ったら書類の山でしようすみませんね。此処でも当たり障りのない話ばかりで終わってしまいました。やっぱ1対1じゃないと話せないね。

やって来ました、苦節6年8ヶ月会いたい会いたいと思っていた、グリーンメルスハウゼン子爵家へ今日突撃です。ワクワクしますね到着するとグリーンメルスハウゼン子爵とカロリーネがお出迎えしてくれました。おおっ初めて見るがこの頃確か67歳ぐらいか未だ未だ元気に見えるこの老人が彼のグリーンメルスハウゼン文書を遺した訳ですね、今回は誰がその文書を手に入れるんだろうか気になるね。

早速ご挨拶「この度はお宅にお呼びいただきありがとうございます」
「皇女殿下には我が館に行幸頂き誠にありがとうございます」

よし此でアポの準備ぐらいは出来たね、後はどのように話をするチャンスを作るかだね。

カロリーネさんは控えめな性格で表に出てこないタイプですね。お爺さんと一緒に目立たぬような感じですよ。

こうして9月から始まったお宅訪問は順当に進んでるです。

第十五話 暗雲（前書き）

書いてて感情移入してしまった。

第十五話 暗雲

帝国歴477年12月

■オーデイン ノイエ・サンスーシ テレーゼ・
フォン・ゴールデンバウム

グリーンメルスハウゼン爺様に初遭遇してから既に3ヶ月近くその後会いに行っても軍務や領地へ行っているとかで全然会えません、こりゃ困った避けられているのでしょうか。カロリーネに聞いてもちやうど都合が悪いらしいですと言われています。何とかせねばあかな。

■オーデイン ノイエ・サンスーシ 小部屋

「グリーンメルスよテレーゼに会ってやらんのか？」

「今少し資質をみております」

「そちが見て後どのくらいじゃ」

「年明けにはよいかと」

「どのような事を聞きたがっておるのじゃ」

「カロリーネによると陛下の若い頃の話色々聞きたいからと仰っているそうです」

「ふむあの頃のことか」

「ですなあこのころのこでしょう」

「父の威厳は大丈夫かの」

「陛下のお心もテレーゼ様なれば判りましょう」

「まあそうじゃの」

「恐らくその話は口実でありましょう、相当に政治、歴史、軍学などに興味を持たれておりますからそちらの話がメインかと存じます」

「これは楽しみじゃ逐次伝えるように」
「判りました」

「シュザンナの方は大丈夫か」
「こちらでも手練れを付けておりますれば」
「うむ頼むぞ」
「はっ」

帝国歴477年12月24日

■オーデイン ノイエ・サンスーシ テレーゼ・
フォン・ゴールドンバウム

本日はクリスマスです。この時代にもキリスト教は廃れたようですがクリスマスは有るのです不思議だね♪

お母様は臨月なので参加せず、宮殿でパーティーよりはヴェストパーレ男爵邸でパーティーをすることにしました。

在校生や教え子さん達が皆さん着飾って来ています、男性は居ないです女だけのパーティーです。

クラちゃんブリちゃんリアちゃんエルちゃんカロちゃんみんなかわいく着飾っています、話すことは誰そのの御曹司は格好いいとか誰それは嫌だとか、かましいですよ。ヒルダさんもマグダさんも来てますから話が弾みます。

聞いているとヒルダさんこの頃から真面目ですね、マグダ姐さんはこの頃既にパトロンを考えているような口調ですね早い早いですね。9時までパーティーしてお開き大人の方はこれからご用があるそうです、知ってますけどね、子供はおとなしく帰りますよふふ。

帝国歴477年12月26日

■オーデイン ノイエ・サンスーシ テレーゼ・
フォン・ゴールデンバウム

クリスマスから2日後、本日お母様の出産予定日です。今までなら何らかの妨害が何者からか行われてきたのですが今回はそれに鑑み身元のしっかりした者を付けていましたので安心できるそうです。大きなおなかで辛そうなお母様は先ほどから陣痛がして分娩室へ入って行かれました、私のこともありますので出産後の処置に3人が入り処置するそうです、此なら相互監視が出来ますから安心ですね。

分娩室に入って2時間あまり経ちますが未だに出てきません心配です。

3時間ほどでやっと出てきましたが、侍従長の顔色が悪いです。

「まさかお母様が何かあったのですか？」

「いえ侯爵夫人はご無事ですがお子様の方が……」

「子供がどうしたのですか？」

「お生まれに成ったのですが呼吸をしておらず懸命の処置も虚しく先ほどお亡くなりになりました」

「え……」

えっ死んだ……死んだ……何で何で……何でこんな所だけ原作と一緒になるの！！

そんなそんなこの子は無事に生まれてきて育つはずじゃなかったの。みんなで守ろうとしたのに何で死んじゃったの……。辛いよ辛すぎるよ幾ら原作がそうだからって、生まれる前から死を宣告されているなんて酷すぎる。あまりに無情すぎるよ！

殺されたんだきつと、兄上みたいにそして私みたいに殺そうとして殺されたんだ！！

ブラウンシュバイクカリッテンハイムかフェザーンか地球教か誰に

しても許さない絶対許さない必ず敵を討つ！！
みてやがれ奴らを地獄の底へ追い詰めてやる！！
自分らの犯した罪を思い出すがいい！！

「皇女殿下がショックで興奮しておられる女官はお連れして差し上げろ」

「皇女殿下さあ行きましょう」

「けどお母様が・・・！」

「ご心配をお掛けしては反って侯爵夫人に障ります」
「判りました」

部屋に帰ってきて一人にしてもらい、この世界に来て初めて思いっきり泣きました、初めて出来る弟か妹大事にしたいと思ったそれなのにそれすら許されないこんな世界の皇帝一家って辛いよね。
会えなかった弟か妹天国で幸せになってね。必ず敵はとるから見守っていてね。

■オーデイン ノイエ・サンスーシ シュザン
ナ・フォン・バーネミュンデ

3人目の御産ですから楽に出来ましたが、生まれた子を見て思わず天を呪いたくなりました。子供は奇形児だったのです、私が悪いのでしようすればいいのか途方に暮れ自分を責めました、目に浮かぶのはテレーゼの笑顔ですこの様な劣悪遺伝子を持つ私がテレーゼの母親として一緒にいられる訳がない、ルドルフ大帝時代であれば母娘共々死を賜るはずです。

たとえば今の陛下でも私はテレーゼと引き離されるでしょう。テレーゼの為ならこんな母親は居ない方がいい死んでしまいたい、丁度手術台上にメスがある、テレーゼこんなお母さんを許しておくれ。

幸せに暮らすんですよ・・・私の大事な大事な可愛い可愛いテレ
ゼ・・・

「ぎゃーーーーー侯爵夫人!!」

第十六話 蜉蝣の命

帝国歴477年12月26日

■オーデイン ノイエ・サンスーシ フリード
リヒ4世

シュザンナが本日儂の子を出産する、テレーゼが生まれて6年又儂の子が出来るとは、帝国を滅びへ向かわせるこの儂に。

出産時には間に合わなかったが3時間後に分娩室へしかし奇形児が生まれシュザンナがショックを受けていると聞き急ぎ向かった。直ぐさま部屋に入ると『きゃー！ー！侯爵夫人！！』と悲鳴が聞こえ見るとシュザンナがメスを右手に持ち自らの喉を突こうとしていた。

儂は無我夢中でシュザンナの手を握りしめた、その際手のひらが切れたが、そんなことは気にならなかった。

「シュザンナやめるのじゃ！」

「陛下お止め下さりますな」

「馬鹿なことはするではない」

「テレーゼ・テレーゼの為にございます」

「テレーゼの為に？」

「私のような劣悪遺伝子の持ち主が母親ではあの子が不憫です」

「その様なことはない！」

「いいえあの子の為に」

「違うのじゃシュザンナ、違うのじゃ」

「は？」

「まず落ち着くのじゃ、そして儂の話をよく聞くのじゃ」

女官達が席を外していくの、グリーンメルの手の者達じゃな

「良いかシュザンナ今回の事はお前のせいではない」

「そんなお慰めを・・・」

「違うのじゃ、此はゴールデンバウムの血なのじゃ」

「陛下のお血」

「そうじゃルドルフ大帝以来ゴールデンバウムの血は汚れ続けてきた、代々死産、奇形児、異常者などが多数出てきて居るのじゃ、だからシュザンナおぬしのせいではない」

「しかし」

「儂の子の内4人は流産、9人は死産、9人が成人前に死んでおる、儂の兄弟も7人が病死じゃ、ゴールデンバウムの血は濁り生命力が衰えておるのじゃ」

「しかし私の血にも有るやも知れません」

「テレーゼを見よあの子は五体満足で何不住無い体で生まれてきたではないか、これがシュザンナお前の功績じゃ」

「陛下」

「テレーゼの為に前回は必要なのじゃ母親を失ったとしたら、どれだけ悲しみ傷つくであろうか、そんなことをするでない」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「陛下判りました、テレーゼの為に私は生きます。テレーゼを守り
慈しみます」

「判ってくれたかシュザンナ」

「はい陛下、あっお手が」

「よいよいシュザンナが無事だったのじゃこんな傷何ともないわ」

「お手当をせねば成りません」

「たれぞ陛下のお手当を」

「さて、シュザンナよ。テレーゼが非常に興奮しているそうじゃ、此から参ろうぞ」

「陛下お供いたします」

「親子三人で語ろうぞ」

帝国歴477年12月26日

■オーデイン	ノイエ・サンスーシ	テレーゼ・
フォン・ゴールデンバウム		

ちくしょうちくしょうワンワン泣いていると、女官がお父様とお母様が会いに来てくれたと伝えに来てくれた。お父様とお母様が来てくれた、悲しいはずなのに来てくれたすぐに会いたい、走って出て行った。

「お母様ー、お父様ー」

「テレーゼー」

「テレーゼよ」

「お母様、お母様赤ちゃんが赤ちゃんが……」

「テレーゼ残念だけど駄目でした」

「殺されたのですね！」

「テレーゼ其れは違うぞ」

「お父様違う訳無い！」

「テレーゼ本当に違うのよ」

「お母様まで悔しくないのですか！」

「テレーゼ落ち着きなさい、そしてよく聞きなさい」

「お前には辛いかも知れんが、此はゴールデンバウムの宿痾なのじ

や」

「宿痾？」

「そう長い間溜まり溜まった悪いところじゃ」

「悪いところ」

「幼いお前には辛い、我々の血では赤ん坊が育ち辛いじゃ、そのため今回の子も死んでしまったのじゃ」

「テレーゼご免なさい貴方に弟を生んであげられなくて」

「お母様が悪いんじゃない」

「お母様もお父様も悲しいんだから、三人で赤ちゃんが天国で幸せになれるように祈りしようよ」

「テレーゼそうですね」

「テレーゼそうじゃな」

「今日は一緒に寝ましょう」

「お母様お体は大丈夫なのですか」

「大丈夫ですよ」

「儂も一緒に良いかな」

「はいお父様」

「身支度をしましょうね」

「お父様お母様、だいっすき」

両親と寝る準備しながら今回のことを考えていた。

今回は本当に死産だったのか、怒り狂ったがお父様お母様が違うと
いってくれた、可哀想な弟よ天国で幸せにしておくれ。

ゴールデンバウムの血か、確かに遺伝子異常が多い系統だし生命力
が弱っているのか。お父様お母様を悲しませ無い為に私がしっかり
しないと、今日は怒りに任せて切れてしまったけど、命を守る為に
冷静さを強化しないと駄目だ。

「テレーゼそろそろ寝ましょう」

「はいお父様お母様」

■ オーディン 某所

「ハハハハハようやった」

「あの者見事に任務を成功させてくれました」

「そうよ、一時は失敗したかと思うたが見事にやってくれた」

「流産を狙いながら其れが失敗したときの為に奇形児と言う次作を行っておりました」

「奇形児とはゴールデンバウムの血のなせる技か？」

「其れもございますが、フェニトイン、プリドミン等の薬を使うと奇形児率が非常に上がるのでございます」

「なるほど其れは此からもつかえるの」

「御意」

「あの者には此からも逐一繋ぎをするようにせよ」

「御意」

「ハハハハハアーハハハハ」

第十六話 蜉蝣の命（後書き）

黒幕が動いていました。

第十七話 グリンメルスハウゼン子爵（前書き）

やっとグリンメルスハウゼン子爵の話に、ヤンが出るのはいつの日か。

第十七話 グリンメルスハウゼン子爵

帝国歴477年12月27日

■オーディン ノイエ・サンスーシ ベーデミュンデ侯
爵邸 テレーゼ・フォンゴールデンバウム

昨日は悲しいことがありました。弟が生まれそして死にました。取り乱し酷い状態でしたが父様母様によって慰められ勇気付けられました。今日から又頑張ろうという気力がわいてきました。

朝起きると父様母様が見守ってくれていました嬉しかったです。小声で父様が『テレーゼや此からのことを思うのであれば年明けにもグリンメルスハウゼンに会ってきなさい』と言ってくれました。私は『はい』と返事をしました。

その後支度をして朝食を食べながら赤ちゃんのお墓はどうなるのと聞くと皇室専門の墓地に埋葬されたとのこと、早いと思ったら生きられなかったので早く天国へ送ってあげるとのことでした。そんな風習があるのかと思いました。

取りあえず午後にお参りに行き冥福を祈りました、人生ってむなしいね。

帝国歴478年1月1日

■オーディン ノイエ・サンスーシ テレーゼ・フ
ォンゴールデンバウム

新年になりました。今年こそは良い年でありますようにと大神オ

ーディンに祈りました。

さらに元日本人として初日の出を見ながら天照大神に祈願しました。

新年ですので身支度をした後いつもの通り、黒真珠の間で新年パーティーです。

喪中の習慣がないのか或いは帝室としての義務でしょうか、父様は若干思い込んだような顔で笑顔を無理に作って居るようです。

私としては欠席したいのですが義務ですから仕方ありません。いくら転生者でも今の六歳児の精神がメインですので、身近の死にはメンタル面で非常に辛いです。

皆さん王子死産を知っていますが、さすがは貴族神経が図太いからイバル死んで嬉しいのか、全然平気で談笑してますよね。

兄上は軽いため息を吐きながら談笑に応じています。

マグダ姐さん、（いやねお姉さんと言うより姐さんじゃないかと我ら6人組では呼んでるんですよ）とヒルダお姉さんが来てくれて慰めてくれます、因みに敬語は止めてと言ってるんですが、正規の時には矢張り敬語なんですよね。

「皇女殿下この度はご心中お察しいたします」

「男爵令嬢お心遣い痛み入ります」

「皇女殿下のお心を思うと胸が痛みます」

「伯爵令嬢お心遣い痛み入ります」

取りあえずの社交辞令をして少し離れた所で雑談。

普段は敬語なしでお願いしているのです。

「弟さんは残念な結果だったわね」

「死産だそうですね」

「そうなのです、外因的なことを聞いたのですが正真正銘の死産だ

と母から聞きました」

「気を強く持ちなさいね私も出来る限りのことをしますわ」

「私もお手伝いできることはします」

「お姐さん、お姉さんありがとうございます、頑張りますんで今年もよろしくお願いいたします」

「ええ今年もよろしくね」

「今年もよろしくおねがいします」

「そう言えばお姐さん、グリューネワルト伯爵夫人とお友達になつたそうですね」

「ええアンネローゼがみんなから爪弾きにされて気の毒で母性本能を擽られましたわ」

「伯爵夫人はどのようなお方のですか」

「だいたい原作で知ってるけどね、男爵夫人の見識を聞きたいのがね。

「私も聞きたいですね」

「彼女は凄く大人しくて物静かで優しく料理も上手よ」

「綺麗な方ですよね」

「そうですね」

「テレーゼ様」

「クラちゃんブリちゃんリアちゃんエルちゃんカロちゃん」

「今年もよろしくおねがいします」

「今年もよろしくおねがいします」

ワイワイしながら新年は始まっていったのです。

帝国歴478年1月7日

■ オーディン

テレーゼ・フォンゴールデ

ンバウム

今日この瞬間こそ待ちに待った時、父様が会いに行けと勧めてくれたのだ全身全霊をかけ力を見せよう。果たして鬼が出るか蛇が出るか、グリーンメルスハウゼン爺さんの裏の顔が有れば正体を見せてもらえるか正念場だ。

■オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸 リヒャルト・フォン・グリーンメルスハウゼン

本日テレーゼ様と初めて会談する、私が見てきた限りテレーゼ様は大器だ。年齢不相応の冷静さ知恵も有り機敏も効き政治経済歴史軍学等に多まれなる興味を引いている。この姿は幼き頃の陛下を彷彿とさせるものじゃ、儂も久々に朝から興奮しておる新たな昇竜を見つけたのかも知れんからな。
テレーゼ様がいらっしゃったのお手並みを拝見させて貰いましょうかの。

■オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸 テレーゼ・フォンゴールデンバウム

「皇女殿下このような老人の元へ行脚頂き名誉この上なき事、誠にありがとうございます」

「グリーンメルスハウゼン子爵この度はお招き頂き誠にありがとうございます」

「ささどうぞ」

「痛み入ります」

ふむ普段と違う客間に通されたわ秘匿の意味がある訳だね。

「皇女殿下におかれましてはこの老人に何をお聞きに成りたいのでしょうか？」

「父様の若き頃の思い出話をして頂きたくて参りました」

「皇帝陛下のお話でございますか」

「そうです」

「皇帝陛下は若かりし頃よりご聡明であらしやりましたでございます」

「そうでしたか」

「皇太子時代においても其れは其れはご立派でございました」

ふむ試してますね、目が面白そうに見えますよ。そろそろ聞きますかね。

「そうですね若き頃は優秀な兄、才気に富む弟の間で無気力凡庸愚物として自身を韜晦なさっていたのですからね、その為に町の飲み屋の店主に借金を作り皇帝次男が土下座したんですから、天晴れとか言いようがありませんよね、其処まで出来るお父様を尊敬しております」

「……殿下」

言い過ぎですかね。

「そろそろ相談相手が欲しかったのです、腹を割ってはなせる相手が」

「其れが私だと仰るのですか？」

「もちろん、父からグリーンメルスハウゼン子爵へ会いに行けと勧めた事もあります、宮廷や貴族の噂話や動向を長年にわたりお調べしているとか何とか」

「さようでございますか」

「そろそろお互い猫をかぶるのは止めませんか」

「……」

「・・・・・・・・」

お互いで睨めっこです

「ふふふふふ」

「ははははは」

「殿下には負けましたわ」

「勝ちましたね」

「して何をお聞きしたいのですかな」

「グリーンメルスハウゼン子爵貴方は父の影の部門を取り仕切ってますよね」

「はてさて」

「ここへ来ても知らんぷりですか、色々なスキャンダル等を調べてらっしゃるそうですね」

「ふむ、よう知っておられますな」

「宮廷内で話を聞いていて次第に判りましたよ」

「さて殿下はこの老人に何をさせたいのですか」

「取りあえずは」

「第一に父が華麗に滅べは良いと考えていた帝国再生準備における人材確保」

「第二に帝国内部の叛乱勢力の確定及び内部への浸透」

「第三に叛乱軍に対しての軍とは別の情報組織の整備」

「第四にフェザーン対策」

「第五に皇族の身边警護、私は生まれたときに暗殺されかかってますからね」

「取りあえず今の年齢ではこのぐらいが精一杯でしょう」

「殿下流石ですな。とても6歳には思えない考えです」

「できますか」

「できましょう、陛下よりも殿下の好きにさせよとのお言葉を貰っ

ておりますから」

「グリーンメルスハウゼン子爵此からよろしくお願いいたしますね」

「この老人残りの人生のすべてを殿下に捧げましょうぞ」

「今日は有意義な日でした。其れと殿下では無くテレーゼで良いです」

「ではテレーゼ様今宵は良き日でございました、お気おつけて」

「では失礼いたします」

よっしゃ矢張りグリーンメルスハウゼン子爵はスパイマスターだった原作じゃ其れらしい描写がありありだった物ね、其れを言う訳にはいかなかったけど何とか出来た。父様感謝でございます、此から忙しくなるぞ、人材確保が第一だラインハルトに取られてたまるかこっちが先取りだー！

■オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸 リヒャルト・フォン・グリーンメルスハウゼン

今宵テレーゼ様と話してみても先ほどの感が間違いで無いと身にしみて判った。

まさにあの才氣韜晦具合正しく陛下の御血を色濃く引いておられる。あれほどとは思わなんだ若干6歳とは末恐ろしいぐらいじゃ。

男児であれば確実に皇帝として中興の祖となれる素質じゃ。

しかし男児で有れば今この世には居ないじゃろう、女子に生まれたのは天の采配としか思えん。

此から短い人生精一杯陛下とテレーゼ様の為に誠心誠意尽くそうぞ。早速明日にでもケスラーと話し合わんといかんの、出来るだけ早く陛下と話しなければならん。

忙しいが面白い年になりそうじゃ。

第十七話 グリンメルスハウゼン子爵（後書き）

第五次イゼルローン攻略戦、エル・ファシルの戦い、帝国領侵攻作戦のプロットは出来てるのに其処まで話が行かない状態、果たしていつになるやら。

第十八話 それぞれの新年（前書き）

亀のような歩みです。

第十八話 それぞれの新年

帝国歴478年1月8日

■オーディン

グリンメルスハウゼン子爵邸

「ケスラー大尉来たか」

「閣下お呼びだそうで、本日は何を」

「昨日テレゼ様にお会いしたのじゃ」

「皇女殿下とですな」

「テレゼ様は睨んだ通り、いやそれ以上の逸材だったわ」

「閣下それほどのお方ですか」

「そうよあの年齢であの知謀冷静は陛下以上じゃ、楽しみじゃわ」

「して我々はどの様な対応を」

「我らは全面的にテレゼ様をご支援いたすのじゃ、各リーダーに通達行うのじゃ」

「はっ、では幼年学校の方はいかが致すのですか？」

「あの者の動向は今まで道理に逐一記録し探るようにせよ」

「しかし宜しいのですか、あの者の危険な言動を陛下とてお知りでしょうに」

「陛下は知っていて敢えて目を瞑っておられるのじゃ」

「其れは又どの様な考えで」

「陛下のお考えは追々判るであろう」

済まぬのケスラーいずれ明かすときも来よう。

「来週テレゼ様と会談するで、ご要望に添った資料を集めよ、そしてケスラー貴官も同伴せい」

「はっ準備を整えます」

「此から益々忙しくなるぞ心せよ」

「はっ」

帝国歴478年1月8日

■オーディン

幼年学校寄宿舎

「キルヒアイス聞いたか」

「何をでしようかラインハルト様」

「あの男の寵姫が男児を死産したそうだ」

「それはなんというか」

「キルヒアイス愉快だな、あの男は姉上を奪い取ったのだ、その報いに子を取られたのだから」

「ラインハルト様・・・」

「子だけではない、いずれあの者のすべてを奪い取り惨めな死を与えてやろう」

「ラインハルト様お声が聞こえてしまいます」

「キルヒアイスは心配性だな」

「ラインハルト様」

帝国歴478年1月8日

■オーディン ノイエ・サンスーシ グリユーネワルト伯爵邸 ア
ンネローゼ・フォン・グリユーネワルト

新しい年が始まり私がここへ来て最初の新年でしたね、去年までならラインハルトとジークが居てくれて楽しい年明けでしたのに・・・
・ラインハルトやジークは風邪など牽いていないでしようか心配です、けれどラインハルトやジークを呼ぶ訳にもいきませんし、マダ

ダレーナとドロテアとお茶会でもしましょう。

帝国歴478年1月8日

■オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸 テ
レーゼ・フォン・ゴールデンバウム

昨日のグリンメルスハウゼン爺さんとの会談で全面的な支援を約束して貰い一先ず安心です。

来週も会談しその時に必要な人材組織資金等の大まかな流れを決めるつもりですので、人材については原作知識をフル動員しながら転生者とばれぬように、如何にも偶然を装って決めていかないと危険ですね。

ラインハルト元帥府の主要メンバーとかは確実に引き込まないと駄目ですね、どうやら父様はラインハルトにも期待しておられる様なのである程度まで、ラインハルトが出世するのは此方も黙認ですね。

取りあえずはミッターマイヤーとロイエントール、ミュラー、メックリンガー、ケスラー、アイゼナツハ、ケンプ、フアーレンハイト、ルッツ、ワーレン、ビットェンフェルト辺りか。Mrレンネンは要らねー、義眼はうちの家憎んでるし猛毒だから生理的に拒否したい、そうそう忘れちゃ行けないメルカッツ、陸戦じゃ原始人かリユーネブルクだけど危険が一杯なんだよな、閣僚じゃシルヴァーベルヒ、リヒター、ブラツケ、オスマイヤー、マインホフ、ブルックドルフ辺りを引き抜きたいな、そうなると領土がないと実験不可能だな、どっかの星貰えないかな。

バイエルラインやベルゲングリューンとかも超必要だし補給のベテランも絶対要るな、けど原作じゃ同盟のキャゼル又先輩かシンクレア・ゼップだったけか？しか思いつかんぞ。
ともかく来週の話し合いからはじめなきゃ駄目だね。

帝国歴478年1月8日

■オーディン 帝国軍士官学校
イエントール

オスカー・フォン・ロ

新年最初の授業が終わった、人の噂も七十五日と過去の偉人は言ったそうだが其れは嘘だと断言できる。既に1年半経つが未だに思いついたくもないあの事件の為に親衛隊からは目の敵にされ、女どもからも敬遠されまくっているのだから堪らん状態だ。マールバッハの伯父も相変わらず無茶振りをしてくるし、最近では自分の娘俺の従妹に当たるリヒャルダと結婚させ跡継ぎにしようと企んでいるらしい。皇帝陛下の愛娘の皇女殿下の覚え目出度い若手士官としての名声を望んでいるようだ。

冗談じゃないあの娘のお陰で散々だったんだ、あれは俺にとっての疫病神だ災厄の女王と言っても良いだろう、あと半年か早く卒業したい卒業して一刻も早くオーディンから離れたい離れるんだ！！

第十九話 ロリとの遭遇（前書き）

続きは第二十話です。

これから仕事行ってきます。

第十九話　ロリとの遭遇

帝国歴478年1月14日

■オーデイン　グリーンメルスハウゼン子爵邸
フォンゴールデンバウム

テレーゼ・

グリーンメルス爺様との会談から、一週間待ちに待ちましたいよいよ今日から爺さん達と悪巧みの開始です。

爺様の館へ向かうといつもの小部屋へ案内されました。相変わずの日向ぼっこ提督とはとても言えないシャッキリした姿勢で迎えてくれます。

「テレーゼ様よくお越し下さいました」

「グリーンメルスハウゼン子爵今日もよろしくお願いしますね」

爺様は考えながら一言。

「グリーンメルスハウゼンでは長すぎますな、テレーゼ様何か呼び方がありますかな？」

ふむ頭の回転とかも試されていますね流石です。パット考え。

「では、ラテン語で耳を意味するアウリスではいかかでしょうか？」

爺様目を細めて。

「ほう、博識ですな良い響きです、ではアウリスとお呼び下さい」

「よろしく願いますね、アウリス殿」

「アウリスと呼び捨てで構いませんぞ」

「教えを請うのに呼び捨てでは余りに失礼かと」

爺様はふむふむと満足そうにうなずいている。

「判りました私がテレーゼ様を一人前に育て終わったとき呼び捨て

にして貰いますぞ」

ニヤニヤしてますね、ものすごく楽しそうだ。

「はいよろしく願います、アウリス殿。それと私に様付けも要らないのですが」

「流石に其れはご勘弁を」

「駄目ですか」

「其処までは儂が持ちませんわ」

「判りました其れはあきらめます」

「御意」

「御意も止めましょう、はいか判りましたで良いでしょう」

「判りました」

爺様も納得してくれたらしく、終始にこやかに進みますね。

爺様が身を正して真剣な顔をして此方へ向かい直した。

「テレーゼ様先週頼まりました人材に関するリストで御座いますが帝国臣民250億の中からですから中々調べが進みません」

「其れはそうです其処まで無茶は申しません」

嬉しそうですね又試しましたか、食えない爺様ですね、まあ其れが其れで楽しいんですね。

「軍人の中でなら幼年学校ですが非常に有能な人物がおりますぞニヤニヤしてますね、判りますよ金と赤でしょ、判ってて言ってるな、けど金は知ってるが赤は知らないふりをしないとね。」

「ほう其れはどんな人物ですか、私の知っている幼年学校生だとミユッケンベルガーとフレーゲルしか知りませんが、ミユッケンベルガーは期待できそうですがフレーゲルはねー」

「いえいえグリューネワルト伯爵夫人の弟です」

全く危険物を使いこなせと言うのですかね、いやからかってるんで

すね、ニヤニヤ。

「ああラインハルトですね、父様と一緒に会いましたよ。父様を見るあの目あの顔あの内面から出る憎悪がよく見えました。

能力的には非常に優秀に見えますね、けど彼は猛毒ですね今の私には使いこなせないですね。

今は様子見で良いでしょう父様の様にね」

爺様其処までと言う顔をしてみるね、爺様クルーじやなきや駄目だよフフ。

「そうなりますと優秀な人材については部下にリストを作らせておきますので、その者呼んで宜しいでしょうか」

「無論ですその様にご苦勞して頂いている部下の方に会わないのは失礼に当たりますので是非お会いしたいです」

「判りました」

そうすると爺様はインターホンで誰かを呼んでます、暫くするとノックがされて20代中盤ぐらいの士官が入ってきました。

「閣下ケスラー大尉入ります」

「うむ、ケスラー大尉よう来た、テレーゼ皇女殿下じゃ、殿下私の部下で取り纏めをしているケスラーと申します、ケスラー皇女殿下にご挨拶を」

おー来ましたよーケスラーです、ロリですよロリとの遭遇ですよ、ケスラーにしては私はドストライクゾーンです。

「皇女殿下ご尊顔を賜り恐悦至極で御座います、小官グリーンメルスハウゼン閣下にお仕えする、ウルリツヒ・ケスラー大尉と申します。元来平民たる臣が皇女殿下に直接ご挨拶するなど不敬の極みで御座いますが平にご容赦をお願いいたします」

なるほど爺様ケスラーも出汁に使ってるな。ケスラーも気の毒に此処は助けてあげましょう、私の中ではケスラーの信頼度凄く高いから、仲良くしたいいね。

「ケスラー大尉その様にかしこまらなくても構いません、私達は同士です皇族、貴族、平民の差など何がありました。同じ赤い血の流れた人間じゃないですか、そんなへりくだった挨拶は無用ですよ。私のことはテレーゼで良いですよ」

ケスラー驚いてますそりゃそうだよ、六歳児の言うことじゃないし。

「その様な恐れ多いことを」

「返って敬語を使われる方が気になりますよ」

「ケスラーよテレーゼ様が良いとっしゃっておるのじゃテレーゼ様とお呼びすればよい」

「御意」

「じゃあ改めてケスラー大尉テレーゼ・フォン・ゴールデンバウムです此からよろしく願いますね」

「テレーゼ様ウルリッヒ・ケスラー大尉と申します、此よりテレーゼ様にお仕えし足します、どうぞよろしく願います」

「よいの此で顔合わせは終了じゃな。早速話し合いに入るかの」

「よろしく願いますね」

「判りました」

「ケスラー資料を」

「御意」

第二十話 人材収集計画

帝国歴478年1月14日

■オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸 リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ様が本日いらっしゃる、どの様におもてなしするか楽しみじゃな。
いらっしゃったようじゃ、シャキツとした姿勢と眼光でお出迎えじゃな。

「テレーゼ様よくお越し下さいました」

「グリンメルスハウゼン子爵今日もよろしくお願いしますね」

ほうほう驚かんな、流石じゃちと試してみるかの。

「グリンメルスハウゼンでは長すぎますな、テレーゼ様何か呼び方がありますかな？」

「では、ラテン語で耳を意味するアウリスではいかかでしょうか？」
ほう速攻で返した来たのしかもラテン語とは流石じゃ。

「ほう、博識ですな良い響きです、ではアウリスとお呼び下さい」

「よろしく願いますね、アウリス殿」

「アウリスと呼び捨てで構いませんぞ」

「教えを請うのに呼び捨てでは余りに失礼かと」

立派じゃな師を尊ぶ心、普通はとても出せん。

「判りました私がテレーゼ様を一人前に育て終わったとき呼び捨て

にして貰いますぞ」

嬉しくてついつい顔にできてしまうの。

「はいよろしく願います、アウリス殿。それと私に様付けも要らないのですが」

さて本題に入るかの。

「テレーゼ様先週頼まりました人材に関するリストで御座いますが帝国臣民250億の中からですから中々調べが進みません」

「其れはそうです其処まで無茶は申しません」

やはりちゃんと判ってらっしゃる、人材としてあの者の話をして見るかの一度お会いしておるし、どの程度の人物眼があるかの。

「軍人の中でなら今幼年学校ですが非常に有能な人物がおりますぞ」

「ほう其れはどんな人物ですか、私の知っている幼年学校生だとミユッケンベルガーとフレーゲルしか知りませんが、ミユッケンベルガーは期待できそうですがフレーゲルはねー」

テレーゼ様すつとぼけておりますな。

「いえいえグリューネワルト伯爵夫人の弟です」

ニヤツとしましたな判ってらっしゃる。

「ああラインハルトですね、父様と一緒に会いましたよ。父様を見るあの目の顔あの内面から出る憎悪がよく見えました。

能力的には非常に優秀に見えますね、けど彼は猛毒ですね今の私には使いこなせないですね。

今は様子見で良いでしょう父様の様にね」

ほう僅かな会見で此処まで人物鑑定をするとは、儂でもかなわんなそろそろケスラーを呼ぶかの。

「そうなりますと優秀な人材については部下にリストを作らせてお

りますので、その者と呼んで宜しいでしょうか」

「無論ですその様にご苦勞して頂いている部下の方に会わないのは失礼に当たりますので是非お会いしたいです」

受け答えも完璧じゃな、しかもケスラーに対しての受け答えも皇族貴族平民の身分差も考慮しない大らかさ、此こそ王者のカリスマじやものすごく楽しみになってきたの。

■オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸 ウルリッヒ・ケスラー

初めて皇女殿下にお会いし驚いた6歳なのにあの威厳カリスマ聡明さ末が楽しみな女傑と成るはずだ、私がへりくだって挨拶したとき、同士だからと名前と呼んでくれと言われ驚いた。

しかも身分に躊躇しない大胆さ此は本物だ、これほど嬉しいことはないだろうこれからが楽しみだ。

閣下と共にお仕えに足るお方だ。

■オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸

「さて其れでは今回の趣旨を説明します。

此から数年をかけて銀河帝国の病巣を取り除く外科手術と考えて下さい。

その為の優秀な人材がまず必要となります。

そこで人材のリスト作成をお願いします」

「諒解しました」

「まず忠誠心な厚い優秀な軍人を此は宇宙艦隊司令官候補、幕僚参

謀候補に当てる艦隊派。

的確な作戦を立てられる作戦派。

補給担当、後方支援等の後方派。

陸戦部隊。

また現在の技術部主流から外れた外された所謂勢力争いで負けた組などから優秀な人材を密かに秘密研究所へ移転させる。

帝国内、叛徒内、フェザーン内に作るスパイ組織の構成員。

政治に関しては、今までの政治に囚われない斬新な政策を考えられる者。

社会整備、インフラ、流通、経済等に詳しい者。

尚門閥貴族の紐付きではなく出来る限り下級貴族平民等から人材を集めてる。

こんな所ですね」

爺様もケスラーも驚いていますね。とても六歳児が考える物じゃないと、仕方がないですよ死にたくないですから、このまま座していればラインハルトに滅ぼされる可能性が大きいのですから。

爺さんとケスラーが頷き有ってから返事が来たね。

「テレーゼ様のご指摘誠に理にかなっております、全力をかけて行動に移します」

「よろしく願いますね」

「判りました」

「其れでは私の方も色々な所を廻り此と思う人材をピックアップします」

「その者達の調査はお任せあれ」

「其れでは失礼するわね」

「はっお気御付けてお帰り下さい」

第二十一話 黒いテレーゼ（前書き）

黒いテレーゼ参上です

第二十一話 黒いテレーゼ

帝国歴478年4月12日

■オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸 テレー
ゼ・フォン・ゴールデンバウム

秘密会議開始から4ヶ月日々精進の毎日です。

2月の誕生日は去年のような派手な物ではなく知り合いを招待して行いましたよ、我ら6人衆母娘にマグダ姐さん母娘、ヒルダ姉さん母娘とか若干名です、だってフレーゲルなんか来たら嫌じゃないですか。

そんな訳で男子禁制状態でパーティーしましたよ。

最近お母様はスッカリ落ち着かれて、にこやかで子煩悩なお母さん状態です。

原作やOVA板のベーネミュンデ侯爵夫人と全く別人状態ですよ。お父様もよくおいでになり一緒にオペラ鑑賞とかに出かけていきます。

まあOVAで見てもお父様はお母様を巻き込みたくない為に疎遠にしていた訳ですから、巻き込む心配が無くなりつつあるので安心してきているでしょうね。

逆にアンネローゼへのお渡りが非常に少なく宮廷では無理矢理押し付けられたから気に入らないと言う噂がまことしやかに流れていきます。

アンネローゼが可哀想に感じましたね、きっとラインハルトは怒り心頭でしょうね。

姉上を奪った上に馬鹿にしていると。益々憎悪が増えそうです。

へたすれば、バーネミュンデ侯爵夫人事件じゃなくグリユーネワルト伯爵夫人事件が起こるかも知れないですね。

アンネローゼがしなくても、お付きの者が暴発するかも知れない。そんなことはさせませんがね。

毎日お勉強と悪巧みと各種行事に参加とか大変です、お友達や姐さん達との付き合いも非常に大事ですから、なんと言っても癒されません。特にエルちゃんが可愛いです萌えますよ。

ともかくオーバーワークですけど死にたくないので頑張ってます。どこぞのニート侍の【働きたくないでござる】じゃなく死にたくないでござるですね。

7月には士官学校の卒業式に行く予定を立てています、待ってるよロイエンタールふふふ。

9月か10月ぐらいに同盟軍がイゼルローンへ侵攻する可能性があるのでその対策も立てねば行けないところです。

そして今日も定期連絡会で、爺様とケスラーとで話し合いです。相変わらず爺様はニコニコ、ケスラーは考えてる顔です。

まずは爺様が切り出して。

「テレーゼ様今回の趣旨はいかがしますかの」

「まず、技術的計画を述べますので後で照査して下さい。なお此から述べる計画は研究所が出来た段階で行う予定です。

研究所ですが明からさまに研究所としたらばれますのでダミーを作ります。」

「テレーゼ様なぜ即在の技術部では駄目なのですか」

ケスラー其処が肝心だよね。

「言ってみれば現在の技術部はシャフト大将の独壇場です。」

シャフト大将が優秀ならば構わないのですが彼は政治力で今の地位を築いたそうです。

さらに自分の地位を脅かす可能性のある人物を地方や前線に飛ばし自分の子分やイエスマン自分より劣る者で技術部を固めています。其れでは研究が出来ませんし横やりが入る可能性が多きく情報漏れが懸念されます」

「確かにシャフト大将には良い噂は聞きませんな」

「さようじゃの」

「そこで秘密研究所です。研究所は地方星域の僻地に作り例えば軍用缶詰工場とかに化けさせます、其処へ当該者達を職員として配置し研究させます、こうすればシャフト達は左遷されたと考えるでしょう」

「いい手ですね」

「そこで研究して貰うのは次のような事です」
ケスラーメモを取ってますね。

「第一に叛徒の戦艦か巡航艦を数隻捕獲し艦の運行用ソフトを解析しそのデータを我が軍の物と比べて下さい、此は敵の方が運行用ソフトの出来が良いとの噂が有る為です」

実際同盟軍のソフトの方が優れてるんだよね。

「第二にそれに関するのですが艦船の自動操縦システムの強化と自動砲撃システムの開発です」

「それはどう言うことで？」

「まあ敵に突っ込ませるってかんじですかね」

シトレがイゼルローンに無人艦突っ込ませたしね此方もお返しで。

「あとは気がついたら追々研究目標に入れていきましょう」

「判りました」

爺様とケスラーも頷いてます。

「今度は人口についてです。取りあえず質問は後でまとめて答えますのでよろしく。」

まず政治犯及び共和主義者の大まかな罪状及び人数、教育程度、思想的な過激度、労働条件、家族、健康状態そしてどの星系のどの星に何人居るか、その星の宇宙港へ何日で集められるか。

その星からイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごと位に資料を集めて下さい」

「次に殺人、強姦、重過失傷害、放火等の重犯罪者のリストと収監されている監獄そして集めてイゼルローンまで何日で到着するかを同じく三年ごとに資料を集めて下さい」

「次に叛徒から連れてきて農奴と成っている者達の居場所、そして同じくイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごとに資料を集めて下さい」

「また叛徒軍俘虜の収容所と其処にいる人数及び待遇そしてイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごとに資料を集めて下さい。取りあえずは以上ですね」

2人とも不思議がってますね。ケスラーが質問してきますね。

「テレゼ様資料集めは可能ですが、何に利用なさるのですか？」
秘中の秘なので今は未だ言えないからお茶を濁しておきますか。

「いずれ叛徒共との戦いと我が軍の捕虜に関しての手に使うんですよ」

「そうですか」

「それと我が軍の捕虜達がどこで何をしているか、待遇等はどんな

のかを調べて下さい、我が国は捕虜に優しくありませんから【生きて虜囚の恥を知り死して虜囚の恥を知らず】ですから彼らに慰問袋を送りたいんですよ、頑張ってください決して見捨てませんと勇気を与えたいんです」

「テレーゼ様なんとお優しいことを」

いや気の毒なものも有るんだけど、絶望の淵にある捕虜達が後々ラインハルトによって帰国できるんだけど、その時少しでもラインハルトに着く人間を減らしたいのも有るんだよね。

それにエコニア捕虜収容所じゃ不正が行われていたからね、慰問袋に入れる予定の品物もピンハネするんじゃないかと、そうすれば同盟の捕虜虐待の証拠になるじゃん。

「所でこの組織の資金源を考えたんですが、吝嗇だったお爺さまの貯めた資金じゃ無いんですか？」

爺様一寸驚いたなビンゴか。

「お爺さまが山ほど蓄えた資金で、お父様が帝位継いだとき財政赤字が綺麗に無くなったそうですよね。

そのあと相当余った資金を、お父様は遊興や建物建築等で使い果たしたと聞いておりますが、其れ嘘でしょ？」

「はっ気づかれましたか、流石でございますな、その通りです。相当量を水増しで請求しましてな、その水増し分を元に色々増やしてきました」

「では研究所とかの資金も大丈夫ですね」

「国家予算の数十倍の資金はあります」

「なるほどね」

推理が当たったね。

■ オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸 リヒャルト・
フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ様がお帰りになったあとケスラーと今日の話を話した。
た。

「テレーゼ様の勘の良さとアイデアは誠に驚くことばかりじゃ」

「まことに、資金源の事など推測で当ててしまいましたから」

「そうよなあ時は些か慌てたわ」

「技術に関しての造形やシャフトの危うさなども優れた観測です」

「ふむそうじゃの捕虜に関する御優しさも好ましいの」

「まことに捕虜もそうですが、判らないのは政治犯等ですね」

「ほんに判らんの、叛徒との戦いで何に使うのやら」

「テレーゼ様の事です考えが有ってのことでしょう」

「そうじゃの」

「ケスラー今日はご苦勞であつた」

「御意」

第二十一話 黒いテレーゼ（後書き）

【G夫人がB夫人に害意を抱いている】て匿名の手紙が届いたりして
W

第二十二話 みんなで企めば怖くない！(前書き)

卒業式は二十三話になりました。

第二十二話 みんなで企めば怖くない！

帝国歴478年5月10日

■オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸 テレーゼ・
フォン・ゴールドンバウム

本日も連絡会議、結構頻繁に此処へ来ると怪しまれるのでアリバイ作りが大変な今日この頃です。

いつものように爺様とケスラーが見守る中答弁開始です。

「テレーゼ様前回ご依頼を受けました研究所の件ですが来年度予算に潜り込ませる様に手配をしました」

「ご苦労様です。これで何とかかなりそうですね。」

所で叛徒には選挙という物があるそうですね、その時は叛徒が好戦的になるとか、以前の資料を見たのですがどうやら今年がその年に当たるようです」

ケスラーが気付いたみたいですな。

「確かにその様な行動パターンが以前言われたことがありましたな。調べてみる価値はありそうですね。警戒しその兆候があるなら迎撃の準備をしないとだめですな」

「お父様や軍部への根回しはよろしくお願いしますわ。今はまだ他人に正体をさらすことは避けたいですからね」

「たしかのそうじやのテレーゼ様のお姿は晒してはならんの、儂が陛下にお伝えしよう」

「では軍部のほうが小官が手配りいたします」

「あとですね、このことを余り広く知られると叛徒やその様な確率を信じていない方々がなにやら騒ぎ出す可能性が有るので、必要最小限でお願いします」

「確かにそうです」

「そうじゃの」

「あとですね、この館に士官学校に有るような戦術シュミレーターを置けませんか？」

「なにをなさるのですかな」

「色々閃いた戦法があるので実際に試してみたいのですよ」

「ほう其れは楽しみですな。ケスラー準備出来るかの？」

「備品の発注が終わっていますので今年中に配備するのは疑念を呼びます。」

申し訳ございませんが、来年であれば損耗分として潜り込ませられます」

「仕方有りませんね。それでは来年まで我慢しましょう、其れまではアイデアとして暖めて置きます」

ケスラーが本当に申し訳なさそうに頭を下げます。

「あと優秀な人材を発見しました」

「ほうテレーゼ様のお眼鏡に叶う相手がありましたか」

「どの様な人材ですか」

2人とも興味津々です。

「今年士官学校を卒業する生徒ですが、オスカー・フォン・ロイエンタール、フリッツ・ヨーゼフ・ビットェンフェルト、アウグスト・ザムエル・ワールンが二年前に士官学校へ視察を行ったとき優秀な人材かと思いました」

「なるほど、では早速三名を調べましょう」

■ オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸 リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

「相変わらずテレーゼ様には驚かせられるばかりじゃの」

「まことに」

「叛徒の攻勢の件頼んだぞ」

「御意」

帝国歴478年5月19日

■ オーディン ノイエ・サンスーシ 小部屋 テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

今日はお父様にお願いしに来ました。お父様は終始にこやかです。

「テレーゼやグリンメルスより聞いたが、可能性が高いのじゃな」

「はいお父様過去のデータを照査した結果かなりの確率で攻撃が来ます」

お父様考えながら。

「そうかでは軍に準備命令を出さねば成らん、しかし外れた場合はどうするのじゃ」

「一つの案なのですが、迎撃艦隊に今期卒業の新規士官を研修として乗せて遠洋航海とすれば幾らでも準備が出来ます」

「つまりは迎撃艦隊は無く訓練艦隊だとして敵を欺くのか」

「そうです。敵と予算と信じない者達を欺きます」

お父様楽しそうです、普段の枯れた雰囲気から目が鋭くなりますね。流石我が師匠、天下一の猫かぶりですね。

「その為に卒業生を遠洋航海に出かけさせる様に勅命を出して頂きたいのですよ、前例がないので現場が渋ると思うのです」

「父も使うかテレエゼはハハハ」

お父様凄く楽しそうです。

「ええ東洋の諺に【立つてる者は親でも使えと】というのがありますから、お父様もお願いしますね」

「よいよい儂は娘には甘いんじゃないハハハ」

「それとお父様、士官学校の卒業式に参加したいのですが良いでしょうか？」

「よいよいどうゆう気じゃな？」

「士官学校に顔を出しておきたいのと、今年度卒業生に原石が居るんですよ」

「ほほ其れはあの時優勝した者かの？」

「はいあの者も入っていますが他にも居りますので」

「よいよい行ってまいるがよい、エーレンベルクには儂が伝えておこう」

「お父様、ありがとうございます」

■オーディン ノイエ・サンスーシ 小部屋 フリー
ドリヒ四世

本日娘がお願いに来た、儂は娘が可愛くてしょうがないからの。
グリーンメルの言っておった同盟の事じゃった。

聞くごとに此はと思う事ばかりじゃった。

弱冠七歳でこの知謀じゃ儂など足元にも及ばん、儂は逃げて居ったからな。

彼の者に会って儂の願いを叶えてくれると思ったが、それ以上の資

質じゃ。

今は只テレゼが儂の期待じゃ、彼の者には悪いがテレゼの礎に成ってもらおうかの。

テレゼが彼の者をどう扱うか楽しみじゃ、其れまでは彼の者の行動は目を瞑る事にしようぞ。

さて近いうちに三長官を呼んで指示しなければならぬな、これは楽しみじゃな。

帝国歴478年5月28日

■オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸 テレゼ・フォン・ゴールデンバウム

ロイエンタール卒業まで一ヶ月一寸となりました。

まずはケスラーが3人の調査をしてきたそうです。

「テレゼ様3人の調査を致しましたが、ビットンフェルト、ワーレンは素行問題等は有りません。

些かビットンフェルトが口が悪く短気なところをのぞけばですが。

ワーレンに関しては非常に優秀です冷静沈着ですし。

しかしロイエンタールは素行が悪すぎます、女癖が悪く何度もトラブル等を起こしています。

あのような者が良いのでしょうか？」

「ケスラー確かに女癖が悪いのは良くないですが其れを上回る資質が有るのでから、一概に切り捨てることはしないですよ」

ケスラー本気で心配してるみたいだね。

「しかしです。あの者の噂ではロリエンタールと呼ばれており、恐れ多くもテレゼ様の唇を奪ったと言うではないですか。その様な不埒で不敬な者をテレゼ様のおそばに置く訳にはいきません」

「ああその噂ですか、それは武術優勝のご褒美にほったに軽くキスただけですよ。」

其処まで噂が大きくなっていたとは、ビックリですよ」

クッククックワーハッハ。ロリエントールだって可笑しいー吹き出しちゃうよ！

ケスラーが怪訝な顔するまえに我慢我慢、家帰ってから笑おう。

「そうですかしかし士官学校ではロリエントール事件として有名だそうです。」

今年の入校式にテレゼ様が呼ばなかったのはその為だそうです」
「なるほど迷惑をかけた訳ですね、しかしどんな事件なのですか？」

「テレゼ様言い難いのですが、テレゼ様が士官学校へお行かれた時余りの可愛さに生徒達がファンクラブを創立したのです。」

その総数は全校生徒の八割という状態になりました。

およそ16000人です、その時テレゼ様がロリエントールにキスをしたということで学校中が彼に嫉妬し大騒ぎと成ったのです。

それ以来彼はロリエントールと言われているのです」

うわー気の毒ですね、ロリエントールだからかパーティーで余所余所しかったのは、けど女の敵には少しは反省して貰った方が良かったと言うことにしましょう。

「けど能力に問題無ければ良いのですよ、追々修正していけば良い訳ですし」

「士官学校の評判ではテレゼ様の侍従武官と言う噂が流れております」

「良いんじゃない噂は噂で、その時にならないと決めませんよ」
本当は決めてるんだけどね。

「ケスラーご苦労様です」

「御意」

「御意はいいのに」

「はっ」

第二十二話 みんなで企めば怖くない！（後書き）

卒業式書こうとしたらそこまで行けませんでした。

第二十三話 軍務尚書のお仕事（前書き）

すみません、卒業式がなかなか来ません。二十四話こそ卒業式に。

第二十三話 軍務尚書のお仕事

帝国歴478年5月21日

■オーデイン ノイエ・サンスーシ 謁見室 ハーロルト・フォン・エーレンベルク

皇帝陛下がお呼びとの事ゆえ参内すると国務尚書と余り仲の良くない同僚達も参内していた。

国務尚書リヒテンラーデ侯は相変わらずの苦虫をかみつぶしたような顔をしている。

宇宙艦隊司令長官ベヒトルスハイムは元帥杖を持つ手が落ち着かない様子であり。

統帥本部長のシュタインホフは相変わらず捉え所のない顔をしながらなにやら考えてるように見える。

暫く待つと陛下がご登場なされたため、全員で挨拶をし陛下からお言葉があった。

陛下は深刻に話し始められた。

其れは今年中に叛徒共がイゼルローンへ侵攻する可能性が有ることであった、陛下なりに情報をどこからか手に入れたらしいが、シュタインホフの情報部からであろうか？

嫌違うなシュタインホフも初耳の様な驚きをしている。

ベヒトルスハイムが『恐れ多いながら可能性だけで軍を動かさせません』と言うと、

陛下が『それならば新規士官を研修するために遠洋航海という形で軍の準備をするが良い』と仰った。

なるほど良い考えだ此なら叛徒にも悟られずに準備が出来よう、陛下も旨いことを考える物だ。

最近の陛下は以前と比べて精力的に成られている。

以前ならば二日酔いで謁見しておられた物だがいまは確りと謁見しておられるのだから。

お変わりに成られたのは、グリューネワルト伯爵夫人が寵姫に成られてからであるから、伯爵夫人の何かしらの影響なのだろう。

シュタインホフにはイゼルローンでの作戦の立案をご命令成された。

自分の番になり、陛下より『今年度卒業生は従来のような一年間デスクワークではなく半年間はイゼルローンへ配置し戦場の息吹に曝すようにいたせ、成績優秀者は旗艦に乘せ研修させるよう』勅命を受けた。

その後『今度の士官学校卒業式にテレーゼが出たいと言っておるから頼むぞ』と仰られたのです。

皇太子殿下ならば緊張もするが。テレーゼ様は何度かお会いし何度も話し、ブリギッテとも仲の良いお方であるし過度の心配はないでしょうな。

皇帝陛下は我らに『叛徒共やフェザーンに知られぬように防諜を確實な物として準備せよ』と仰った。

此には我らも驚きの表情をしてしまっわい。

シュタインホフが口を開けて目を見開く姿は滑稽であった。

陛下はお変わりつつあるという感覚を持ち、自身の職責を益々精進する気になったのが今日という日であった。

帝国歴478年6月15日

■オーディン

軍務省

軍務尚書室

ハー

ロルト・フォン・エーレンベルク

陛下との謁見から早三週間我々は急ピッチで準備を続けていた。

新規任官士官5078人の辞令準備やイゼルローン要塞における配備場所への準備を宇宙艦隊総司令部とやりとりしながら行ってきた。

練習艦隊がオーディンを発つのが7月10日であるから大変なこと

イゼルローン増援

であるがやりがいのある仕事だが、この種類の量は何とかならんのだろうかここ一週間は判子押しばかりしている。

面倒だからと適当には押せんしいい加減疲れてくる物だ。

ベヒトルスハイムやシュタインホフはある程度部下に丸投げ出来るが儂はできんからな仕方のないことだ。

此で叛徒共が来なければ、内容を知らずに残業の連続の部下達から文句が続出するだろう。

この状態では士官学校の卒業式は軍務次官代理をさせテレーゼ様をエスコートさせねばならんな。

帝国歴478年7月8日

■オーディン

軍務省

軍務尚書室

ハー

ロルト・フォン・エーレンベルク

取りあえず早朝から士官学校の入校式だけは参加し訓辞を述べてきたが、疲れから貴賓席で居眠りしてしまった。

先ほどシュタインホフから情報部が叛徒共のイゼルローン攻撃を

察知したとの連絡があった。

彼奴も役に立つときがあるのだな。

これで今までしてきた苦勞が報われる、部下達も納得してくれるだろう明後日は出撃だし肩の荷がやっと下りた気がする。

此から先は、ベヒトルスハイムと艦隊司令ミュッケンベルガーとイゼルローンの連中の仕事だ。

12日は久しぶりにブリギッテと何処かへ出かけるとしよう、どこがよいであろうかの。

第二十四話 ロイエンタールの憂鬱

帝国歴478年6月30日

■オーディン
イゲン

帝国軍士官学校

リヒャルト・オ

今日は先輩方の卒業式だ、ビットェンフェルト先輩とも此でお別れ
と思うと寂しい気分がする。

ああ見えて良い先輩だった、自分にとって良い人生経験になったと
思うが胃薬と友達になってしまったが其れは仕方がないと諦めた。
ビットェンフェルト先輩のお陰でワーレン先輩やロイエンタール先輩
と知り合えたのだから悪いことは忘れよう。

ロイエンタール先輩も一時はテレーゼ様の事で総スカンを食らった
が、その後デマだと解り嫉妬する奴が減ったが、まあ冗談交じりに
未だにロリエンタールと呼ばれてはいるが、話してみると良い先輩
だった。

しかし最近ロイエンタール先輩の伯父が伯爵でテレーゼ様の侍従武
官にロイエンタール先輩を押しているとの話が流れて、再度ロイエ
ンタール先輩に対する風当たりが強くなってきている。

酒の席で先輩に聞いたが、絶対にならない前線へ行きたい万が一侍
従武官の辞令が来たら任官拒否して実家経営の鉱山へ住み込むつも
りだと切実に話してくれた。

あの真剣な表情は本物だが、みんなは信じないだろう先輩ご愁傷様
です。

さあ待ちに待った卒業だ！此でオーデインから離れられる。

あの伯父が俺を悪魔デレーゼの侍従武官に出来るように運動したらしいがそんなことはさせんよ。

校長に直訴して帝国の為に前線勤務を願ひ出たら、校長は非常に満足げに頷いていた。

万が一近衛や侍従武官の辞令が来るなら任官拒否して実家経営の鉱山へ住み込むつもりだ。

俺ながらウキウキとしながら講堂で式典が始まる前に今回は軍務尚書は用事で来れないらしく、次官が来ると話が伝わってきた。

そして式典が始まり列席者が紹介されたとき、俺は悪魔を見た！

奴だ奴が居る、なぜ此处にいる！

悪魔デレーゼの姿を見た同期達は一斉に拍手を行いはじめた。

まあ良いだろう、彼処に座っている限りは俺には関係ないのだから。式典が始まり上位10人まで恩賜の短剣を授与される事に成っているが、事もあるうにあの悪魔が授与するらしい。

俺は目の前が暗くなった何故なら俺はクラスヘッドだったのだ！

俺はそのまま腹痛で逃げようとしたくらいだ。

俺たちが一人一人呼ばれ短剣を授与される、悪魔の前に立ち短剣を渡された。

にこりとして『おめでとうございます』とごく普通に言われてホッとした。

式典が終わるまでは何か仕掛けてくるのではないかと思いながらビクビクしていたが何もなかった。

しかしである、なぜか式典が終わり謝恩会でビットェンフェルト鶏冠頭やワーレン達と話していたとき、

後輩達が俺を卒業記念だと無理矢理連れ出し胴上げを始めたのだ、そのまま会場から担ぎ出されて胴上げされ、口々にテレーゼ様の侍従武官、テレーゼ様の侍従武官と念仏のように唱え始めた。

やばいと感じたがビットェンフェルト鶏冠頭やワーレン達は笑うばかりで助けてもくれん。

友達がいのない奴らだ。

そして30回にも及ぶ胴上げをしまくられたあげく最後にプールへ叩き込まれたのだ！

俺が何をしたと言うんだ、あれは悪魔じゃない魔王だ！

■オーディン 帝国軍士官学校
ビットェンフェルト

フリッツ・ヨーゼフ・

いよいよ卒業だ、長いようで短い4年間だった、しかし面白い奴らと出会えて良かったと思っている、

ロイエンタールの女癖の悪さには驚いたが、

テレーゼ様の一件以来大人しくなったからな。

良い経験だったのだろう。

さてどこへ配属されるやら楽しみだ。

式典にはテレーゼ様をご臨席だった、クラストップ10人が短剣を授与されるらしいが俺はぎりぎり10番だった為、頂けることとなった。

テレーゼ様から物を貰うのは2度目だが2年経ってお美しく成られ

た物だ。

俺に授与されるとき、『ビッテンフェルト皇帝陛下為に尽くして下さい』と言われたがテレーゼ様になら尽くしたいと思うのは不敬であろうか。

まあこれで益々フアンになってしまいうな。

謝恩会でロイエンタールがフアンクラブに拉致されプールに落とされた、笑っちまった。

■オーディン 帝国軍士官学校
ワレーン

アウグスト・ザムエル・

待ちに待った卒業式、卒業したらリーザと結婚だ。新婚旅行はク
ロイツナハ？へ行くかな何よりも楽しみだ。

式典にはテレーゼ様のご臨席だった、ラストストップ10人が短剣を
授与されるそうで俺は5位だから授与された。

あのハンカチ以来の再会であったが、テレーゼ様は俺のことを良く
覚えていらっしゃった。

『ワレーン格闘術は上達しましたか、皇帝陛下に尽くして下さい』
と言われた。

しかしテレーゼ様が俺のことを覚えてくれていた事に感動を覚えた。

謝恩会の途中でロイエンタールが下級生に胴上げされながらプール
に落とされた時は笑った。

■オーディン 帝国軍士官学校

アントン・フェルナー

「あのお方がテレーゼ様か」
ギョンターが言う

「可愛い方ですね」

ミュラーが言う

テレーゼ様を直接見るのは今日が初めて先輩方から聞かされた話を
噂半分に聞いていたが、100パーセントだったとは驚いた。

なるほど人気が出る訳だ、あの顔あの気品あの優雅さ。

これで我々のクラスメートからもファンが出来るな。

俺たちはどうなるか判らんが。

第二十五話 脱出！いいえ放流です（前書き）

第二十六話 第四次イゼルローン攻防戦が未だ書けないのに、第27～29話が完成している。

26話を一時飛ばして掲載しようか考え中。

第二十五話 脱出！いいえ放流です

帝国歴478年 7月10日

■オーディン 宇宙艦隊第2宇宙港
ロイエンタール

オスカー・フォン・

俺は今日ほど軍務省、統帥本部、宇宙艦隊司令本部そして叛徒共に感謝することはないだろう。

あの魔王^{デレーゼ}から俺を救ってくれたのだから。大神オーディンよ今日ほど貴方に感謝したことはない。

思えば二年前新学期に調子に乗り武術授業で優勝したのがケチの付き始めだった。

今日の惨状を思えばあの時、^{ビッケンフェルト}鶏冠頭に負けていれば良かったのだ。今更思うが一生の不覚だ。

翌年の新学期は校長とシュターデン教官の尽力で魔王が来ないと知ったときは、2人に感謝したものだ。

所が魔王は卒業式にやって来た、目の前が暗くなった何故なら俺はクラスヘッドだったのだ！

魔王が恩賜の短剣授与をすると聞いたとき、俺はそのまま腹痛で逃げようとしたくらいだ。

配属先は士官学校の下馬評で魔王の侍従武官という話がまことしやかに流れたため、卒業式に無理矢理校庭に連れ出され30回にも及ぶ胴上げをしまくられたあげく最後にプールへ叩き込まれたのだ！あの伯父も侍従武官に成るようにと運動し始めたが、俺自身が宇宙艦隊に配属されなければ任官拒否して実家経営の鉱山に住み着くと我を通しまくった。

危ういところであったが、叛乱軍がイゼルローンへ侵攻するとの情報が入り、宇宙艦隊司令本部、軍務省、統帥本部で新規卒業士官の艦隊による研修が決まり成績優秀者は例外なく全員旗艦に乗艦するように決まったのである。

此で最低でも4ヶ月は魔王から逃れられるし、イゼルローンなら女共も噂は知らんだろう。

エーレンベルク元帥、シュタインホフ元帥、ベヒトルスハイム元帥そして叛徒の指導者よ。

ありがとう本当にありがとう！

■オーディン 宇宙艦隊第2宇宙港
フ・ビッテンフェルト

フリッツ・ヨーゼ

いやー良かった任官直後に仮配置とは言え宇宙艦隊旗艦に配属とは嬉しい限りだ。

本来なら新規士官は一年間デスクワークと言うのがこの所のパターンだったからな、はつきり言って俺は机に向かうのが苦手だデスクワークなんぞ、やってられるか！

所が叛乱軍のイゼルローン攻撃が有るからと旗艦勤務だ、いやはや楽しみだ。

ロイエンタールも奴らしくない機嫌の良さだな。

■オーディン 宇宙艦隊第2宇宙港
エル・ワーレン

アウグスト・ザム

今回いきなりの出陣に驚いた。

本来なら一年はデスクワークでゆっくり出来ると思ったのだが当て

が外れた事に成る、リーザとの新婚旅行も暫くはお預けだ、早く帰れば良いが叛乱軍めこんな時に攻めてくるな！

■オーディン 宇宙艦隊第2宇宙港

近日中にイゼルローンに叛徒共が大規模侵攻を行う可能性大と情報部及びフェザーンなどの情報によりイゼルローンへの増援部隊の派遣が始まった。

指揮官はグレゴール・フォン・ミュッケンベルガー大将、艦艇15500隻、兵員163万9000名である。

その艦隊の中に478年度士官学校卒業生達が配属されていた。本来ならば一年間はデスクワークすることが普通であるが成績優秀者に戦闘を感じさせるまたとない機会として旗艦勤務として上位20人が辞令を受けた。又その他卒業生もイゼルローンにて戦場の空気を感ずる物として派遣される事が決まった。

そして旗艦配置の卒業生の中にオスカー・フォン・ロイエンタール、アウグスト・ザムエル・ワーレン、フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルトの3名も居た。

「おうロイエンタール今回の出兵で艦隊戦はあるかな？」
一人うきうきするビッテンフェルト。

「どうだか判らんが出陣は良い物だ」
なぜかホッとしにやけるロイエンタール。

「相手が居ることだ、こちらの都合では動いてくれまえ」
一寸憚然な態度のワーレン。

「其れはそうだがワーレン、出来ればドカーンとでかいのを見てみたいじゃないか」

「花火では有るまいしそう簡単にはいかんよ」

「ロイエンタールの言う通りだな」

「そんなもんか、つまらん」

「そろそろ出発だビットェンフェルト置いていくぞ」

「ああ置いていくか」

「ちっ判った」

■ オーディン グリンメルスハウゼン子爵邸

「テレーゼ様ロイエンタール達を武官就任させず前線へ向かわして宜しかったのですか？」

ケスラーが新規士官の書類を見せながら聞いてくる。

「いいのよ、私の武官としたり近衛にしたら、宇宙の気を吸えないでしょ。」

実戦経験が無いと頭でっかちの養殖物に成ってしまうわ、今必要なのは天然物の人材なのよ。

シュターデンみたいに理屈だけの単細胞馬鹿は御しがたいでしょ。それじゃ駄目なんだよね実戦で鍛えた技と勘が必要でしょう」

「其れで敢えて前線へ送るように陛下の勅命まで頂いたのですか？」
ケスラーその位で驚いては駄目だよ。

「今回は成績優秀者は旗艦で仕事その他はイゼルローン内で見学つて形に命令してるから、戦場の気を知るには一番だと思ってね、所謂社会科学見学ですよ」

「つまりはテレーゼ様の手の内で踊っていると」

「悪辣かも知れないけど、こうでもしないと駄目なのよ。」

「敢えて心を鬼にして千尋の谷に突き落とすのよね」

「そう言うお気持ちでしたか」

「こそ。半年後に帰投するから其れから本番ですね」

「諒解しました」

第二十五話 脱出! いいえ放流です (後書き)

台詞を改訂

第二十六話 復活のロイエンタール（前書き）

第四次イゼルローン攻防戦が未だ書けないのに、書けたのはエル・ファシルの英雄です。

最後に増補しました。

第二十六話 復活のロイエンタール

帝国歴478年9月1日

■イゼルローン要塞
イエンタール

オスカー・フォン・ロ

やっとオーディンを出立しホッとした。

最初のワープを抜けたとき此ほど安堵した事は無かった。

もう魔王^{テレーゼ}は遙か彼方だ！

此から俺の時間が始まるのだ！

いよいよイゼルローンだ、これで魔王は五千光年の彼方だ。

ホッとしたこれで暫くは自由恋愛が楽しめるという物だ、

まあ一週間は要塞の各部署の見学だから出かけられんが、8・9は
休暇だこれからが楽しみだ。

翌日から要塞司令室や艦艇用ドック、浮遊砲台等を見学を行い宇宙
艦艇に乗り回廊部の狭さや危険宙域の外園ぎりぎりまで航行したり
し非常に為になる行為だった。

鶏冠頭^{ビットフェルト}は戦艦に乗ると異様なぐらい興奮して、自分の艦は真っ黒に
塗るぞと力説していたがお前未だ少尉だろう船が貰えるのが何時に
なるんだ？

ワレンは心有らずとゆう感じで溜息をついていた。

そんなに嫁が恋しいか、俺には判らん事だがな。

俺は俺で今度の休みのことが気になってばかりいた。

そうこうしているうちに、8日が来た俺は早速バーへと繰り出した、

ネット情報で奇麗所が集まる所でイゼルローンでもお勧めスポットだと言うので行ってた。

店に行くと30代前半ぐらの斜に構えた美女がお出迎えしてくれた。

「あら少尉さん初めての方よね？」

「ああオーデインから来た」

「まあ遠いところをようこそ、私当店のママをやっています、ユリアーネって言います」

「当たりのようだ、ママの態度も良いし、ホステスの質も良い」

「レテーナ此方のお客さんに来てあげて」

ママが呼んだ娘は、俺好みのいい女だった。

「レテーナて言いますお客様のお名前は？」

「オスカー、オスカー・フォン・ロイエンタールだ」

この名前に反応するだろうか？

反応しないな矢張り此処までは噂が来ていないのだな。

「ロイエンタール様で宜しいですか？」

「ああ構わんよ」

「よろしくお願いいたしますね、ロイエンタール様」

「此方こそミスレテーナ」

「レテーナで良いです」

「そうか」

今日は楽しい日になりそうだ。

■イゼルローン要塞

バー ファンタズィー

ユリア

ーネ・フェルゼンシュタイン

本日調査対象のオスカー・フォン・ロイエンタールが来店した早

速羽を伸ばしに来たようだ。
レテーナを付けたが早速気に入った模様、そのうちに誘われるだろう以上。

御屋形様へ定時連絡終了。 明日以降も調査を続ける。

帝国歴478年9月9日

■イゼルーローン要塞
イエンタール

オスカー・フォン・ロ

今日も午前中は仲間とイゼルーローン繁華街で必需品を購入してきた、あとは彼処へ行くだけだ。
昨日一日で感じたことは、レテーナは俺好みだし、向こうも満更ではないように見える。
しかし営業スマイルの可能性もあるから、数回は通って誘ってみるか。

仲間を誘ってファンタズイーへ向かう、ビッテンフェルト鶏冠頭とワーレンも誘っ

たが、

ビッテンフェルト

鶏冠頭はバーへ行くより戦艦のドックへ見学に行くと何人かの艦船マニアと共に

出かけていった。

ワーレンは新婚の妻が居るので言う所は行かんと断ってきた。
堅物だな、一人の女に操を立てるのがそんなに大事か？

半年も放っておけば、お前の妻も俺の親のように他の男に会ってるかもしれないのだぞ。

帰ったら違う奴の子がいるかも知れんぞ。

まあしょうがない。行きたくない奴は行かないで良い、楽しいことはライバルが少ない方が良いからな。

到着すると早速ユリアーネが出迎えてくれた。

「ロイエンタール様また来て下さったんですね嬉しいわ」

「あまた来た」

「レテーナで宜しいかしら？」

「そうしてくれ」

「レテーナ。ロイエンタール様がいらっしゃってくださったわよ」

「ロイエンタール様またきてくださって嬉しいです」

「ああ今日もお前に会いにきた」

「嬉しいです」

今日も良い日だった。レテーナもかなり俺に興味を抱いてきたしあと少しだな。

魔王から逃れて以来運が向いてきた、これからが楽しみだ。

■イゼルーローン要塞 バー ファンタズィー ユリアーネ・フェルゼンシュタイン

本日もオスカー・フォン・ロイエンタールが来店した。

相変わらずレテーナ狙いのようだ、来週辺りは誘われたならOKするようになせよう。

御屋形様へ定時連絡終了。 明日以降も調査を続ける。

■オーディン ノイエ・サンスーシ テレーゼ・フオン・ゴールデンバウム

過日ケスラーよりロイエンタールの素行調査書を見せて貰った。
案の定女遊びを始めたようですね。

まあ束縛していたら男は逃げますから、息抜きさせてあげないと駄目ですからね。

まあしかし何処にでも爺様の組織構成員は居るんだね驚いたよ。

ロイエンタールよ息抜きして良く育って帰ってくるんだよ。

第二十六話 復活のロイエンタール（後書き）

これ以上書くと「らいとすたっふルール2004」に当たる可能性があるので御想像に任せます。
誤植直しました。

第二十七話 第四次イゼルローン攻略戦（前書き）

初の戦闘シーンです、こんな感じですが如何でしょうか？
年月修正 778↓787 479↓478へ
最後に増補しました。

第二十七話 第四次イゼルローン攻略戦

宇宙歴787年帝国歴478年9月18日

■イゼルローン要塞

予てから予想されていた叛乱軍イゼルローン攻略部隊の予兆と思われる行動が次々と入ってきたのは標準時9月18日午前9時のことであった。

イゼルローン要塞司令部内で、オペレーターの声が響き渡る。

「回廊外方に設置した偵察衛星からの連絡が次々に途絶えていきます」

「ティアマト星系アンシヤルの軌道上に敵艦隊らしき反応あり」

イゼルローン要塞司令官テーグリヒスベック大将と駐留艦隊司令官プラテンシュレーガー大将そして増援艦隊司令官ミュッケンベルガー大将がそれぞれの幕僚を引き連れ作戦を立て始める。

■イゼルローン要塞

グレゴール・フォン・ミ

ユッケンベルガー大将

テーグリヒスベックが

『基本戦術は、駐留艦隊が叛徒共を要塞主砲の射程内に引き込みトールハンマーで撃破する』と主張する

するとプラテンシュレーガーが『我々は囧か』と反論する。

それに同調するように、両者の幕僚達も口々に同じように相手を誹謗する。

何なのだ此処は、叛徒が来て居るのに味方同士で争って畦みあっている。

これでは埒があかない状態ではないか。

此方は一刻も早く叛徒共を撃退せねばならんのに、出撃すら出来ないではないか。

折角皇帝陛下から信任を得てこの増援艦隊の指揮を任されたのに、このままでは陛下に申し訳がたたん。

そして第2次ティアマト会戦で散った。我が父ウィルヘルムと会戦前に倒れた大叔父ケルトリング元帥の無念を晴らす機会なのだ、此処は儂が作戦を述べた方が良いな。

「兩人とも言い合っていても埒があくまい。

この作戦はどうだ、叛徒共は我々増援艦隊の到来を知らなからう、艦隊を流体金属内に止めトールハンマー砲撃後出撃し混乱する叛徒共を一気に殲滅する」

司令部内でも良い案なのではとの声が聞こえる。

そこへプラテンシュレーガー大将が其れでは駐留艦隊が道化ではないかと文句を言ってきた。

「ではどうすればいいのか」

「逆にすればいい、駐留艦隊が流体金属内で待機し、卿の艦隊が敵をおびき寄せればいい」

身勝手な考えだ、損害を受けるのが嫌で貧乏くじを俺に引かせるつもりか。

しかしこのまま言い争っても仕方ない、戦う気のない奴に任せても失敗しかねん、
自分が出るしか無からう。

「判った自分が出よう」

「頼んだぞ後詰めは任せるがいい」

嬉しそうに言うな、頬がゆるんで居るぞプラテンシュレーガー。

「グライフス連れてきた新規士官達上位20名以外は講堂にて戦闘を視聴させよ」

「はっ」

「20名は旗艦ヴィルヘルミナに乗艦艦橋に集結するように」

「直ちに命令します」

「テークリヒスベック大将、プラテンシュレーガー大将後はよろしく頼みますぞ」

「了解した」

「任せて起きたまえ」

ヴィルヘルミナに乗艦し艦隊が発進する。

流体金属の海を突き抜け次々に戦艦、巡航艦等が真空の大海へと飛翔する。

このうち何隻がまた海へと戻れるのであろうか。

艦隊は各分隊、戦隊ごとに隊列を組みつつある、イゼルローンからは敵艦隊が近づいているとの入電が入り続ける。

1時間で隊列を組み終わり増援軍15500隻が戦闘形態を整えた。ヴィルヘルミナのモニターからもティアマト星系方面から来る敵艦隊を捉えつつあった。

新規士官に聞こえるように参謀長に話しかけた。

「参謀長作戦は当初の通り敵をトールハンマーの射程内に誘い込む、誘い込んだら艦隊は天頂方向へ急速撤退だタイミングを間違えないよう、各分艦隊に作戦を徹底させよ」

「はっ直ちに」

次第に明らかになってくる敵艦隊、オペレーターが概算の敵艦隊数を伝えてくる。

「敵艦隊総数凡そ40000隻」

凡そ2倍強の戦力に艦橋内にざわめきが起こる。

ふっ発破をかけるか。

「敵が40000隻でも我が方は駐留艦隊と合わせれば30000隻を超える、そしてトルハンマーがあるこの戦い勝てるぞ」

落ち着いたか、後は奴らがタイミングを間違えなければ勝てる。

敵艦隊が戦闘圏内へと近づいてくる。

オペレーターの声だけが響いていく「敵イエローゾーンを突破射程圏内に入ります」

「未だだあと少し引きつけろ」

「敵艦発砲」

「あの距離では有効打には成らんよ」

グライフスの言う通りだ、あの距離では防御シールドに弾かれる。

何発かは先頭集団に着弾するがシールドに阻まれ有効打とは成らない。

後ろを振り返ると新規士官達が固まって見ている、まあいきなり撃たれるのだ怖くもあろう。

しかし数人はモニターを確りと凝視し肝が据わって見える。

「敵艦隊距離11光秒、有効射程距離に入りました」

「全艦ファイエル！」

漆黒の闇の中艦隊からビームの奔流が敵艦隊に対して弾き出される。たちまち敵艦隊の先頭で火花が弾けるように大輪の光の花が咲きま

くる。

先頭部隊を痛撃された敵艦隊だが2倍以上の戦力差に勢いづくのか怯まずに押し込んでくる。

此方も少しずつではあるが、損害が生じ始めている。
うむ、これは押し込まれた振りをしながらジリジリと後退するのも骨だな。

すでに艦隊はトールハンマー射程内に進入している。

オペレーターが報告する「敵艦隊トールハンマー射程まであと2光秒」

左舷分艦隊は流石ケルトリングだまとりが良い。

右舷分艦隊が押され気味だな、バレンホイムは何をしてる！
本隊予備シュタイエルマルクでテコ入れだな。

「シュタイエルマルク准将に命令、本隊予備から2000隻を持って戦線後方から回頭し右翼の傷口をふさげ」

「シュタイエルマルク、トールハンマー射程までの時間稼ぎだ引き際間違えるなよ」

「諒解しました」

これで右翼は対処できた。シュタイエルマルクなら安心だ。
更に圧力を加えてくる同盟艦隊。

「敵艦隊トールハンマー射程まであと0.5光秒」

「シュタイエルマルク分艦隊敵左翼先端に攻撃を開始しました、敵先端が崩れていきます」

よし、流石だシュタイエルマルク、だが深追いはするなよ。

「敵艦隊損害を物ともせず突入してきます」

「奴らは自殺志願者か？」

グライフスが驚いている。

「敵艦隊トールハンマー射程内に入りました」

「よし、あと2光秒引きつけるぞ」

「シュタイエルマルク分艦隊がバレンホイム分艦隊の援護に成功しました」

「バレンホイムに後退を指示、艦列を立て直しつつシュタイエルマルク分艦隊の後方へ廻れ」

「敵艦隊更に突進」

よし、そろそろだな艦隊を後退させ敵を引きずり込むぞ。

「イゼルローンから準備宜しの通信入りました」

よし来たか。

「全艦に命令全速で後退せよ。0.5光秒後退後天頂方向へ高速移動、トールハンマーが来るぞ」

敵艦隊は何も考えていないのか？壊走と勘違いしたのか？射程内に次々と敵艦が集まってくる。

そして遂に、イゼルローンの流体金属がパラボラ型に凹み其処から出力9億2400万メガワットのビームが放たれた。

次の瞬間叛徒の艦隊は一瞬にして大損害を浴びた、混乱しつつある敵艦隊に第2波が発射され更に敵が消滅する。

その直後イゼルローンから駐留艦隊が出撃してきた。

「ふ、プラテンシュレーガーやっと出てきたか」

「敵艦隊壊走しています」

「よし我が艦隊は天頂方向より敵第二陣に攻撃をかける」

「素点固定」

「ファイエル」

敵第二陣に弾着し其れなりの戦果を挙げる。

「駐留艦隊突出してきます」

味方撃ちしそうになる為攻撃が出来なくなる。

「プラテンシュレーガーは何をしてるんだ！」

「戦果が欲しいのじゃない」

「バラバラではないか、あれでは逆櫓を食らうぞ」

案の定駐留艦隊は敵艦隊の逆櫓で損害を出す。

そうこうしているうちに、敵艦隊は回廊から脱出していき、これ以上の追撃は不能だと言うことで艦隊はイゼルローンへ帰還した。

帝国軍の損害

ミュッケンベルガー艦隊 1387隻、9万3815名

プラテンシュレーガー駐留艦隊 2776隻 23万8518名

最初から力戦したミュッケンベルガー艦隊より逆櫓を食らった駐留艦隊の方が倍の損害をだした。

此処に第4次イゼルローン防衛戦は幕を閉じた。

第二十七話 第四次イゼルローン攻略戦（後書き）

ウィキペディアの引用先が間違えていて、9億4200万メガワットになっていたのを、ご指摘して頂き直しました。

第二十八話 イゼルローンに血に染めて（前書き）

同盟側です。

第二十八話 イゼルローンを血に染めて

宇宙暦787年年帝国暦479年9月

■イゼルローン要塞

同盟軍イゼルローン遠征隊

自由惑星同盟は銀河帝国の最重要の軍事拠点たるイゼルローン要塞を攻略すべく、第4次の遠征隊を派遣した。

遠征隊がハイネセンを出発し回廊内に進入したのは宇宙暦787年9月12日のことであった。

同盟軍参加兵力、第4艦隊14500隻、第7艦隊14300隻、第12艦隊13400隻。合計42200隻兵員439万6000名であった。同盟軍第4艦隊司令官サダ中将、第7艦隊司令官シンクレア中将、第12艦隊司令官ロボス中将であった。

回廊進入直後の9月13日、第4艦隊旗艦アキレウスでは事件が起こっていた、サダ中将が急性腹膜炎で指揮を執ることが不能になったのだ。

緊急の事でサダ中将は後送され変わって副艦隊司令官クラドック少将を戦時特例で中将待遇とし指揮を任せていた。

第4艦隊旗艦アキレウス艦橋ではクラドック中将がほくそ笑んでいた。

俺にも運が向いてきた、此所で活躍すれば中将になり艦隊司令になれる、

しかも第4艦隊が先頭だ、戦力も敵の3倍ほどだ勝ち戦になるぞ。

オペレーターの報告で我に返る。

「要塞より敵艦総数凡そ15000隻、敵艦隊此方へ向かってきま

す」

ふっ艦隊数はほぼ同数いける！

「よし射程に入り次第砲撃する、そのまま要塞まで押しきるぞ」

参謀長が意見する「もっと引きつけてから攻撃をした方が良いですが」

ちっ此奴自分が司令官に成れなかったからと、嫉妬してじゃまする気か。

「参謀長戦いは氣勢を持った方が勝つのだよ、消極的な言動は慎みたまえ」

「・・・」

「敵艦隊射程内に入りました」

「よし全艦撃て」

艦隊から放たれたビームが次々と敵艦に命中していくが、大半がシールドで防御される。

「ちっ弾いたか、全速前進間合いを詰めろ！」

参謀長が苦虫を潰したような顔をしていやがる馬鹿にしがって。

「敵艦隊発砲、直撃来ます」

突っ込んだ先頭部隊がシコタマ叩かれる、不味い俺の経歴に傷が付く！

「全艦突撃撃って撃って撃ちまくれ！」

いいぞ敵に損害が出てきている、ジリジリ圧力を受け後退していく、特に右翼の敵はばらけ始めているな。

「敵右翼に攻撃を集中せよ！」

右翼の乱れが激しくなってきた、良いいけるぞ。

参謀長がまた余計なことを意見して来やがった。

「司令、第7、第12艦隊と連携を取りませんと隊列が伸びすぎます」

「黙れ！今は押してるんだ。此処で止まれば敵が持ち直す、そんなことも判らんのか！」

オペレーターの声が響く。

「回廊危険宙域ギリギリから敵艦隊凡そ2000、我が艦隊左翼に攻撃」

馬鹿野郎余計なことを言いやがるから、見逃したじゃないか！

「敵は最後の足掻きだ、撃って撃って撃ちまくれ！」

「第12艦隊ロボス中将より入電『先走るな隊列を立て直しつつ後続部隊との連携を保て』」

「司令敵の動きを見極めませんと」

「返信はどうなしますか？」

「無視しろ！」

「司令ロボス中将が最先任です命令に従わないと」

「黙れ！俺に意見するな！」

「しかし」

ちっ！勝ったら参謀長は真っ先に首だ！五月蠅い奴はいらん！

「ロボスが先任だろうが、艦隊司令官は俺だ！今は同格の中将だ関係ない！」

ロボスの奴俺だけ手柄を立てるのに嫉妬してるらしいな。

「敵壊走を始めました」

「ようし行けるぞこのまま敵艦隊と追走して要塞に肉薄しろ！」

要塞砲は此で使えんよ。

「司令！！」

「なんだ？」

「敵艦隊天頂方向へ急速上昇、要塞表面から光が！」

「司令急速後退をトールハンマー来ますー！」

「直撃来ます・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

馬鹿な俺の野望が・・・・・・・・・・

次の瞬間第4艦隊旗艦アキレウスはその周りにいた僚艦共々原子の粒として消え去った。

第12艦隊旗艦ペルーンではロボス中将がその閃光を見ながら唸っていた。

クラドックの阿呆が！

「参謀長第4艦隊の残存部隊に速攻で後退せよと命令出せ」

「はっただちに」

「トールハンマー第2波来ます！」

またも沈む第4艦隊の各艦、最早組織的な動きも出来ない状態でバラバラに撤退してくる。

「第4艦隊生き残りの最先任を探して撤退指揮を行わせろ」

悲鳴のようなオペレータの声が響く。

「敵艦隊天頂方向から再度攻撃来ます！」

「要塞表面から敵艦隊出現しました」

「参謀長敵は更に艦隊を隠していたらしい、不味いぞこれは。」

「司令官閣下いかが致しますか？」

「第4艦隊残存はティアマト星系まで後退させろ、第7、第12艦

隊で敵を防ぎつつ後退だ」

「第4艦隊分艦隊旗艦タケミカツチ確認」

「阿呆の旗艦じゃないか、誰が指揮を執ってる？」

「パストーレ准将です」

「パストーレに第4艦隊を纏めてティアマト星系まで兎に角逃げろと連絡しろ！」

「諒解」

「第7艦隊のシンクレアに連絡を」

「シンクレア此は不味いぞ、敵の数が予想以上だ」

「確かに、阿呆のせいで作戦も滅茶苦茶だ」

「さすがにもう無理だろう」

「だな」

「俺とお前で繰り引きながら後退だ」

「判った」

嵩にかかって追撃してくる帝国軍特に、イゼルローンから出てきた艦隊は凄い勢いで追ってくる。

しかしロボスとシンクレアの逆檄に会い戦果を余り挙げられずに終わった。

同盟軍の4回目のイゼルローン攻撃は失敗に終わった。

同盟軍の損害

第4艦隊旗艦アキレウス以下6437隻、兵員61万3877名

第7艦隊1177隻、兵員7万5887名

第12艦隊1261隻、兵員8万4522名

またしても同盟軍の敗北に終わった。

第二十八話 イゼルローンを血に染めて（後書き）

ムーア＋（ホーランド÷3）Ⅱクラドック中将と言う感じ。

第二十九話 新米少尉のイゼルローン日記（前書き）

今回グタグタです。

第二十九話 新米少尉のイゼルローン日記

帝国歴478年9月

■イゼルローン要塞

フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト

9月1日

イゼルローンへ到着した。

楽しみにしていた前線勤務だ俺たち下っ端は仕事がないから要塞内の各所を見学だ。

要塞司令部ではトールハンマーの予行演習や浮遊砲台の操作法などを教えて貰った。

9月9日

ロイエンタールがバーへ誘ってきたが断った、此処まで来たら歩かなければ面白くないだろう。

楽しみだったのは、艦艇ドックだ！各種戦艦や巡航艦が多数並び整備や修理が行われている、

流石にこれだけの戦艦を間近に見るのは初めてだ、この重厚さこの機能美しい物だ。

向こうには高速戦艦が停泊している、これは良い！スマートだし美しい艦だ良し決めた。

俺の旗艦はこのクラスだそうしよう。

9月18日午前9時

朝起きたらロイエンタールが居なかった。

昨夜は何処かへ行っていたようだ、朝飯をかつこんでいる途中に帰ってきた。

ミーティングを始めようとしたとき敵襲の放送が鳴り、いよいよ戦闘かと周りの連中と話していた時、
新規士官のうち上位20名は旗艦へ乗艦せよと命令が来た。
よし俺も戦闘だ、叛徒共みておれよ！

凄まじい戦闘だ流石はミュッケンベルガー大将だ。

的確な指示で敵の攻撃を受け流していく、同期連中は殆どが震えまくっている。

だらしなないぞお前達！流石にロイエンタールとワーレンはスクリーンを見ながら一々頷いている。

敵将の猛攻が凄い勢いに感じるんだが、司令官は非常に落ち着いた口調で命令を出す。

受け流していくそうだが、しかし右翼が崩れつつある、あの攻撃は凄いと思うのだが、ロイエンタールがあればお前のように猪突猛進だと言いやがった。

俺はそんなじゃないぞ！

司令官が予備の艦隊を迂回戦術で敵左翼に叩きつけた、おー敵が崩れていく、あのような戦法も使えるのか勉強になるな。

後退しつつトールハンマーの準備が出来たと連絡があると、艦隊は急速上昇し後に残った叛徒の艦隊がトールハンマーで大打撃を食らっていった。

司令官の追撃命令と駐留艦隊の突出で敵は撤退していった。
存外叛徒共もだらしない。

今回は大変参考になった。特に敵の圧力を躲しつつ陣形の再編は授業では中々体験できない、良い経験だった。

帝国歴478年9月

■イゼルローン要塞

アウグスト・ザムエル・ワーレン

9月1日

やっとイゼルローンだ、50日間オーディンに連絡が付けられず、非常に寂しい気分だった。

しかし今日からはFTL通信でリーザと話が出来るようになる、凄く楽しみだ早く夜にならんかな。

9月2日

久しぶりに話をしたりリーザは相変わらず綺麗だ、早く帰りたくし仕方ない。

研修中にやけてしまい、案内士官から怪訝な目で見られた気をつけなばならんな。

しかし今日も連絡しよう。

9月9日

ロイエンタールがバーへ行こうと誘ってきたが断った、当たり前だ俺にはリーザが居るんだ、お前じゃ有る前えし女遊びをしていられるか。

ロイエンタールはそうかと言って一人で出かけていったが、彼奴のスキップは初めて見たが見物だった。

9月18日

ビットェンフェルトが朝起きたらロイエンタールが消えていると言ってきたが、

大方お前が寝坊して先にロイエンタールが出たんだろうって言ってやったが。

食堂にもおらず、何処へ行ったと話していたら、士官学校在学中の門限破り時のように窓から入ってきた。はあ、お前は少尉になっても同じか。

呆れていたら敵襲の放送があり、どうするんだと皆でざわついていたが、新規士官上位20名は旗艦へ集合と来たので慌てて集合した。実際の戦闘という物は聞くのとは全く違い緊張の連続だ。

いつもはいきがっている、貴族出身の連中はブルブル震えて居るが、ビットンフェルトやロイエンタールは何処吹く風でスクリーンに移る戦況を確認している。

司令官は作戦が旨い。見ていても的確な戦法で猪突猛進の敵の圧力を躲していく。

少しずつ畏にはめる様は煙し銀の男らしさだ、俺もあのよう的確な指示が出来る人間になりたい。

トールハンマー砲撃には肝を冷やされた。あれほどの攻撃は敵ながら気の毒に思えてしまう。

今回の研修は非常に為になったが、リーザに会えないのが辛い、半年の予定だったが敵を撃退したのだから、もう帰れるのだろうか其れだけが心配だ。

そんな話をしていたら、ロイエンタールが俺は帰らんって力説していたが、

そんなにいい女でも居たのか？俺には判らん事だ。

帝国歴478年9月

■イゼルローン要塞

オスカー・フォン・ロイエンタール

9月1日

よしイゼルローンだ！もう俺は自由だ魔王は居ない、イゼルローンの恋人達よ俺は来た！

しかし外出許可が1週間ごとは残念無念だ。

研修よ早く終わってくれ、ビッテンフェルト鶏冠頭は喜んでいるが俺は早く自由になりたいんだ。

9月7日8日

レテーナよお前を落としてみせる。

9月18日

遂にレテーナの家招待された、店から帰りに小洒落たレストランで食事し家へエスコートされた。

家は洒落たマンションでイゼルローンにあるとは驚きだ、軽く酒を飲みながらレテーナの身の上話、不思議とレテーナとは話をしたくなる。

そのまま夜は更けていく。

翌朝起きたら午前8時半過ぎだった、

官舎へ行くが門番が居る為に昔のように窓から侵入した。

ワーレン達が呆れていたが、女との情事は俺の人生だからな。

呆れられている中敵襲があり、俺たちは旗艦に乗って迎撃だった。

司令官の的確な戦法だが右翼の指揮官が下手くそだった、俺ならあんな指揮は執らんのかな、

あれで正規艦隊指揮艦とは情けない。

左翼のケルトリング少将は流石に旨い、

しかし娘は魔王の取り巻きだ絶対に手を出さないようにしよう！

遊撃を指揮したシュタイエルマルク准将の指揮も水際だっ
ていて参考になる。

しかし敵将の指揮が余りにも不味い戦法だ、只突っ込むだけで、
テンフェルト冠頭よりむごく兵が気の毒だ。鶏ビッ

しかし叛乱軍め余りにも弱すぎる、此で終わりではオーディンへ早
く帰らなければ成らないじゃないか、
魔王から逃れたのに帰りたくはない！

このままイゼルローンへ永住したい、何とかならない物だろうか。

第三十話 チシャ娘（前書き）

あざといレタス娘、悪巧みする。

第三十話 チシャ娘

帝国歴478年10月1日

■オーディン

ノイエ・サンスーシ

小部屋

先だつてのイゼルローン防衛戦の戦闘報告書や素行報告書を読みながら、お父様、爺様、ケスラー達と話し合い中。
お父様は血色の良い顔で頷きながら読んでいる。
最近はお父様も頻繁に会合に参加して生き生きとしています。

「テレーゼよお前の推測が当たったの」

「決断して頂いたのはお父様ですし、それに見合う情報を出してくれたのは皆ですから」

「よいよい謙虚じゃの」

「ケスラーよ、ミュッケンベルガーとケルトリング、シュタイエルマルクはよう働いたが、要塞の方は駄目じゃな」

「御意、調べました結果要塞司令部は未だ及第点ですが、駐留艦隊司令部は落第点でございます」

「ふむそろそろ替え時かの、もうグリーンメルスよ」

「既に任地に行き5年膿んでおりましょう」

「では変えるか、後任は軍務尚書に任せようぞ」

うわー此であの味方殺しが行くのか。

考えていると、お父様が気がついたのか。

「テレーゼどうした真剣な顔をして」

「いえ、要塞の司令部同士が仲が良くないようで、
其れを是正するのはお父様の勅命しか無いかと思ひまして」

「ふむそうじゃの、親任の時にきつく言い聞かせよう」

少しは良くなるか、けど平行追撃作戦対策は早くしないと駄目だな。ケルトリング少将がクラリッサのお父様だけど意外に戦闘上手なんだな、原作には出てこないが何処かで戦死したのかも知れないが、此からのことを考えると貴重な戦力だ。

シュタイエルマルクって聞いた事があるんだけど、どこだっけか？
「ケスラー、シュタイエルマルクってなんか聞いた気がするんですけど？」

「御意、第二次ティアマト会戦で勇戦したシュタイエルマルク中将の孫でございます」

「なるほどあの勇将シュタイエルマルクの血筋ですか、祖父同様流石ですね」

いずれシュタイエルマルクもスカウトしよう。

おやおや爺様、ウツラウツラしてきてますね、日向ぼっこ提督の面目躍如ですか、

まあそれだけケスラーを信頼している証拠だし、お父様もクスクス笑ってます。

「今回は敵が此方の艦隊に圧力をかけて壊走させながら平行に追撃しようとしたみたいだけど次回以降も同じ手を使ってくる可能性があるのでは？」

「確かにその手はあります、統帥本部で研究させましょう」

「問題はミュッケンベルガー大将のように的確な戦法をとれる将帥が居ないと破綻する事だと思いますよ」

「確かにそうじゃな、そうならん様に作戦を作らせねばならぬの」

「負けた後で直ぐに攻めては来ないでしょうね、次回までに考えれば良いのでは、

いつその事ミューケンベンガー大将をイゼルローン要塞総司令官にするのも手ですが」

「いやあの者は次期宇宙艦隊司令長官にと考えておる、今回上級大将に昇進させ宇宙艦隊副司令長官にするつもりじゃ」なるほどね、彼なら威厳があるしピッタリでしょう。

ラインハルトは『堂々たる者だ、ただし堂々たるだけだ』と批判していたけど、あれは自分の物差しで言っているだけで実際各戦線では有利に戦っているから、

父様の人物評価は确实だね。

完全に爺様寝てますが、寝てるふりかも知れないのがこの爺様の凄さ。

そうそう慰問袋の事も頼もう。

「お父様、奮戦むなく叛乱軍の俘虜になってしまった可哀想な将兵達に慰問袋を送りたいのですが、宜しいでしょうか？」

「うむ考えがあるのか？」

「兵達が可哀想ですし平民の人気取りにも使えると思います、それに何れ帰還させたときに我々の味方としてカウントできるでしょう」

「ではテレゼに任せよう、自由にせい」

「はいお父様、ケスラーその旨準備を手伝って下さい」

「御意」

そうだズーッと気になっていた事を聞こう。

「お父様お聞きしたいのですが、グリューネワルト伯爵夫人の父親が男爵を求めたとか、断ったとか聞いたのですが、どちらが本当なのですか？」

「あの男は男爵には自分は過ぎたる物と辞退してきおった、其れなりに矜持があるので有ろう」

なるほどね、ラインハルトは父親のことを毛嫌いしていたけど親なりの矜持があつたんだな。

此処は一手撃ちますか、ケスラーなら出来るでしょうし。

「ケスラー、グリューネワルト伯爵夫人の弟ですが、最近どうでしょうか？」

「はっ、相変わらず問題を起こしております、走るトラブルと言われてるそうです」

「ハハハ、相変わらずよの」

父上楽しみますね。

「普通なら放校処分になるのをそのまま居られるのが、お父様のお陰だと判ってないんでしょうね、

あの目見れば、お父様を相当恨んでいるのが判りますし」

「そうかテレーゼにも判るか」

「判りますよお父様、ギラギラした野心がただ漏れです」

「お父様提案なのですが、爵位もない貧乏騎士の小倅と馬鹿にされるのが相当頭に来るのでしょうかね、

それならグリューネワルト伯爵夫人の身内なのですから、男爵か子爵を与えてしまったら如何でしょうか？」

ふっいずれ、平民や下級貴族の支持を受ける時、

爵位も持たない貧乏貴族出だと言う事もある程度加味されているから、

そのフラグを折ってあげましょう。

ラインハルト・フォン・ミューゼル男爵殿、いや子爵殿かな。

「そうかのあの者が受けるかの」
そうでしょうね、お父様もそう思う出しようね、ケスラーも頷いてるわね、
私も思うよ、けどね作戦はビッテンの様に突撃だけじゃ無いんだよ。
搦め手から攻めるのも手なんだよ。

「お父様、其処は搦め手から攻めるのが手ですよ」

「ほうテレーゼならどうする？」

「グリューネワルト伯爵夫人を使います、
まず伯爵夫人にミューゼルの幼年学校における虐めを誰かに教えさせて心配させます。」

そしてお父様がその旨で彼に爵位を与えろと言えば、伯爵夫人は喜んで受けるでしょう。

そうすればシスコンのあの者の事です、一も二もなく受けるでしょう」

うわー言い過ぎたかな、お父様もケスラーも引いてるよ。

「ほほーテレーゼ様流石ですな」

やっぱ爺様起きてたか。

「うむ流石じゃ」

「お父様の子供ですし、良い師匠達が居りますからね」

「ハハハそうかそうじゃの、のうグリーンメルス、ケスラーよ」

「あと今回の爵位授与のカモフラージュにイゼルローンで活躍したミュッケンベンガー大將は伯爵家の次男で爵位を継げません、取りあえず大將を男爵か子爵に叙勲した方が良いかと其れだけの武勲を立てていますし、ここで恩を売っておけば後々役に立ちます」

「他の者が不公平を感じるのではないかの？」

「その辺は大將は十分な武勲をあげてますから大丈夫ですね、あの者については、お父様だから大丈夫でしょう」

「ハハハ儂は寵姫には甘いからの」

「そう言う訳です」

「陛下流石でございますな、テレーゼ様なれば此から安心ですな」

「自分が無能と知っている者と違い、

自分が誰よりも優れていると言い、

自分よりも劣る者は齒牙にもかけない者には、それ相応の嫌がらせを受けるべきですからね」

フッフ、貴方がお母様に対して付けた渾名のチシャ夫人。

貴方の嫌いなチシャの様に巻き巻きしてあげますよ。

ラインハルト・フォン・ミューゼル君。

第三十話 チシャ娘（後書き）

増補しました

第三十一話 大いなる罠（前書き）

むっちゃ黒いです。

第三十一話 大いなる罠

帝国歴478年10月2日 午前

■オーディン ノイエ・サンスーシ ベーデミュンデ侯爵夫人邸

前回の会議に於いて決まった作戦を実行すべく必要なシナリオを作成中です。

ユリアンのイゼルローン日記に帝国歴488年に捕虜交換が行われていて其れが5年ぶりしかも50年ぶりの大規模交換だと言うことは、

483年に交換が行われている計算になるがその時は少数しか交換されていない。

エコニアにはケーフェンヒラー大佐以下55000人ほどが居るはずだしどうするか、

エコニアはヤンが来年赴任する所だからな、それに暴動があるどうすべきか。

みすみす死ぬ兵達を助けたいでしょう。

ケーフェンケラー大佐以下55000人を恩赦で引き取れれば、大佐の証言から帝国内スパイ網の存在を知らせることが出来る、しかしケーフェンヒラー大佐は帰還を拒否するだろう。

しかしヤンがアッシュビーを調べてローザス提督に会いに行つて、直ぐにローザス提督が自殺他殺事故とも判らない睡眠薬の量間違えで死去している、

そしてスパイ網の答えを出した直後にケーフェンケラー大佐が急死している。

あまりにも出来すぎていないか、ヤンの報告書自体25年間の機密扱いに成った。

ローザス提督とケーフェンヒラー大佐は口封じに殺られた可能性が大きい。

民主共和制と言いながら衆愚政治で憂国騎士団などが平気で闊歩している国だ、

ヤンの暗殺未遂とかもしている、あり得すぎる事態だ。

ヤンが事態を起こす前ならケーフェンヒラー大佐を呼び戻すことが出来るかもしれない。

此方もある程度の大物の捕虜を出して交換するしかない。そのへんは皆に相談しましょう。

仕方ない此処は一端諦めて、慰問袋だが帝国の缶詰や食料品、本、衣類、あと1人1本のワインだね出来るだけ良いワインを送りましょう、捕虜に里心を付けることも出来ます。

410年物は流石に無理だが463年物辺りなら揃うでしょう。

463年物も同盟では結構なビンテージワインですから、おそらくはかなりの数がピンハネされるでしょうね。

ピンハネされた物は同盟内で高値取引されるでしょう、

収容所所長とかの小役人が自分の懐を潤すために。

捕虜が帰還してワインを飲んでないあるいは数が合わない状態ならば、

『同盟は捕虜に対しての救恤品を搾取している』と宣伝できますから。

それを口実に戦闘を行うことが可能ですからね。

救恤品送付と捕虜交換については。

多少強引だが名目はお父様の在位23周年記念として、俘虜に成った者達にも慈悲を行い、帰国させ恩赦を与えて罪に問わない様にする。

エコニアだけだと勘ぐられるから、数的には30万程度は交換しよう。

作戦としては、ミュッケンベルガーを子爵に叙勲し、ラインハルト叙勲も行う、

その時ついでに恩赦も行う形にすれば、門閥貴族やリヒテン爺さん達うるさ型も、
ラインハルトの批判が大きくて、それほど文句は出ないはず。

そうなると慰問袋と捕虜交換に付いて、
即位の月の479年の2月に間に合うように今月中には準備を終えないとだめだな。

フェザーンの高等弁務官事務所から捕虜交換と慰問袋送付を、同盟へ連絡しよう。

この頃のフェザーンは黒狐じゃないから、陰謀に巻き込まれる可能性は低いだろう。

その後イゼルローンに居るミュッケンベルガーに連絡して同盟に使者を送り、

受け渡しの話し合いをさせよう。

そうなると大規模な事になるから、
父様と爺様とケスラーに相談しよう、早いうちがいいな今から連絡してみよう。

帝国歴478年10月2日 午後

■オーディン ノイエ・サンスーシ 小部屋

早速父様のところへ、爺様、ケスラーがやって来た、ケスラーは爺様の副官のポジションみたいになっています。

父様が聞いてきます。

「テレーゼ突然いったい何のようじゃな」

「はいお父様、昨日の計画シナリオを考えまして、是非お父様達に演技と品物の準備をお願いしたいのです」

「シナリオはこうです、

その1、叛徒共に俘虜に救恤品として慰問袋送付を提案します。

此は1月の終わりまでに俘虜に届くようにします。

その中身ですが、衣類、本、食料品なのですが、一番大事なのが463年物辺りのビンテージワインを1人1本です。」

3人とも、えって顔してますね。

それはそうですね、俘虜にビンテージワインなんて帝国じゃ普通送りませんよ。

「なぜワインを？」

お父様も疑問ですよね。

「第1には俘虜に里心を付かせる為、第2に俘虜がお父様に感謝すること、

第3に此が一番大事なのですが罨です」

「罨じゃと？」

みんな怪訝な顔してるね。

「そうです、叛徒共の組織はかなり腐敗が進んでいるそうです、

其処へ高く売れるビンテージワインが数百万本送られて来たらどうすると思いますか」

「なるほど其れを掠め取ろうとする訳ですか」

「ケスラー正解ですよ。小役人が自らの懷を暖める為に掠め取るでしょう」

「しかし其れが罨じゃと言うのが解せんが」

「お父様そこです、俘虜交換をしてワインが配給されたかを調べて、数が合わないなど判れば、叛徒共は共和主義自由主義は平等な世界と言いながら、俘虜の生活品まで掠め取る盗賊と変わらない集団だと、幻想を抱いている臣民に現実を見せることが出来ます。」

「なるほど凄いことじゃの」

「それなら臣民に対する強烈なインパクトになります」
みんなも驚いてるね。

「ではその2、俘虜交換による帰還です、

普通であれば俘虜は不名誉な者ですが今回お父様の戴冠23周年とイゼルローン勝利の恩赦として、

帰還兵恩赦を行います、彼らは確かに叛徒共の主義に毒された者もおりましようが、

純粹に帝国を思う者達が多いはずです。

それに皇帝陛下の慈悲を受けて恩赦されて社会生活に戻れると成れば臣民の忠誠度も上がります。

また生活品を掠め取られたと知れば叛徒共に対する幻想もきえるでしょう」

「なるほどのそう言う見方もあるのじゃな」

「俘虜のデータを見たのですが、エコニアに第二次ティアマト会戦で俘虜になった、

ケーフェンヒラー大佐と言う方が未だに抑留されています。もう4年も抑留では気の毒なので是非帰還させてあげたいです」

「テレーゼ様俘虜交換数ですが如何ほどをお考えでありますか」
まあ其れを考えるよね。

「30万ほどを計画しています」
「30万とな」

「最低でもその位じゃないと罠になりませんか、それから、救恤品と俘虜の受け渡しはイゼルローンで行った方が良いかと」

「なぜじゃフェザンで良いのではないか？」

「フェザンだと機密がばれる可能性や何か仕掛けられる可能性が有ります」

「うむそうじゃの、ケスラーそうせい」

「御意」

「その3です、昨日話したように恩赦をうるさ方から霞ませる為、お父様の戴冠23周年でイゼルローン防衛で活躍したミュッケンベルガーに子爵位と所領を下賜します、更にグリューネワルト伯爵夫人の弟に男爵を下賜します、

これで恩赦は完全に霞みます。

ミュッケンベルガーはお父様に感謝するでしょう」

「そうじゃのミュッケンベルガーはよく働いてくれるからの」

「そうですよ、ミュッケンベルガーには、非難は少ないはずです。グリューネワルト伯爵夫人の弟は徹底的に非難されるでしょうね。

特にフレーゲル男爵辺りは激高しそうですよ」

「ハハハ確かにあの者は激高しそうじゃの」

「陛下目に浮かぶようすな」

「全くじゃ」

笑いが発生していますが、そんなに可笑しいかな。

「こんな感じかですか『伯父上あのようなげせんの者が私と同じ男爵ですと!』言いそうですね」

「爵位を与える時グリューネワルトを使うというのがどの様な感じじゃ?」

「ケスラー、伯爵夫人の所にも潜り込んでいるのでしょ?」

「御意」

「それに噂を流させます。幼年学校で弟が爵位がないと虐められていると、

そしてそのことで喧嘩をして放校されるかも知れないと」

「なるほど」

「そして、お父様がお渡りになってこう言うのですよ。

『そちの弟の事じゃが、この所幼年学校で爵位も持たぬ小僧となじられておるそうじゃ、

そこでじゃ、そちの弟にグリューネワルト伯爵家の家門で断絶している、

シェーンヴァルト男爵位をやろうと思うがどうじゃ?』と。

「なるほどのいい手じゃ」

「後今思いついたのですが、あの一緒にくっついている赤毛の者の

親を帝国騎士に叙勲したらどうか、あの者の親は司法省の下級官吏のようですね、

今では帝国騎士はたいした価値はありませんから、

永年勤続かなにかで褒美に叙勲してしまうと良いのでは思うのです」

「ふむ其れぐらいであれば文句も出ぬまい」

「それでは、ケスラー準備をお願い、

お父様は国務尚書と軍務尚書に俘虜に対する事と叙勲に対する事を、そしてミューゼルの噂が流れたら伯爵夫人の元へお願いします」

「御意」

「うむテレーゼ任しておきなさい、演技は得意じゃからな」

「確かに陛下の演技は子供の頃からですからな年期が違いますな」

第三十一話 大いなる罠（後書き）

ケーフェンケラー↓ケーフェンヒラー修正しました。

改訂しました

そちの弟にグリューネワルト男爵位をやろうと思うがどうじゃ？』

そちの弟にグリューネワルト伯爵家の家門で断絶している、
シェーンヴァルト男爵位をやろうと思うがどうじゃ？』

グリューネワルト男爵家↓シェーンヴァルト男爵家

第三十二話 皇帝の忙しい10月（前書き）

シーンが何回も変わるので分割。

陛下が演技します。

お茶目に30万から100万へ増えた。

第三十二話 皇帝の忙しい10月

帝国歴478年10月10日

■オーディン ノイエ・サンスーシ 謁見室 クラウス・フォ
ン・リヒテンラーデ

陛下から午前9時に謁見室に参内せよと前日に連絡がつあったが何であろうか。

ここ数年陛下が真面目に執務を取られる事があるのでその事であろうか。

謁見室に行くと既に陛下が待っていていらっしゃった。

陛下は私に驚くべき事を仰った、酔っておるのでは無いかと疑った物じゃ。

「国務尚書ご苦労」

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「うむ今日呼んだのは他でもない、叛徒共に囚われておる我が臣民の事じゃ」

「と申しますと」

「うむ臣民達が叛徒共に囚われ窮乏しておろう、そこでじゃ救恤品を送りたいと思うてな」

何を言うのじゃ陛下は叛徒に囚われた者など捨て置けばよい物を。

「恐れながら皇帝陛下囚われし者共は陛下に対しての忠誠心が足らぬからみすみす叛徒共に囚われたのですぞ」

「国務尚書、卿は皇帝より偉いのか？」

「滅相ございません」

陛下お怒りなのか。

「では予が良いと申しておるのじゃ囚われし者に救恤品を送る事にするのじゃよいな」

「お任せ下され皇帝陛下」

「うむ入れる品は三長官を呼んで有るので此から話そうぞ」

うむ仕方が無からうグリューネワルト伯爵夫人が来られてからの陛下はお變わりに成られた。

「三長官をこれへ」

エーレンベルク、シュタインホフ、ベヒトルスハイムが入室してくる。

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

3人が同じように挨拶を行う其れを見て陛下が。

「三長官ご苦勞」

「さて既に國務尚書には伝えたが叛徒共に囚われた者達に救恤品を送る事にするのじゃよいな」

「恐れながら皇帝陛下囚われし者共は陛下に対しての忠誠心が足らぬからみすみす叛徒共に囚われたのでございます、忠誠心有れば自決して憚らないかと愚考いたします」

ベヒトルスハイムの阿呆が先ほど儂が行った事と殆ど同じではないか、陛下がお怒りになるぞ。

「ベヒトルスハイムよ卿は予より偉いのか？」

「いえその様な事はございません」

「予が良いと申しおるのじゃ、その旨承知せよ」

皆驚いておるわ、儂も驚いたわ。

「「「御意」」」

「そこでじゃ叛徒共に囚われている者達は150万程じゃそうだな
エーレンベルク知んようじゃな。

「よいわ後で調べよ」

「御意」

「そこでその者全員に帝国の食料品、衣類下着など、そして此が一番大事じゃ463年物のビンテージワインを1本ずつ袋に入れ送るのじゃ」

なんじゃと陛下血迷われたか、俘虜などにワインしかもビンテージワインじゃと。

「恐れながら陛下」

「何じゃ国務尚書」

「俘虜ごときにワインを与えるしかもビンテージなど贅沢の極みで
ございます」

「尚書よ！2度と聞くまえ、卿は予より偉いのか！」

陛下のお怒りじゃ。

「滅相もございません」

「では良いなしかと申しつけるぞ、

来年の1月までに俘虜に届くように致せ、中身も変えるでないぞ」

「「「御意」」」」

「其れとじゃこの度救恤品を送る事と共に叛徒共と俘虜の交換を致す」

「良いのでありますか」

「で如何ほどの人数を」

「帝国にいる叛徒共の俘虜はいくらおる？」

やはり判らんか。

「判らるのであれば、直ぐにでも連絡せい」

「御意」

エーレンベルク慌てて連絡するのか。

「陛下しばしお待ちを」

「うむ判ったわ」

「陛下早急に調べさせております故暫しご猶予を」

しばし休息かの。

女官が御茶を持って参った。

御茶を飲み終わる頃陛下がまた話された。

「話が変わるが、先頃の叛徒共のイゼルローン襲撃を撃退し誠に見事じゃった」

「「「ありがたき幸せにございます」」」

「聞くところによると増援部隊指揮官ミュッケンベルガーは水際だった指揮だったそうじゃが、

駐留艦隊司令官の指揮は酷かったそうじゃの、
しかも駐留艦隊司令官と要塞司令官が常日頃から喧嘩をしているそうじゃな」

「御意そういう報告が来ております」

「エーレンベルクよ2人を交代させよ、上級大将に昇進させ軍事参議官に親補せよ」

「ベヒトルスハイムよ、ミュッケンベルガーは上級大将に昇進させ宇宙艦隊副司令長官にいたす良いな」

「「御意」」

うむかなりの人事じゃな。
エーレンベルク連絡が来たようじゃな。

「陛下お待たせいたしました。叛徒に囚われし帝国の俘虜155万
ほどだそうでございます、

叛徒共の俘虜は220万ほどだそうでございます」

「ご苦劳じゃ軍務尚書」

「ありがたき幸せ」

「では救恤品は160万個用意いたせ、多い方が良からう」

「「「御意」」」

「俘虜の交換は100万の俘虜を受け取ろうぞ、叛徒の俘虜も同数
送り返すのじゃ」

「其れは余りにも」

「予が良いのじゃ判ったな」

「「「「御意」」」」

「国務尚書連絡はフェザーンの弁務官事務所から叛徒共の事務所へ
連絡させ決めさせるのじゃ。

まずは1月までに俘虜に届くように救恤品を送るのじゃぞ、

その後4月までには俘虜交換じゃ。

努々間違えるでないぞ此は勅命じゃ」

「御意」

陛下が恐ろしゅう成ったわ。

しかし最近陛下は覇氣が在られる、儼も仕え甲斐が有るという物じ
や楽しみになってきたの。

「典礼尚書をこれに」

ん典礼尚書となあの老いぼれに何の用じゃ？

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「うむアイゼンフートよ、先頃のイゼルローンの戦闘は知っておろう」

「勝ったと言うだけでしたら」

「うむそこでミュッケンベルガー伯爵の弟が司令官として活躍してな」

「ほうほうして如何致すのですかな」

何を為さるんじゃ陛下は？

「今その者は分家して帝国騎士でな若かりし頃より帝国の為に活躍したのじゃ、

今回上級大将に昇進させ、宇宙艦隊副司令長官にする、

その功績を称えて子爵と所領を下賜することにした」

ふむミュッケンベルガーであれば、伯爵家の出ゆえ反対もさほど無かろう。

「してどの家門を下賜いたしますか」

「うむエッシェンバッハは絶えて久いの」

「さようでございます」

「ではそれにいたそう」

「御意」

「皆の者ご苦勞で有った」

「」「」「御意」「」「」

ふうやつと終わったわ、しかし此から大変じゃ。

1月では今月中に準備を整えねばならんな、まずはフェザーンじゃな。

帝国歴478年10月10日

■オーディン ノイエ・サンスーシ グリユーネワルト伯爵夫人邸

リユーネワルト

アンネローゼ・フォン・グ

里帰りしていたメイドのハンナ帰ってきました、ハンナの弟が幼年学校の生徒だと聞いて弟とジークの事を知らないかと尋ねたのですが、あんな事を聞くとは思いませんでした。

「ハンナお帰りなさい」

「伯爵夫人ただいま戻りました」

「実家は良かったですか」

「はい」

「所でハンナの弟は幼年学校の生徒なのよね？」

「そうでございます」

「それなら弟の話とか知らないかしら」

「え・・・」

「どうしたのハンナ」

「いえ・・・」

「言いにくい事なの？」

「いえ、あくまでも弟からのまた聞きでございますので、お許し下さい」

「いいのよ教えてちょうだい」

「はい、ラインハルト様は幼年学校で爵位がない貧乏貴族と虐められていたとの事です、

そしてそのことで喧嘩をして放校されるかも知れないと、あくまで弟から聞いた話でございます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ラインハルト・・・ジーク」

「お許し下さい伯爵夫人」

「ハンナ良いのよ教えてくれてありがとう、
疲れたでしょう今日はもう良いわ」

「では失礼いたします」

ラインハルト、ジークあれだけ無茶をしないでと言ってるのに、なぜ判ってくれないの。

あの子達が遠くへ行ってしまう様だわ。

帝国歴478年10月12日

■オーディン ノイエ・サンスーシ グリユーネワルト伯爵夫人邸

オン・グリユーネワルト

アンネローゼ・フ

陛下が来て下さった、昨日一日ラインハルトとジークの事を考えていて悲しくなってきました、
其処へ陛下が来て下さった。

「陛下ご機嫌麗しく」

「そちは疲れておるようじゃの」

判るのですね。

「どうしたのじゃ」

「陛下大したことではございません」

「弟の事じゃな」

陛下も知っておられる。

「陛下そうでございます」

「予も先ほど聞いたのじゃ、そちの弟が爵位もない貧乏貴族と虐められているとか、その為に放校処分前とか」

「陛下」

「アンネローゼよ予に任せよ、爵位がないというのであれば予が下賜しようぞ」

「陛下其れでは他の方が」

「心配するでない予が良いのじゃ、國務尚書には言わせん」

「陛下」

「幼年学校も心配するでないぞ、アンネローゼ予に任せよ」

「陛下もったいお言葉です、弟に代わり御礼いたします」

「ハハハよいよい」

第三十二話 皇帝の忙しい10月（後書き）

リヒテン爺さん達完全に陛下の変化をグリーネワルト伯爵夫人のせいだと思ってます、その為テレーゼは安全に。

第三十三話 同盟も慌ただしい10月（前書き）

話す人がころころ変わり慌ただしいです。

第三十三話 同盟も慌ただしい10月

帝国歴487年10月11日

■オーデイン 軍務省
フォン・エーレンベルク

軍務尚書室

ハーロルト・

俘虜の交換についてリストを制作すべく部下達に指示をしていたところ、陛下からご連絡があり早速人払いをして応対した。

「エーレンベルクよ」

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「そちに頼みがあつてな」

「何なりと御命じ下さい」

「叛徒の収容所でエコニアなる所が有るそうでな、其処におる全員を帰還させるのじゃ、

其処に第二次テアマト会戦で俘虜になったケーフェンヒラーと言う男爵が居るそうじゃ、

その者も必ず帰還させるのじゃよいな」

「その者は何か有るのでしょうか？」

「いあテレーゼが41年間も囚われて可哀想だと申すのでな、

それに昔の時代の事を色々聞いてみたいそうじゃ、その者の帰還をするようにせい」

「御意」

ふう、殿下の気まぐれか、しかし陛下のご命令だ確りやらねばならんな。

帝国歴478年10月11日

■オーディン 国務省

国務尚書室

クラウドス・フォ

ン・リヒテンラーデ

昨日から俘虜の対応で忙しくなってきた、ハタと思うとその費用は如何するか聞き忘れたわい、早速連絡しようとする、先に陛下からご連絡があった。

「国務尚書ご苦勞」

「皇帝陛下におきましてはご機嫌麗しく」

「うむ」

「今日は如何様な事でございました」

「それよ、昨日予算に付いて言わなかったのな」

陛下も忘れていたのじゃな。

「今回の予算じゃが予のポケットマネーから出す事にする」

「陛下、平民から取りたてれば宜しいかと存じますが」

「予がしたいのじゃそのようせい」

無駄じゃな此処は陛下の考えにのろうぞ。

「御意にございます」

「其れとじゃ、救恤品と俘虜の受け渡しはイゼルローンかエル・ファシルで行うようにするのじゃ」

「御意」

「うむ頼んだぞ」

さてフェザーンのシューレンブルクに連絡じゃな。

でおったか。

「久しぶりじゃのシューレンブルク伯」

「リヒテンラーデ侯もご機嫌麗しく」

「うむ」

「本日はどのような事でしょうか」

「其れより会話は漏れぬか？」

「大丈夫に御座います」

「では良いな。」

良いか恐れ多くも皇帝陛下が叛徒共の俘虜となっている臣民共に救恤品を下賜なさる。

其れが1月までに俘虜の元へ届くように致す、

叛徒共の政府の代表者とその方が交渉せよ。

その後俘虜の交換をする、其れが4月までには交換できるように交渉するのじゃ。

言うておくが、陛下から直接指摘された事じゃ必ず救恤品が先、俘虜交換が後じゃ、

受け渡しはイゼルローンかエル・ファシルじゃ。シューレンブルク伯よいな」

「リヒテンラーデ侯、陛下はなぜこのような事を」

「陛下の思し召しじゃ」

「御意」

宇宙暦787年10月13日 帝国歴478年10月13日

■フェザーン 自由惑星同盟高等弁務官オフィス ラファエル・ラ・フォンテーヌ

昨日突然帝国の高等弁務官事務所から、会談を持ちたいとの連絡があった、

不倶戴天の敵であるが、以前サイオキシン麻薬摘発では共同行動を取った事もあり、

政府に連絡を入れ指示を待った。

数時間後やっと政府から会談せよとの命令が下った。

秘匿回線のホットラインで話し始めるシュールンブルク伯の提案内容は驚愕を持つ物であった。

「恐れ多い事なれど皇帝陛下は敢闘むなく、
貴勢力によって囚われの身となっている我が臣民全員に、
格別なる慈悲を持って救恤品を下賜なさるとの思し召しでございます」

何だと、帝国は捕虜になった者は忘恩の徒として処罰していたのではないのか、

いきなりのこの仕打ちはどんな変化なのだ。

「なるほど、其れを政府に伝えて欲しいという訳ですな」

「左様、恐れ多くも皇帝陛下が臣民の苦しみをお聞きになり、哀れに思ってお手を差し伸べられたのです

、その為其方に囚われている臣民の詳しいリストをお願いしたいのです」

ふん民衆を搾取してるのがお前らだろう。

「更にその臣民達を帝国へ帰還させよとの思し召しで御座いますな」

捕虜を帰せと言うのか、只帰すだけではなく此方も帰して貰わないと。

「しかし只帰せと言ってもそう旨くは纏まりません」

「帝国の臣民100万を其方が返還して頂けるなら、帝国が捕らえている其方の将兵100万を返還いたします」

うむ捕虜交換という訳か、先頃の第四次イゼルローン攻略の失敗で軍は80万近い戦死者を出している、

帰還兵全員が復帰する訳では無いが100万は魅力的だ、しかし自分の一存では出来ない其れが民主共和制だ、ハイネセンに連絡し指示を受けよう。

「ただ第1に救恤品の下賜此は来年1月までに下賜して頂きたい、其れが臣民に行き渡って身支度が出来たら4月までに返還をお願いしたい、

返還場所はイゼルローン或いはエル・ファシルでお願いしたい、此は皇帝陛下の勅命ですので変える訳にはいきませんのじゃ」

「シュールンブルク伯、非常に魅力的なご提案ですが、政府に連絡をし指示を受けねばなりませんので次回にご連絡いたします」

「判ります、なるべく早い返答をお待ちしております」

ハイネセンに早く連絡しなければならん100万の帰還なら大事だ。

宇宙暦787年10月13日 帝国歴478年10月13日

■自由惑星同盟ハイネセンポリス 最高評議会 最高評議会議長
ディオニシオ・エンリケス

フェザーンの高等弁務官フォンテーヌから一度目の連絡があり、帝国が対話を求めていると聞き、委員達を集め評議した結果、提案内容が何かを聞くようにと言うまで3時間もかかるとはな。

命令を出して2時間、フォンテーヌより帝国からの提案が知らされたとき、

我々は驚きを持って其れを聞いた。

帝国が捕虜交換を求めている、それ自体は以前にも何度もあった。しかし今回は100万単位での交換だと言う、僅か一月前にイゼルローンで80万近い戦死者をだした為、

我々の支持率は低下気味だが、此処で4月までに100万の捕虜が帰還できるなら支持率だけでなく家族も含めて200万票以上の票が計算できる。

財務委員長などは『捕虜には只で喰わさないと成らないが、市民なら逆に税を納めてくれる』と積極的だ。

国防委員長も『軍の再建に帰還兵が使える』と賛成のようだ。他の委員も自分の支持率のUPにつながるならと賛成の意向だ。評決を取ることなく賛成で終わりそうだ。

もう一つの皇帝からの救恤品の下賜とは何が起こったのか、フォンテーヌによれば皇帝の慈悲らしいが、帝国はよく判らない国だ。

此についても財務委員長は『財源を掛けずに済む』と言う。情報交通委員長だけは、『各収容所に配るのに時間がかかり混乱が

生じるのではないか』と言う、
国防委員長は『先に捕虜交換では駄目なのか』と言うが、勅命では変える事はできんだろう。
他の委員の反対はないようだ。

そうしていると人的資源委員長から、『我が軍の捕虜に救恤品を送らないのか』と提案が出た。

国防委員長が『帝国に送っても兵には届かんよ』と言う。
理由を訪ねると『皆途中で貴族共に搾取されてしまうようだ』とのこと。

財務委員長が『予算的にみすみす届かない物に掛ける予算は出せない』と言う。
此は反対意見が多いので却下だな。

帝国は捕虜交換をイゼルローン或いはエル・ファシルで行いたいと言うが、
イゼルローンでは行った瞬間トールハンマーで焼かれるのではという異説が多く
エル・ファシルでの交換を強く求めようと委員会で議決を行った。

宇宙暦787年10月14日 帝国歴478年10月14日

■フェザーン 自由惑星同盟高等弁務官オフィス ラファエル・ラ・フォンテーヌ

ハイネセンからの帝国による提案受諾の連絡があり早速シュールブルク伯へ連絡を取った。

「これはシュールブルク伯、今日は良い天気ですな」

「誠に良い天気です、其れですと受諾できましたかな」

「自由惑星同盟政府は帝国の捕虜交換と救恤品について受諾します、

尚受け渡し場所はエル・ファシルを希望します」

返答が遅いな、やはりイゼルローンでないと駄目なのか？

「判りました、帝国政府は貴官の提案を受ける事とします」

「では詳しい話し合いを行いましょ」

帝国歴478年10月14日

■オーディン 国務省

国務尚書室

クラウド・フォ

ン・リヒテンラーデ

フェザーンのシュールレンブルク伯より連絡があり叛徒共が受諾したとの連絡をしてきおった、

交換場所は案の定エル・ファシルじゃトールハンマーを撃たれる恐怖があるうからな、

早速陛下にお伝えしなければならん。

ノイエ・サンスーシに連絡を取り陛下にお伝えする。

「皇帝陛下におきましてはご機嫌麗しく」

「うむ国務尚書いかが致した」

「かねてより行っておりました俘虜の交換と救恤品についてエル・ファシルで交換と受け渡しを行う事を受諾いたしました」

「うむ国務尚書ご苦勞で有った、シュールレンブルク伯もご苦勞で有ったと伝えよ」

「御意」

「此からも頼むぞ」

「御意」

第三十四話 アンネローゼ怒る（前書き）

ヤン初登場

第三十四話 アンネローゼ怒る

帝国歴478年10月30日

■オーディン ノイエ・サンスーシ 小部屋
フォン・ゴールデンバウム
テレーゼ・

同盟から受諾の返事が来てリヒテン爺さん達があたふたしているのを見ながら、

暫くは皆の所へ行ったり遊んだり勉強もしたり。

お母様やお父様と出かけたりしまし。

そしてお父様はお母様はとても仲が良いです、

えーと子供には目の毒ですんで早く寝ました。

お渡りの日を聞いたらお母様4日、他の何人か居る側室2日、アンネローゼ1日だそうです。

221

そんなこんなで日待つ事2週間ほどたった、

一昨日リヒテンラーデ侯から救恤品の準備が出来たとの報告を受けた為、

密かに集まり密談です、参加者は何時ものようにお父様、私、爺様、ケスラーです、

部屋の外や床下屋根裏には爺様の部下が隠れて防衛しており、部屋自体が戦艦艦橋用の遮蔽装置で音漏れナシです。

科学ってすごいね。

「早かったですよね、もう少しかかるかと思ったんですけど」

「国務尚書達には儂が発破を掛けたからの」

にこやかですな父様。

「陛下あれは傑作でしたな、裏から見ていると可笑しゅうて堪りませんでしたわ」

爺様も笑ってます、真剣なのはケスラーだけだけどケスラーも苦笑いに近いぞ。

「それで中身は大丈夫なんですか？」

「確りとした監視を付けて納品から箱詰めまで監視した後、

帝国財務省の札を貼りたかったのですが、財務尚書があつた男では逆に略取されかねない為、

恐れ多い事ながら皇帝陛下御財貨と言う札を貼らせて頂きました」

「ハハハそうじゃな、あの財務尚書ではやりかねん、

ケスラー気にせずとも良い、ようやってくれた」

「ありがたきお言葉」

あのカストロプ公が確かにやりかねないや。

「イゼルローンへの輸送は誰がやるのですか、

なまじ門閥貴族のどら息子とかだと事故とかと称して盗むんじゃない？」

「ホッホッ全くその通りですな」

「うむ儂の筆頭侍従武官のケッセリング少将を臨時の輸送指揮官に当てるつもりじゃ」

「ケッセリングならば生真面目ですし確と任務を遂行いたしましたしもう」

「艦隊には手の者も参加させ、荷物が確り叛徒共に渡るまで監視いたします」

「TVクルーも乗せない駄目ですね。

此を帝国全土に流して平民や下級貴族に慈悲深い皇帝陛下というイ

メージを持たせないと」

「そうじゃの忘れるところであつたわ」
危ない危ない。

「それから儂の愚息も参謀長として参加させますの」

へー爺様の息子って普段は領地に引きこもってるんじゃないの。

「ほうマンセルが来るのか、久しぶりじゃな」

「普段は裏方をさせておりますからな、このような時こそ役にたちましよう」

なるほどね裏の仕事か流石だね。

「ケッセリング少将だと作戦に問題が有る可能性があります」

「ではケスラー如何致す」

「参謀に全体を見下ろせる者を付ける事でございます」

「ふむ誰か心当たりでも居るのか」

「はっ小官が4年の時ルームメイトだった2期下の、

エルネスト・メックリングーという者で有れば役に立つかと」

えー芸術家来たー！

「してその者は今何処に居るのじゃ」

「統帥本部作戦課に配属されております」

「ではシュタインホフとエーレンベルクに連絡し艦隊へ配属させよう」

「御意」

メックリングーがゲットできるチャンスかな、

けど取りあえずケスラーの知り合いならいずれ引っ張れるでしょう、それよりは門閥貴族だね。

「所でブラウンシュバイツ公とかの門閥貴族の方々に正式に発表するのは叙勲式で良いのですよね？」

噂が流れて混乱は無いのでしょうか？」

「テレーゼ様其処はお任せ下さい。噂とは少しの真実に多くの嘘を混じらせれば必然的に霞む物でございます」

「なるほど、ケスラーに任せておけば心配ない訳ですね」

「そういうことじゃの」

「品物は既に輸送艦に積み込みを終了しておりますので、明日出立いたします。」

「海賊や海賊に扮した者達への対処は如何ですか？」

「千隻の護衛艦隊を用意いたしました」

「なるほどね、イゼルローンまで40日ですね、着くのは12月10日ぐらい其処からエル・ファシルまで4日と言うところですね」

「そうでございます、受け渡しは不慮の事故等を考えまして12月20日前後を予定しております」

そうするとユリアンが16日でイゼルローンハイネセン間を移動しているから同じぐらいだとして、

1月10日前後にハイネセンに届くか、何処かで中を調べて10日ぐらいはよけにかかるとしたら。

エコニアには10日ぐらいでギリギリ1月中には届くな。

「楽しみですね俘虜の皆が喜ぶでしょうね」

「そうですね」

「そうじゃの」

帝国歴478年11月1日

■オーディン 宇宙艦隊第2宇宙港
ケッセリング

レオポルド・フォン・

皇帝陛下から絶大の信頼を受けて小官は今日宇宙へと旅発つ。
叛徒共に囚われている同胞の為に陛下自ら救恤品を下賜なさるとは、
なんと陛下はお優しいのであらう、その輸送の任に小官を抜擢して
頂くとは一生の譽だ。

陛下自ら小官に対して『ケッセリング、卿に叛徒に囚われている者
達への救恤品を届ける指揮官を任せる』とお言葉を頂いたのだ。
我がケッセリング家末代までの譽だ。

陛下のご心配もお聞きし絶対に海賊達から守り抜こうと肝に決めた。
小官の参謀長には陛下の嘗ての侍従武官グリーンメルスハウゼン子爵
令息のマルセル・フォン・グリーンメルスハウゼン准将だ。
彼は荷物のお目付役らしいので。

本来の作戦を立てるのは、若干24歳なれど小官よりよほど出来の
良い大尉である。

数日前彼に会い話を聞いて自分より遙かに優れた人物で有ると知っ
て、

全般的な作戦指揮を任せる気になった。

晴れの舞台だ皇帝陛下と皇女殿下臨御の中の出立とは、まさに末代
までの譽だ。

皇帝陛下必ず送り届けます。

■オーディン 宇宙艦隊第2宇宙港
ールデンバウム

テレーゼ・フォン・ゴ

ケッセリング少将の艦隊を見送りながら、寒さに震えて耐えています。

此で種は蒔きました、後はどう育つか楽しみです。

帝国歴478年11月1日

■オーデイン ノイエ・サンスーシ グリユーネワルト伯爵夫人邸

アンネローゼ・フォン・グリユ

ーネワルト

今日弟とジークがやってくる、

皇帝陛下の思召しで年4回だった面会日が年12回に増えてとても嬉しいわ、

陛下が私たち姉弟をよく思っていてくれるのはありがたい事です。

けれど今日はラインハルトに一言言わなければ成りません、陛下のお陰で放校処分だけは撤回して頂いたそうですので、此から暴力を振るわない様にきつく叱らなければいけません。

ジークはラインハルトに迷惑しているのでは無いでしょうか、あの子は優しい子ですから、巻き込まれているのではないのかと。ラインハルトとジークが来たようですね。

「姉上」

「アンネローゼ様」

無邪気に来ていますが、今日はお説教です。

「ラインハルト貴方は学校で暴力ばかり起こしているそうですね！」
「姉上いきなりなんですか」

「アンネローゼ様ラインハルト様はアンネローゼ様の為に」

「ジーク今は黙りなさい」

「姉上?？」

「私があなた達が学校で孤立し暴力沙汰ばかりで、

放校処分前だと聞いてどれだけ悲しんだか判りますか!」

「しかし奴ら姉上の悪口を」

「お黙りなさい!」

「悪口を言われたからと暴力振るう人がいますか、

私は貴方をそんな子に育てた覚えはないです」

「良いですかラインハルト此からは暴力は止めなさい、
そうしないと今度こそ放校処分になってしまいますよ」

「姉上」

「今回の事も皇帝陛下が事態の打開を図ってくださらなければ、放
校処分だったのですよ」

「・・・・・・」

「貴方が虐められる原因が爵位がないと言う事だからと、
陛下が貴方に男爵を授けてくれるのですよ」

「・・・・・・」

「ラインハルト様が男爵に」

「姉上」

「ジークもラインハルトに迷惑しているのなら教えてね」

「アンネローゼ様その様な事は御座いません」

「じゃあこの話はおしまいね、シュホンケーキを焼いてあるから食
べましょう」

「姉上」

「はいアンネローゼ様」

宇宙歴787年11月1日

■自由惑星同盟ハイネセン

統合作戦本部記録統計室

ヤン・ウェンリー

古い資料を読みながらのシロン産紅茶は格別だね。

この所同盟は捕虜の帰還話で持ちきりだ、数週間前まで第四次イゼ
ルローン攻略の失敗で騒がしかったのに今は帰還話だ。

100万人が帰ってくる、この時期になぜいきなり帰すのか、スパ
イでも送り込むのだろうか。

或いは不満分子にクーデターを起こさせるとか、まあ考えすぎか。
紅茶が無くなったな煎れてこよう。

第三十四話 アンネローゼ怒る（後書き）

今回はメックリンガー登場が強引すぎた。

第三十五話 サルベージ大作戦（前書き）

今回はワイン船が届くまでの時間があるので、
以前話に出た秘密工場設立物語なので、ロイとかでません。

第三十五話 サルベージ大作戦

帝国歴478年11月25日

■メンヒエングラトバツハ星系 デュイスブルク星 ハン
ス・ノイマイヤー

畜生！また転勤かよ！此で4度目だ！何で俺が此処まで田舎を転々としなきゃならんのか、全部シャフトの野郎の差し金だ！

思い起こせば9年前オーディン帝国大学機械工学科を優秀な成績卒業した俺は一兵卒として徴兵されるのが嫌で軍の技術士官に志願したのに、なぜかシャフト大将に嫌われて僅か2月でイゼルローンの修造廠へ転勤させられた。

其れから来る日も来る日も修造の繰り返し、3年経って移動の時機になったら今度はマールバツハ星系の浮きドックへ飛ばされた、いい加減頭に來たので退職願を出したが却下され、更に田舎のアルメントフーベル星系の補給廠へ飛ばされた。

10月29日の定期異動で異動先を聞いたとき何処だ其所はっておもったが、

こんな誰も来ないような海ばっかで産業が海産物養殖と加工だけの星かよ！

しかも直通定期航路がないから乗り継ぎに継ぐ乗り継ぎで3週間もかかった！

しかも辞令が、軍用缶詰工場の主任だど！！もう我慢できないと人事部に直接退職願を送ったが、そのまま送り返して来やがった。

くっそー！俺は技術屋だぞ、缶詰機械のメンテをしろって言うことかよ！！

取りあえず宇宙港からバスへ乗って工場へ、
正門には装甲擲弾兵の様な体の守衛が居る。

誰何され転任命令書と認識手帳を見せると連絡してくれた、
直ぐに連絡があり工場長室へ来る様に言われ守衛が場所を教えてくれた。

工場長室に行くと、50代後半ぐらいの疲れたような禿げたオヤジ
がよく来たと挨拶してくれた。

ああー俺もこんな感じになっちまうのかと心が沈んだもんだ。
工場長は明日から頑張ってくれと言ったが頑張る気が起きないよな。

翌日から毎日毎日缶詰機械を見るだけの仕事、
他の工場にも同じような奴らが居て食堂で会って話を聞いたら。

同じようにシャフトに飛ばされた奴や、軍内部で非主流派に属する
奴とか、

みんな端弾きな連中ばかりだった。

ああ此処は刑務所みたいなもんだ、睨まれた連中が収容される辺境
の牢獄だ！

守衛が装甲擲弾兵みたいな奴なのは俺たちの脱走防止の為かと噂し
合った。

帝国歴479年1月8日

新年に成ると数人が転勤していった。

この牢獄から出られるとはうらやましいことだ。

俺も出られる日が来るのだろうか。
相変わらず退職願は却下されている。

仕事始めの日、職員全員が講堂へ集められた。
暫く待っていると突然講堂の床が沈み始めた！
多くの職員が驚いているが、幹部連中や警備員は涼しい顔をしている。

部屋全体がエレベータのように下がっていくザワザワと皆が騒ぎ出すが、

あの貧相な工場長が眼光鋭く『静かにせよ』と一括した。
皆驚く一氣に静まる講堂内。

そうこうしている間に床が止まり、目の前に巨大な空洞が現れた。

ライトが付くとなんと中に軍艦が鎮座している。

見たことのない軍艦だ、我が軍の物と違う気がする色も緑色だ、
なぜ工場の下に軍艦が、皆も驚きの余り無口になっている。

工場長がニヤリと笑いながら話し始める。

「諸君帝国軍工部敝へようこそ」

工部敝だってそんな組織があったか？

皆顔を見合わせながら不思議がる。

「此処に居る者達は、有る者は科学技術総監にパージされた者、無
能な上司に疎まれた者など実力はあるが疎外された者達だ」
そうかだから一癖も二癖もあるよな奴らばかりなのか。

「諸君には、此処でそれぞれの得意分野の研究をして貰う、無論拒
否も可能だ」

うそこけ、秘密守る為に拒否したら行方不明とかだろう、

そうじゃなきやあんな装甲擲弾兵のような守衛がいるかよ。

勇気のある奴が質問をする。

「済みませんが、質問良いでしょうか？」

「官姓名と前所属を名乗りたまえ」

「造兵大佐グリュザンテーマ・グリュツイーニエ、ガイエスブルク要塞造修敵です」

「宜しい質問は？」

「此処の目的は何ですか？」

「目的かね、此からの帝国軍の戦略戦術戦法造兵などの新規開発研究を行うことが目的だ」

「しかしそう言うのはそれぞれ専門部署があるのでは？」

「貴官らが思う事はもっともだ、しかし現在の科学技術部や艦政本部等の研究等はまともだと言えるかね？」

「確かに恣意的な事も多いですが、それでも別組織というのが不審です」

「だろうな、この組織はさるやんごとなき御方が現状に憂いで組織したのだよ」

さるやんごとなき御方って相当偉いってことか、

これだけの秘密基地を作れるほどの組織の親玉か、

何処ぞの大貴族か皇族か？

「なるほど、では研究について自由度はあるのですかね？」

「テーマはあるがそれ以外は自由だ」

皆がざわつく。

「諸君らを観察してきて、このチャンスを断らないと断言できる。」

断るような者は既に返したからな」

そう言うことか転勤者は御眼鏡に成らなかった奴らか、面白いじゃないか！

「諸君どうだね、悔しくないのか！」

皆拳を握りしめたり頷いたりしている。
すると1人が叫んだ。

「俺はこの仕事やるぜー！」

その言葉が発端で次々に歓声上がる。

「俺もだ！」

「おー」

「私も！」

工場長がはじめに『全員が賛成のようだな君たちを歓迎する、
自分は帝国軍中將ユストウス・エーベネだ』

あの工場長が中将閣下かよおどろいた。

「貴官らは此より小官の旗下入るが所属は今まで通り缶詰工場だ。

家族を呼びたい者は呼んでも良いが、秘密は絶対だその点だけは肝
に銘じるように、

今日のご苦勞だった解散」

こうして俺の秘密基地での仕事が始まったのである。

けど普段鯖缶作る作業してたら、鯖が嫌いになっちまったんだよな。

第三十五話 サルベージ大作戦（後書き）

人材のサルベージ。

ワイン作戦はおそらくは三十六話から書けるはずです。ワイン、捕虜、ロイ、エル・ファシルって順番ですかね、けどテレーゼが何かやらかすと変わるんですよ。

第三十六話 領地を貰おう(前書き)

職場で休み時間にUP

第三十六話 領地を貰おう

帝国歴478年 11月20日

■オーデイン ノイエ・サンスーシ 小部屋
ゼ・フォン・ゴールデンバウム テレー

本日も密談中。

父様相変わらずのしたり顔、爺様にやにや、ケスラー苦笑い。
ケスラーの髪が白くなるのはこの老人2人のせいだったのか！
いや今回は私のせいで禿げたりして。

「輸送隊は無事イゼルローンへ向かっているそうです」

「それは重畳じゃな」

「全くじゃの」

まあメックリングーが実質仕切ってるわけだから大丈夫でしょう。
そう言えばそろそろミュッケンベルガーとロイエンタール達の帰還
の時期だけど、
ロイエンタール帰って来たくないって言ってるんだよね。

「テレーゼやどうした」

「お父様、新規士官で目を付けた者がそろそろ研修期間が終わるの
ですが、

オーデインへは帰りたくない、イゼルローンに居たいそうなん
です」

「ロイエンタール少尉ですな」

「ふむマールバッハの甥じゃな」

さすが父様よく知ってる。

「相当イゼルローンが住みやすいようです」

こらケスラーこっち見て苦笑いしながら言うんじゃない！
まあ今ロイエンタール弄り他のことが忙しくて出来ないし、
しばらく羽を伸ばさせようかな。

それで来年にミッターマイヤーをロイエンタールの下に付けて双壁
を作るか。

「お父様思うのですが、どうせ人事異動で動くのですから、
今回新規研修でイゼルローンにいる士官達にアンケートを取り、
イゼルローンへ残るか、オーデインへ帰るかを聞いて残りたい面々
をイゼルローン配置したらどうでしょうか」

「ふむ良い手かもしれんな」

「面白いてすな」

「ごく一部の士官は確実に残ります」

だからケスラーいっそ言ってよ、ロイエンタールだって。
みんな吹き出しそうにしてるじゃない。

「うむそれではその旨を軍務尚書に伝えよう」

「お父様お願いします」

あとは帰還兵だよね、このまま帰ってきて恩赦をしたとしても、
今はラングじゃ無いけど社会秩序維持局がしゃしゃり出てきて、
100万人を検挙しかねないんだよね。

あーラング達死んでくれればいいのに。

ああゆうゲシュタポみたいな連中を纏めて同盟に進呈したいね。
向こうも迷惑だろうけど。

トリューニヒト辺りなら使いこなしそうだけどね。

んー皇帝直轄領の惑星に家族ごと移住させて其所で守るかな。社会秩序維持局が狙ってる可能性があると教えれば、移住もスムーズに進むし、

皇帝陛下の慈悲で自分たちは助かるとわかり益々尊敬度が上がるだろう。

悪いのはすべて社会秩序維持局というシナリオでいける。

門閥貴族にはまた父様の気まぐれに映るから問題なしですね。

帰還兵達はエコニアとかで民主共和制を知った連中も居るから、ある程度知識もあるだろうから、ブラツケヤリヒターとかの手本に成るかもしれない。

皇帝直轄領は基本全部皇帝陛下の財物だから、何処の組織も手を出せない。

守るのは帰還兵と爺様の組織だから出来るね。

「テレーゼ様眠くなりましたかの」

「いいえ考え事をしていました」

「どのような事じゃな」

「お父様、帰還兵のことです」

「ふむふむ」

「思うのですが、帰還兵は民主共和制に毒されている可能性があります。まず。」

「そう言う風に考える組織がありますよね」

「社会秩序維持局ですな」

「そうです、彼らはお父様が恩赦をしたからと言って、放置するでしょうか？」

「確かに何か理由を付けて連れ去るじゃろうな」

「そうなのです、帰ってきて恩赦を受けても結局は家族諸共辺境の流刑星送り、

これでは帰還兵が安心して帰れません、

それにお父様のお慈悲が上辺だけの物と平民達に思われてしまします」

皆かんがえてるです、社会秩序維持局の連中は屑ですから、やりかねないと。

「テレーゼどうすると言うのじゃ」

「お父様、此所は組織の力で帰還兵や家族に社会秩序維持局が勝手に動く可能性がある、

皇帝陛下は憂慮している、もし良ければ皇帝陛下直轄領へ移住を勧める、

そうなれば、悪いのはすべて社会秩序維持局で皇帝陛下は、

なんてお優しいお方なのだと平民は思うでしょうね。

そうゆうシナリオはどうでしょうか」

皆絶句ですね。

「テレーゼ様非常に素晴らしい御慧眼でございます」

「ケスラーの言う通りじゃ素晴らしい」

「さすがテレーゼ様ですの」

皆明るくなりました。

「そうなるとどの星が良かろう」

「ある程度の生産力のある星でないといけませぬな」

「テレーゼはどこか候補はあるのか」

よっしゃ来ました、此所は後々のフラグへし折りの為にね。

「ローエングラム星系は如何でしょうか、

あそこなら家が絶えて久しいですし、

いい距離に有りますから管理もしやすいかと」

さあどうだ。

「うむ確かにそうじゃな」

「管理し易いと後々よいですから」

「ローエングラム星系で決まりじゃ」

よっしゃこれで決まりだ。

「お父様直轄領の管理運営に新進気鋭の若手官僚や、

ケスラーに調べさせている有能な者に運営を学ばせたいのですが、

如何でしょうか？」

「テレーゼの好き気にするがよいぞ」

「お父様ありがとうございます」

「そうじゃ、テレーゼよ」

「はいお父様」

「ローエングラム星系を皇帝直轄領兼テレーゼの化粧領にいたす」

えええええ、領地ですか、いきなり星持ちですか！あわわわ。

皆を見るとにやにやしてる、虐めですか。

「お父様いいのですか？」

「良いのじゃこの方が動き易からう」

「判りました謹んでお受けします」

「誕生日プレゼントと言うことで2月に発表いたす、皆もそのつもりでな」

「ほほ陛下わかりましたわい」

「御意」

■オーディン ノイエ・サンスーシ 小部屋 フリー
ドリヒ4世

テレーゼが日増しに逞しくなっていき父親として非常に嬉し物じや。

最初はあるの者を使い儂の夢を果たそうとしたが、娘の素晴らしさ、儂をしのぐ韜晦さ。

そして、グリーンメルスやケスラーをも唸らせる謀略の冴え、何処をとつてもルドルフ大帝に対抗できる娘じゃ。

今回の事も幾つもの策を纏めて仕掛けるとは、此があの者であつたら儂の命も無いであろう。

ほんによう出来た娘じゃ、ただローエングラム領を遣わすと言ったときの顔は子供らしく非常に可愛かったわ。

願わくば無事に育って欲しいものじゃ、グリーンメルスよケスラーよ娘を頼むぞ。

■オーデイン ノイエ・サンスーシ 小部屋 リヒャルト・
フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ様は会うたびに成長為されておる、
今回も俘虜を使うやり方といい、儂にも真似できない事ばかりじゃ、
まさに謀略の天才じゃ。

儂に持つ全てをテレーゼ様へお教えし継いでいただきたいものじゃ。
余生が益々楽しくなったわ。

■オーデイン ノイエ・サンスーシ 小部屋 ウルリツヒ・
ケスラー

先ほどのテレーゼ様のご意見は驚きに値する物であった。

俘虜への救恤品を使う、帰還兵平民へのプロパガンダ。

其れだけではなく、其れを利用した同盟への不信任を増やすやり方。

帰還兵と家族に対しての社会秩序維持局の暗躍を利用し返って陛下
に対する忠誠度を上げる方法、

そして其れを運営する為、若手や新進気鋭官僚の発掘など、我々で
は思いつかないような発想をして下さる、天賦の才 としか言いよ
うがない。

このようなお方にお仕えでき、これからも益々努力したいものだ。

帝国歴478年11月21日

■ オーディン

軍務省

軍務尚書室

ハー

ロルト・フォン・エーレンベルク

本日陛下からご連絡があった。

内容は、今イゼルローンに研修に行っている新規士官にオーディンへ戻るかイゼルローンへそのまま残るかを調査して残りたい者はそのまま配置せよと事であった。

確かに一度戻りまた行くのも面倒であろうし、

残りたい者が居るならその意志を汲んでやらねばならんだろう。

早速部下に命じてその旨を書類にしてイゼルローンへ連絡させた。

陛下も細かきことに気をお遣いに成られるようになり些が大変じゃが、

それはそれで働きがいはあるの。

第三十六話 領地を貰おう（後書き）

増補しました

第三十七話 盗賊と義侠の差 (前書き)

第三十六話に増補しました。

帝国マルクと同盟のディナールのルートが判らないので、値段についてはあやふやになります。一応1マルク＝100円 1ディナール＝100円で考えていますが間違っていたら済みません。

第三十七話 盗賊と義侠の差

帝国歴478年12月1日

■イゼルローン要塞

オスカー・フォン・ロイエンタール

そろそろ半年イゼルローンでの研修も終わってしまう。

オーデインへは帰りたくない、いや帰らない！

とは言えイゼルローンの繁華街に隠れるわけにもいかずに、悶々とする今日この頃だ。

レテーナが優しくしてくれるのも帰りたくない理由の一つだが、最大の原因は帰ればまた鬱陶しい噂が有るのではとの心配だ。

あの伯父がまたぞろ何か企まないか不安で成らん。

あの一族は俺を生んだあの女と同じで俺に災いだけを運んでくるのだから。

縁を切りたいが血のつながりはどうしようもないわけだ。

ああまた敵が来れば帰還が有耶無耶になるのに残念だ。

12月3日

嬉しい知らせがあった。

人事異動の一環として我々新任士官の内で希望する者をイゼルローン配置にするとのことだ、

俺は一二もなく希望届けを出した、同じように出したのはビットエンフェルト鶏冠頭と数人だけで、

後はオーディンへ帰還するらしいワーレンは新妻との生活のために帰るそうだ、

しかし普段勇ましいことを言い、家柄自慢をしている貴族のボンボン達は全員帰還だ、

やはり門閥貴族の連中は根性なしばかりだ。

ミュッケンベンガー司令官も皆と帰還の途に就くそうで、

同時に新任士官も帰還の途に就くそうだ、

帰還予定日は12月12日と発表された。

12月10日

皇帝が叛徒の俘虜になっている連中の為の救恤品輸送艦隊が入港してきている、

1000隻の艦隊とは些か大げさだが、其れだけ大事な品なのであろう。

指揮官が皇帝の筆頭侍従武官と言うだけで重要度が判るというものだ。

帝国歴478年12月10日

■イゼルローン要塞 駐留艦隊軍港

レオポルド・

フォン・ケツセリング

無事イゼルローンへと到着した、実に15年ぶりだあの頃と全く変わっていない、

航海中はメックリンガー大尉に大変世話になった、

冷静沈着で安心して航海を任せられた、

しかしここからが本番だ叛徒の領域へ進入するのだから。

今日明日はイゼルローンで英気を養わせ12日に出港する予定だ、
今晚はミュッケンベルガー大將がオーデインへ帰る前に皆で飲もう
と誘って下さったので飲みまくるつもりだ。

12月12日

いよいよ未知の領域へ進行だ、イゼルローンでこの方面に何度も進
入している、

駐留艦隊の航海参謀のビュルクナー大尉が水先案内に乗艦し午前9
時、

オーデインに帰還するミュッケンベルガー艦隊の見送りを受け未知
の宙へと進発した。

アルレスハイム、パランティアと危なげなく進む。

12月15日アスターテ星系に於いて叛徒側の水先案内の為の10
00隻ほどの艦隊と合流した、

妙な気分だ普段ならそのまま戦闘に入る艦隊同士が同行しているの
だから。

向こうの艦隊司令官はロックウェル少将と言うらしいが、

何か落ち着かない様子で此方を値踏みするようだ、

まあ向こうも妙な気分なのだろう。

12月16日

何事もなくエル・ファシルに到着した。

同行した艦隊と駐留艦隊の合計2000隻に並ばれると余りいい気
がしないが、

これも皇帝陛下の御為であるから苦には成らない。

旗艦ミュルハイムから輸送艦エアトバーレへ移動する、

10時に大気圏に突入しエル・ファシル宇宙港へ入船した。

向こうの代表者は国防委員会副委員長カンナバッチュオロと名乗った。

簡単な式典中にも輸送艦からコンテナを搬出し14時には全てのコンテナを渡し終えた。

目録を渡し160万セットの救恤品の受け渡しは無事終了した、早く同胞に届く事を願う物だ。

15時挨拶の後宇宙港を出発し上空待機中のミルハイムに乗り換え、向こうの艦隊にエスコートされ帰路に就いた。

皆緊張している、其れはそうだつい数ヶ月前に戦っていた相手であるからだ。

アスターテでそれぞれの艦隊が発光信号で航海の安全を答礼し二たてに別れ我々はイゼルローンへ向かう進路に就いた。

そのまま何もない状態で12月21日午後7時にイゼルローンへ到着し緊張の旅は終わりを告げた。

後は整備と休養を行い3日後にオーディーンへ帰投する。

宇宙歴787年12月

■エル・ファシル星系
ウエル

ジェームズ・ロック

捕虜交換に関する救恤品の受け渡しのエスコートを命令されたのは、

俺が国防委員長に近いからだ箔を付けてくれると言う事らしい、主役は副委員長のカンナバッチュオロ氏で選挙の為に志願したよう

だ。

アスターテで帝国軍に遭遇したときは生きた心地がなかった、一発間違えれば戦闘だからだ、杞憂だったがね。

エル・ファシルへ到着しホッとしたものだ。

荷物の受け渡し後アスターテまで送りそこで分かれてエル・ファシルへと帰投した。

12月17日

■エル・ファシル本星 宇宙港倉庫ブロック

160万セットに及ぶコンテナの群れをみてエル・ファシル駐留軍の兵達は早速作業に入った。

何しろ帝国からの荷物である、万が一危険物が混じっているは大問題になる、

その為陸戦部隊5千人がコンテナの中身を確認する作業に入った。

彼方此方から歓声が上がる。

「おっ此はワインだぜ」

「よせよ確認しろよ」

「良いって事よ、1本ぐらい無かったって判りゃしないさ」

「つまみも有るし後で飲もうぜ」

「帝国は贅沢してやがるな」

「噂じゃ仲間は矯正区とか言う地獄の様なところへ送られてるって言うのに」

「自分らの仲間には贅沢な品物を送りやがって」

「貴様ら！何をしておる、仕事をせんか！」

「軍曹殿」

「なんだ」

「敵はこのように贅沢な物を食っているのに、我々の仲間は塗炭の苦しみです」

「でなんだ？」

「敵の物資です、少しぐらい損耗しても仕方がない事です」

「なるほど確かにそうだな輸送における損耗は多々有る物だ、どれだけ損耗していたのだ？」

「5千ほどです」

「いやコンテナを開けるとき壊れたからな1万個ほど損耗だな」

「いいか、お前等損耗は1万だ判ったな」

「イエッサー」

12月20日

コンテナはエル・ファシル星系より後方のジャムシード物資集積所へと送付された。

輸送艦バロット？の艦内では、船員達がコンテナの1個を開け中身の物色を行っていた。

「おーワインだぜ、こりゃあ上物だぜ」

「箱ごと無くなるとやばいからな、少しずつ抜いておこうぜ」

「役得役得」

「正規艦隊は贅沢してるんだ、彼奴等フルコース喰ってるんだぜ」

「俺たちやフィッシュ&チップスだぜ」

「そうだそうだ」

「着いたら飲もうぜ」

「おー!!」

宇宙歴788年1月3日

■自由惑星同盟 ジャムシード星系 同盟軍補給敵 パーヴェル・コヴァリスキー

帝国軍捕虜への救恤品が届き倉庫へと保管が終わった。此から各収容所へ分割する訳だが155万1143名に分ける訳だ。新年明けから数日は徹夜だな。

1月6日いよいよ開始だ、余り気が乗らんがね敵に対しての補給というのが気に入らんが仕事だから仕方がない。

1月7日国防委員会の委員達数名がお忍びで訪問してきた、何でも今回送られて来たワインは463年物で帝国でも相当なビンテージワインらしい、

同盟では2000ディナールの値段らしい、つまりは捕虜に飲ませるのは勿体ない少し回せという事らしい。

しかし数が足りなくなれば配れなくなるのではと言うが、委員達は上の者達も黙認しているし足りないのならば、安いワインで代用すれば良いと囁く、上の者達、評議会も一枚噛んでいるのか。

売れば2000ディナール俺の給料の二分の一にもなる、委員共も悪いようにはしないと囁いてくる、息子や娘の学費や老後の蓄え……悪魔が囁く……

俺は俺は・・・・・・・・・・

負けた・・・・・・・・

密かに20万個を腹心の部下100人と共に軍用ワインと交換した。

委員共は大喜びだ、10万個を送るようと言い帰って行った。

俺たちも密かに裏マーケットの者に連絡し売り渡した。

金額は2分の1に成ったが彼奴等は口が堅いから大丈夫だ。

我々の儲けは1億ディナールになった。

1人頭100万ディナールだ、大佐の退職金が30万ディナール、誰がこの機会を逃すだろうか、俺は悪くない所詮飲むのは敵じゃないか！

1月12日から順次救恤品が送り出され始めた、

ばれるのではないかとビクビクしたが2カ所に纏まるように送った為、

ばれる事はないだろう、いざとなれば国防委員会が守ってくれるはずだ。

ネプテス12万3545個、カッファ17万8200個で20万1745個入れ替えた

エコニア5万5400個、ケリム52万8700個、マールヴィア60万3800個、

ハダト16万1500個

に分けたのだ、あとはなんとかなるだろう。

1月20日ネプテイス捕虜収容所

「おいお前等皇帝からのプレゼントだよ」

「陛下からだってまさか」

「そんなはず無いじゃないか、俺たちや帰れば反逆罪だぜ」

「そう言わず見てみようぜ」

「ああそうだな」

ザワザワ集まる捕虜。

「順番に並べ」

「並ばんと渡さんぞ」

「救恤品で何だ？」

「さあな」

「いいから明けてみようぜ」

「おーワインだぜ」

「缶詰も有るぞ、しかもソーセージだ！」

「こっちはプラムだぜ」

「雑誌もあるぞ」

「タオルに下着もだ」

「ザワークラウトがあつたぜ」

「おー」

「皇帝陛下は俺たちをお怒りじゃないのか？」

「毒でも入ってるんじゃないか！」

「えっ」

「もう喰っちゃったぜ」

「何ともないのか」

「ああスゲー旨い、ふるさとの味だ」

「俺も俺も」

「ワインは酸っぱいだけな、馬のしょん便みたいだ此は不味いな」

「まあ良いじゃないか、皇帝陛下万歳」

「皇帝陛下万歳」

1月28日

■マールロヴィア星系 駐留艦隊本部
ビュコック

アレクサンドル・

昨日捕虜に対する救恤品が運ばれてきた、

調べると463年物のワインが入っているという、

同盟内では2000ディナールするらしく、

馬鹿共が捕虜に飲ませるのはもったいと話してきたが、

儂は一喝してやった。

仮にも自由惑星同盟軍に所属する将兵ならば誇りを持って、

捕虜に送られて来た救恤品を掠め取る盗賊まがいの行為をするなら、

儂が1人残らずマールロヴィアの太陽に投げ込んでやる、

と怒鳴ってやったわ。

流星に恒星に焼かれるのは嫌らしく確り捕虜に配りおった。

全く近頃の若い者は我欲が多くていかん。

1月30日

■タナトス星系惑星エコニア捕虜収容所 バーナビー・コス
テア

昨日捕虜にと港に届いた救恤品だが、調べると中に463年物の
ビンテージワインが入っていた、
調べると1本2000ディナールだ。

此はチャンスだ今まで散々公金をチョロまかして貯めた金が360
万だ、

しかしこのワインは裏取引でも5540万ディナールになる、
俺の貯めた10倍以上だ、こんなチャンスはない旨く出来ないか。

そうだ未だジェニングス達は知らん、知っているのは横流しの仲間
だけだ半分を抜いて2人で1本にすれば2290万ディナールだ、
行けるいけるぞ。

こんなチンケな収容所からおさらばできる、さっさと退職してフ
エザーンにでも逃げればいい。
よしやるぞ。

2月4日

■タナトス星系惑星エコニア捕虜収容所 クリストフ・フォ
ン・ケーフェンヒラー

なにやら、皇帝陛下から儂等に救恤品が送られて来た。

懐かしい物ばかりだが、良い思い出もない物も多い、

ワインは463年物かこの年はティアマト会戦から27年の物か、

皇帝陛下は何をしたいのやら、いきなりの事だがプレスブルグは感
動して居るがな。

『皇帝陛下は我々をお見捨てにならない』と言っておったわ。

なにかするつもりか。面白い事がおきそうだ。

第三十七話 盗賊と義侠の差 (後書き)

やっぱりやった同盟、ご都合主義じゃなく原作でもやりそうですかね。

ワインの値段はフランスワインの15年物値段が二万円ぐらいでしたので、流通のない同盟では10倍ぐらいに跳ね上がるのではと、値段きめました。

よくでる秘蔵の410年物だいたい80年前物だけど
フランスワインだと1本70万以上するみたいです。

第三十八話 エヴァンゼリンの危機（前書き）

今回はミッターマイヤー家の話です。

第三十八話 エヴァンゼリンの危機

帝国歴479年1月3日

■オーデイン ライニツケンドルフ地区
ミッターマイヤー

ウォルフガング・

新年を迎えいよいよあと半年で任官だ、

正月ぐらい家で過ごせとの士官学校の計らいで家に帰ってきたのが
12月29日

クリスマスも終わっていたが、市内の店で親父とお袋、
そしてもっとも大事なエヴァにプレゼントを買って帰った。

まあ士官候補生だから親父とお袋へのプレゼントはたいした金額じ
やなかったが、

エヴァへのは何を買おうか迷ったあげく、
可愛い人形を買っていった。

エヴァは非常に喜んでくれたが、
俺はもう一步踏み出せず、

卒業したら結婚してくれと言えなかった。
俺の意気地なし。

翌日は遅めのクリスマスパーティーだった、

お袋とエヴァが腕によりを掛けて作ってくれた料理は絶品で、
コッソリ持ち出した親父秘蔵のワインを開けて飲んだら親父が泣き
そうになったが、

お袋が『貯めておいてもキャビネットの肥やしよ』と笑いながら飲

んでいた。

親父もグラスをひったくって飲み始めていた。
エヴァはにこやかにその姿を眺めていた、

良い雰囲気だ、此こそ家族というものだよ、
俺とエヴァと両親が4人仲良く暮らす。
この時間がずっと続けばいいと思った。

新年が明けて親父と話したりエヴァとお袋と一緒に買い物に行った
りしながら、
休暇を過ごし幸せな日々を送っていたのだが、
思いがけない事が起こってしまった。

1月3日朝食を取りながら親父と話していると、
家の前に黒塗りの超高級だと判る重厚な地上車が止まり、
中から立派な身なりをした男が降りてきた。

俺は嫌な事を考え始めていた、
親父も同じ考えのようだ顔色が悪い。
ほんの数年前同じような事が下町で有った事、

皇帝陛下の寵姫を探す為に宮内省の役人が年若く可憐な少女を求め
ていった事、
そしてその少女が現在は皇帝陛下の寵姫としてグリューネワルト伯
爵夫人と呼ばれている事。
そして献上した役人は大変な褒美を貰い伯爵夫人の執事に成って出
世した事を俺も知っている。

今年度幼年学校から士官学校生徒になった者達から聞いた話を思い
出した。

噂によると伯爵夫人の弟は大変な乱暴者で何度も問題を引き起こし放校寸前に何度も成りながら、その度に伯爵夫人の懇願で許されているらしい。

極点的な成り上がり者のパターンだと、

貴族の生態に詳しい、

親父に話したらそう解説してくれた。

自慢ではないがエヴァは町でも噂の美少女だ、

しかも今年15歳、グリューネワルト伯爵夫人が寵姫になった年齢と同じだ。

宮内省の役人がエヴァの噂を聞きつけて奪いに来たのか！

台所にいたエヴァもお袋も俺と親父の異様な雰囲気判ったのか心配そうに覗いてくる、

馬鹿エヴァ顔を出すな！隠れていてくれ！

俺は叫びたくなった、エヴァが奪われる俺が誰より愛しているエヴァが遠くへ行ってしまう！

お袋は俺と親父の顔を見てそして外を見て驚愕の表情をしている、エヴァはいきなりの事で未だよく判らないようだ、

あの事件の時エヴァは未だ子供だった詳しくは知らないのだろう、

頼むエヴァ直ぐに部屋に逃げ込んでクローゼットに隠れてくれ！

俺はそう叫びたかった。

親父も同じような顔をしてエヴァを見ている。

お袋はエヴァの腕を握りしめ真っ青な顔を始めている。

この異様な雰囲気にと解り始めたのか、

エヴァの顔から笑顔が消え、俺に縋るように泣き顔になっていった。

エヴァが連れ去れるなら、
何もかも捨てて叛徒の元へ亡命してでもエヴァを守る！
俺は最早そう考えるようになっていた。

4人での逃避行だ無事たどり着けるか判らない、
親父が悟ったように『ウォルフ2人で行くんだ』と俺に言ってきた、
お袋も同じように頷いている、

親父とお袋を捨てて俺たちだけで逃げる訳には行かない、
きっと2人とも不敬罪で処刑されるだろう、
そんな薄情な真似は出来ない、逃げるなら4人一緒だ！

そうしているうちに、玄関のベルが鳴り響いた。

■オーディン ライニッケンドルフ地区 エヴァンゼリ
ン・ミッターマイヤー

母が亡くなったあとたった1人で育ててくれた父が戦死し一人ぼ
っちになった私を親戚のお家で引き取ってもらえるなんて嬉しかっ
た。

新しいお父様もお母様も凄く優しくて、本当の両親のように慈しん
で頂いた。

ウォルフ様にお会いしたのが12歳の時ウォルフ様が士官学校のお
休みでお家へ帰ってきていらっしゃった時でした。
あの日以来私はウォルフ様に恋していたのです。
ウォルフ様とお会いするのが何時も楽しみでした。

けどこんな日が来るなんて・・・

ウォルフ様が新年休みでご帰宅なさると聞いてお母様と腕によりを掛けて料理を作りました。

ウォルフ様もお父様も喜んでくれて凄く嬉しかったです。

新年をウォルフ様みんなと楽しく過ごしていた、

1月3日朝台所で朝食の準備をしていたとき、

家の前に止まる地上車の音を聞いたのです。

何かと思ってお母様と覗くと、

ウォルフ様とお父様が真っ青な顔をして此方を見ているのです、
私はいったい何が起こったのかさっぱり判りませんでした。

ウォルフ様もお父様も私に何か言いそうな雰囲気で、

お母様は私に腕をギュッと握ってその手が震えています。

私もその異様な雰囲気になんだん不安になり泣きそうな顔でウォルフ様のお顔を見続けていました。

お父様がウォルフ様に真剣な表情で何か仰っています、
お母様が頷いて、其れを見たウォルフ様はとて悲しそうな顔なさいました。

そうしているうちに、玄関のベルが鳴り響いたのです。

■オーデイン ライニッケンドルフ地区 ロベルト・ミッター
マイヤー

私は造園技師。自慢じゃないが、腕は一流だ、
この階級社会腕に職を付けて働いた方が遙かに良いと、

この世界に飛び込み早20年今じゃ町の金持ちや貴族からも仕事が無い込む様になった。

私には息子がいて今年20歳だが私と同じように職人になってもらいたかったのに、

よりによって職人は職人でも職業軍人になっちまった、軍人になると聞いたときはガッカリしたね、期待していたんだよ親子で庭を造ることを。

そうこうしているうちに、新しい家族が増えたんだ。

別に子供が生まれた訳じゃない親戚の子供が1人になったから引き取ったんだ、

エヴァンゼリンと言って可愛い12歳の少女だった、

私も妻も娘が欲しかったから、愛情を込めて接したんだ、エヴァンゼリンも私たち夫婦に大変なれてくれて、実娘と思えるんだよ。

息子のウォルフが初めてエヴァンゼリンと会ったとき絶句していたが、

私から見ればあれは恋したなとおもったものだ。

少しずつ近づいていく2人を見てほほえましくも焦れったく思えたものだ。

妻もウォルフと娘は結婚すると言っていた。

その平穏な日がいきなりの地上車の音でかき消されつつあるとは、私もグリューネワルト伯爵夫人の話は知っている、貴族や上流市民の間では有名な話だから。

何たって夫人の弟が乱暴者で何人ものけが人を出して時には石で殴

るって可笑しいだろう！

その度に伯爵夫人の懇願で皇帝陛下が不問にしてるって言うんだからどうしようもない。

息子も同じ話を後輩から聞いたらしい。

俺もお得意さんから茶飲み話で聞いていたんだが

余りに目に負えない状態で心配した連中が、

新たな寵姫を見つけようとしていると聞いていたが、

まさか家の娘がそのターゲットになるとは夢にも思わなかった。

青い顔をする妻と娘と息子そして俺もきつと顔は青いだろう、

何とか出来ないのか、息子が思い詰めた表情をする

亡命か、しかし寵姫を断り亡命など中々出来るはずがない。

皇帝陛下の横っ面を張り倒して逃げるようなものだ、

草の根分けても探されて不敬罪と反逆罪で処刑だろう。

恐らく息子は4人で逃げる事を考えているんだろう、

しかし無理だ俺は息子に『ウォルフ2人で行くんだ』と言い、

妻を見ると妻も頷いていた、済まんなお前と共に死ぬる事だけが最後の幸せだ。

息子よ娘よ新天地で幸せになってくれ。

そうしているうちに、玄関のベルが鳴り響いた。

■オーディン ライニツケンドルフ地区 アデーレ・ミッター
マイヤー

家には2人子供がいる、長男のウォルフガング、長女のエヴァンゼリン。

エヴァンゼリンは養女だけど実の娘と変わらないぐらい私も夫も可愛くて仕方がない。

ウォルフは士官学校生徒で勉学に励んでいる。

息子と娘はお互いに惹かれ逢ってるんですが、あの子達不器用だからちっとも進展しないと夫が覗き見しながらぼやいてました。

この日も新年休みで帰省した息子だらしなさを、

呆れながら娘と朝食の準備をしていると、

自宅前で何かが起こりつつある様な気配で、

娘と共にリビングへ向かうと其処には真っ青な顔をした、

夫と息子が居たのです、二人の視線の先には、

高級な地上車があり其処から立派な身なりの男性が降りてくるところでした。

私は此と同じ話を以前聞いた事を思い出しました。

皇帝陛下の寵姫グリーネワルト伯爵夫人が見初められたときもこのような状態だったと、

まさか娘がそんな目に遭うなんて、

私は目の前真っ暗になり娘の腕をきつく握りしめました。

娘も事態を察したのか段々と泣き顔になっていき、私の手をぐっと握りしめて来ました。

息子を見ると真剣な表情をして私たちを見てきます、

夫が私を見ながら息子に『ウォルフ2人で行くんだ』と言い

私に済まなそうな目をして来ました。
何年一緒にいると思ってるんですか、

貴方の考えている事なんかお見通しですよ、

2人が逃げられるなら喜んで死の花道をくぐりましょう貴方。

そうしているうちに、玄関のベルが鳴り響いのです。

第三十八話 エヴァンゼリンの危機（後書き）

グリーンメルスハウゼン爺様の間者が彼方此方に噂を流しています。

第三十九話 エヴァちゃんは無事（前書き）

前回はしつこくしかも酷い文章で済みません、ご免なさい。

第三十九話 エヴァちゃんは無事

帝国歴479年1月3日

■オーデイン ノイエ・サンスーシ 小部屋 テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

朝餉をお母様と楽しんだ後、お父様に新しく作ろうと思う庭園の設計図を見せる為、

宮殿の何時もの部屋へ行ったところ、お父様と爺様だけでケスラーが居なかった。

2人とも何時もと違って真剣な表情で話し合っていた。

「お父様ご機嫌麗しく」

「テレーゼ大変な事が起こった」

「テレーゼ様がスカウトする予定の、

ミッターマイヤーの家族に危害が加えられる恐れが出てきました」

は？ ミッターマイヤーが危機になるのクロプシュトック侯爵討伐の時だよね、

未だ士官候補生で早すぎない？

そんだけ敵を作る生真面目なのか？

「誰かに情報が漏れたのですか」

「いいえ伯爵夫人の悪評のせいで新たな寵姫を見つけようとする勢力が現れ、

ミッターマイヤーの妹に目を付けたのでございます」

「そうじゃ予は新たな寵姫などいらんのに勝手に勧めようとする輩がおるのじゃ」

ぐわ、ラインハルト対策が裏目に出てエヴァちゃんに迷惑が掛かってしまう、

このままだとエヴァちゃん嫌々寵姫にされて、ミッターマイヤーが間違えなく復讐の鬼になってラインハルトと組んじゃうよ！

そう言えばケスラーが居ない。

「それでケスラーは？」

「ケスラーは大至急ミッターマイヤー家に向かっております」

3人とも真剣な表情でお父様も爺様も苦虫を噛み潰したような状態です、

私も眉間にしわ寄せてますよ、くそっ何処の馬鹿役人だ死ぬ！！！！

「どんな状況のですか？」

「テレーゼ様が指摘された人材及び家族には我らの部下が張り付いております。

その者がミッターマイヤー家に宮内省の下級官吏が家に訪問するのを発見し緊急連絡してきたのです」

十中八九アンネローゼの時と同じだ。

「でケスラーが向かったと言うわけですね」

「そうじゃ向かわせた、あのような無体はアンネローゼで終わりにしたいのじゃ」

けどお父様の少女趣味ロリコンが元々の原因ですよ！

無理矢理連れてくるようならミッターマイヤーが何をするかわからない。

「ケスラー早く着いてお願い！」

■ オーディン ライニッケンドルフ地区

ウォルフガング・

ミッターマイヤー

玄関のベルが鳴り響き、姿を既に見られている為出ないわけにも行かず親父が青い顔をしてドアを開けに行った。

玄関を開けると、40代の頭の禿げた脂ぎった不快な男がこれまた不快な笑みを浮かべて立っていた。

親父が根性を見せて、どなた様ですかと多少苛つきを隠さぬ誰何を行うと、

その男が『喜びなさい貴方のお嬢様は、幸運にも、

比類なく高貴なおかのご寵愛を受ける事になったのだ、

家族の者もそのおこぼれに預かることができるだろう』と言い、迎えに来るのは一週間後だと言って帰って行った。

みんなの顔は真っ青だ、エヴァは泣き出してしまった、

親父は壁を殴って叫んでいる、

お袋は泣いているエヴァを抱きしめながら自ら涙を堪えている、俺は行き場のない怒りに震えていた！

エヴァエヴァエヴァどうしてこんな事になるんだ！

皇帝だってチクショー馬鹿にしゃがって、

なんでも自由に出来るのかよ！

親父が俺の怒気を感じたのかそっと肩に手を伸ばしてきた。

親父は俺の顔を見ながら、準備をしようと言ってくる。

長いものには巻かれろって言うのかと親父の手を振り払ったが、

親父は首を振って、フェザーンへ逃げるんだと言ってきた。
俺は先ほどの『ウォルフ2人で行くんだ』を思い出し、
4人で一緒だと強調した。

その直後、また自宅の前に地上車が止まった、

俺は身構えたが車を見ると宅配の車だ、

中から宅配の制服を着た若い男性と女性が出てきた、

車から大きな荷物を2人で持って玄関へやってくる、

玄関のベルが鳴る、こんな時に宅配かと思うが出ないわけには行かない、

親父が玄関を開けると、宅配員が大きな品物を持ち立っていた。

『クリムバツハ様よりミッターマイヤー様にお荷物なんですが』

この悲壮な空気を気にしないような明るい声で女性が話す。

親父の仕事仲間の名前らしい、仕方なしに親父は家に荷物を入れるように話す。

宅配員が親父の耳元で話す、すると親父の表情が明るくなっていくのが判る、

いったい何なのだ？

親父がいきなり『新年早々お疲れ様です、寒いでしょう御茶でも飲んで行きなさい』と言い始めた。

親父気でも狂ったかと俺は思い、お袋やエヴァは驚いた表情をしている。

俺は親父に意見しようとしたが宅配員が『お言葉に甘えてご馳走になります』とにこやかに話した。

親父はお袋に御茶を持ってきなさいと言う、

お袋は何か感じたらしくエヴァと共に台所へ行く、
親父が宅配員を部屋中央へと招く、そして俺も手招きする。
俺は何かと行くと少壮の弁護士風の男が俺の耳元で驚くべき話をし始めた。

『ミッターマイヤー候補生、
小官はさるやんごとなきお方にお仕えする者です、
今回の事は陛下はあずかり知らぬ事、
あの者が勝手に行いし行為で其れを知った、
そのお方が阻止する為に私を使わしたのです』

驚いた恐らく親父のように俺も驚いた顔をしているのだろう、
俺は縋るような目でその男を見る、
真剣な表情と真剣な目、
嘘を言っているようには見えない、

俺は闇夜の中に一条の光を見た気がする。
お袋とエヴァが御茶を持ってきたが相変わらず顔色が悪い、
お袋とエヴァが俺と親父の顔を見ると不思議そうな顔を始めた、

親父も俺も少しずつにこやかな顔になっていたらしい、
親父がお袋とエヴァと俺を呼んでその男性が小声でさっきと同じ話を
をする、

お袋もエヴァも驚きの後、安堵し始めた様に感じた。

ゴトゴトと持ち込んだ箱が動く、驚いてみると中から人が出てきた、

話していた男とよく似た男である、
2、3言葉をその男は少壮の弁護士風の男と話した後、
女と共に『ご馳走様でした、またよろしく』と玄関から出て帰って

行った。

家に残ったのは少壮の弁護士風の男で、みんな話を聞きたがっている、男は集まるようにと話してきた。俺たちは早速男の前に集まった。

男はまず深々とお辞儀し

『この度は宮内省の一部役人が勝手な行為を行いあなた方に迷惑を掛け申し訳ない、これ以降は我々があなた方の安全を守ります』と話してくれた。

俺たちは半信半疑だったが男が胸元から出した書類を見て、親父が驚いた、俺たちには何か判らないかったが、その書類を親父は押し頂いて大事そうにしている。

俺は何かと見てみるとその紙には、

皇帝陛下御用の金文字と堂々たるサインが書いてあった。

親父に聞くと、貴族の屋敷で見せてもらった皇帝陛下の御辰筆と同じらしい。

皇帝陛下を怨んだ俺としては複雑な気分だったが。

親父が言うには、此が有ればあんな小役人ぐらいの命令は何の意味も持たないそうだ。

俺たちはやっとホッとしてきた、エヴァもお袋も笑顔が見えてきた。

少壮の弁護士風の男はいずれ責任者とミッターマイヤー候補生を引き合わせますので宜しくと言い、

エヴァには『皇帝陛下は決して貴方を連れて行くような事は致しません』と話し、

お袋には『あのような者が居る事を恥に思いますお許しを』と話す、そしてこの事は誰にも言わないようお願いしますと言われ、」更に絶対お守りするので軽挙妄動はお慎み下さいと言われた。亡命の事かと思ったが、エヴァの安全が守れるのなら敢えて危険な道を進む事はない。

その男の言う事にはグリーネワルト伯爵夫人も、

同じように役人が勝手に連れて来て押し付けたそうだと

来てしまった以上は追いつ返すと夫人の命が危ないので仕方なしに住まわしたそうだと。

其れを勘違いして弟がやりたい放題だそうだと、

そいつの為に危うくエヴァが奪われる事になるところだった、

親父も同じような事を聞いた事が有ると思いつながら言ってくれた、

何だそのクソ餓鬼は！！ふざけるな！！

先ほどの宅配の車が来た、今度は手ぶらだベルを鳴らし今度は俺が出る、

『済みません宅配先を間違えましてご迷惑おかけしました』

なるほど此で帰える訳か、俺は『其れはご苦勞様』と言い迎え入れた。

もう一人の男が箱に再度入り、少壮の弁護士風の男と女で箱を担ぎ『申し訳ございませんありがとうございます』と声を立てて帰って行った。

俺たちは力が抜けてぐったりしながら僅か三時間余りに起こった事を考えていた。

本当に安全なだろうか俺は思う隣に座るエヴァもだろう俺の手をぐっと握り離さない、俺も握り替えし離さない。

よし俺の言葉を言おう、今の心をエヴァにぶつけようウジウジしてられない。

俺はエヴァの方へ向き、顔をじっと見て話す。

エヴァも俺を見つめている。

確りしろウォルフ、此処で後悔するより今の気持ちを伝えるんだ。

「エヴァ」

「何ですかウォルフ様」

「エヴァ、すっ好きだ愛している、俺と俺と・・・・・・・・けけけ結婚してくれ!!」

シーンとしているエヴァは何も言わない。

駄目か駄目なのか、俺は振られたのか・・・・・・・・。

するとエヴァが涙を流しながら俺に抱きついてきた。

「ウォルフさま私も好きです愛しています嬉しいです、私をウォルフ様のお嫁さんにして」

「エヴァー」

「ウォルフさま」

エヴァを抱き寄せキスをした、長い長いキスだった。

はっと辺りを見ると親父とお袋がニヤニヤしながら俺たちを見ていた、

2人して真っ赤に成ってしまった。

早く安全が来て欲しいものだ、エヴァ必ず守るそして幸せにするぞ。

■オーディン ライニツケンドルフ地区
ン・ミッターマイヤー

エヴァンゼリ

私を寵姫に絶句しました。ウォルフ様と引き離されるそんなの絶
対嫌、

けど我が儘を言えばウォルフ様、お父様、お母様に迷惑を掛けてしま
う、

そうして悲しみに震えていると宅配便が来た、

こんな時にも来るんだと遠いところを見る感じでお父様を見ていた
ら、

いきなり明るい顔になっていった、どうしたのでしょうかと思うと、

『御茶でも飲んで行きなさい』と宅配の人達を家に御上げていまし
た、

お父様が私と母に御茶を持ってきてと言ったので何故と思いながら
お母様と一緒に、

キッチンへ色々考えていましたが纏まらずに出て行くと、

お父様が私たちを集めてその宅配員が驚きの話をしてくれたのです。

「今回の寵姫話は全くの嘘であの嫌な男が勝手に行っていたと、

その為偉い人が私たちを守るように言ったと」

けど私たちそんな人の知り合いは居ないのに不思議に思うと。

『陛下ご自身がその様な行為を行うのを嫌がっていらっしゃるので
す』

といい此は絶対に秘密ですと言って帰りました。

その後ウォルフさまから嬉しい恥ずかしいプロポーズされました、

もう一生離しませんからね、あ・な・た。

■オーデイン ノイエ・サンスーシ 小部屋 テレーゼ・フオン・ゴールデンバウム

イライラしながら待つ事3時間ケスラーから連絡が有った、ミッターマイヤー家は無事此より保護を続けると、

エヴァちゃんは無事だった、よかったよー涙が出てきた嬉しいよー。

後はケスラーが帰ってきてからだ。

クソ小役人め！！目に物見せてくれる！！！！

第四十話 休暇の終焉（前書き）

エヴァンゼリンの後日談はまたあとです。

第四十話 休暇の終焉

宇宙歴788年帝国歴479年 1月1日

■自由惑星同盟ハイネセンポリス 最高評議会 最高評議会議長
ディオニシオ・エンリケス

12月24日のクリスマスプレゼントとして帝国と同盟間の捕虜交換が発表されて以来、

我々の支持率は15ポイントも上昇した、此で次の選挙も安泰だ。あとは帰還兵100万を待つばかりだ。

新年のパーティーは国防委員長が持ってきた、帝国産463年物ワインを飲み、

帝国産高級品趣向品で彩られた山海の珍味で舌鼓を打つ。実に愉快的新年だ、市民は扱いやすいモノだ。

これで長期政権になるだろう。

宇宙歴788年 1月1日 ハイネセンポリス ある少年
の日記

去年のクリスマスは生まれてから最高のプレゼントを貰えた。

お父さんが帰ってくる、帝国との戦いで捕虜になっていた、

お父さんが生きて帰ってくる、帝国人は捕虜に酷い目を逢わせるので心配したけど、

軍隊のお姉さんが家にやって来て今度お父さんが帰ってくるって教えてくれた、

今僕はお爺ちゃんお婆ちゃんと暮らしている、お母さんはお父さんが行方不明になると、
知らないおじさんとどっかへ行ってしまった。

けどお父さんが帰ってくるから悲しくないよ。
早く4月にならないかな。

■銀河帝国 アルタイル星系第7惑星の矯正区
2月1日 ヴ
イトリオ・エマニエール

また昨日仲間が死んだ、此で31人目だ、明日は俺かも知れない。
死体は穴に埋めるが死んだ事は届けない。
届けるとその分食料を減らされるからだ。

食料は慢性的に不足している、強い物が沢山喰い弱い物は衰弱していく、
喰える物なら何でも喰う、穴モグラはご馳走だ、木の皮や草まで喰って餓えに耐えている。

中には死んだ仲間の肉を食う奴らも居る、脳みそが一番旨いらしいが、
其処まで俺はしたくない、薬もなく体の弱い者や病気の者はバタバタと死んでいく。

此処は地獄だ敵は俺たちをこの土地に放置しているだけだ。

監視は食料を配る時だけ現れる、此処には秩序なんて無い上官も部下もない、

あるのは人望と腕力で他人の尊敬を受けるか支配するかかの差だ。
同盟で威張り散らしていた上官がある朝見るとリンチで死んでいる

事など日常茶飯事だ、

敵は俺たちを叛徒と言い懲罰で此処へ放置していると言うのだ、

もう二度と帰れないと思っていたが、

今日驚くべき話があった、同盟に囚われている捕虜と俺たちを交換するらしい、

100万人帰れる、其れを聞いた者達の間で牽制が始まっている、

誰でも帰りたいのだ、此では殺し合いが始まるだろう、

帰れたなら二度と軍隊なんか入りたくない。

こんな地獄へ送り出した、政治家と軍上層部に怒りを覚える。

早く妻と娘の元へ帰りたい。

■自由惑星同盟ネプティス捕虜収容所 2月5日 アルフレート・ミュールマイスター

パトロール中のアルレスハイム星系で叛徒の奇襲を受け、

乗艦は大破し艦長副長も戦死し生き残りの最先任だった俺は、

玉碎を主張する部下達を抑えながら、

たった一人になってしまふ12歳の愛娘を思い出しながら此処で死ぬわけにはいかないと、

卑怯者になっても生きながらえたいと、俺が全責任を取ると部下達に話して降伏した。

それ以来3年此処で娘の事と一緒に巻き込んだ部下達の事を思いながら過ごしてきた。

1月20日に皇帝陛下より救恤品が送られて来たのは驚きであった。

娘の作る物よりは劣るが、ザワークラウトの旨かった事、古里と娘を思い出しながら、その日は涙に咽せたものだ。

2月5日本日収容所所長から此処の収容所全員が国へ帰る事になると発表された。

その瞬間、不安と期待の入り交じった気持ちと成った。娘の元へ帰れる、部下を家族の元に返す事が出来る。

しかし俺が責任者だ、国に帰れば反逆者として処罰されるだろう、俺だけなら良い娘も巻き込んでしまう、巻き込むのが嫌だから戦死した様に見せたのだから。

しかし話を聞いていくうちに、皇帝陛下はお怒りではない、帰還しても反逆者としては罰しないとお言葉が有ったそうだ。本当だろうか、それならば娘の元へ帰れる。

皆次第に興奮し喜びを見せながら涙を流しながら咽せている。帰れる、帰れる、帰れる。

■タナトス星系惑星エコニア捕虜収容所
ン・ケーフェンヒラー

クリストフ・フォ

昨日皇帝陛下から儂等に救恤品が送られて来た。

なにやら皇帝陛下も企んでいるのか判らんが、

此処の収容所全員を帝国へ帰すらしい、

儂はミヒャーゼン、ジークマイスター、アッシュビーの繋がりを追いつけてきたが、

此処で一端終了かもしれない、

余り帰りたくはないが、所長のコステアは特に僕を帰したいらしい、まあ奴は色々しているようだからな。

第四十一話 疾風ゲット！（前書き）

前回鬱気味な話でした、不快感を与え申し訳ありません。

今回はエヴァンゼリン事件の後日談です

第四十一話 疾風ゲット!

帝国歴479年1月3日

■オーディン ノイエ・サンスーシ 小部屋 テレーゼ・フォ
ン・ゴールデンバウム

ケスラーから連絡が有って2時間後、ケスラーが秘密通路から現れました。

爺様がケスラーに労いの言葉を懸けます。

「ケスラーご苦労じゃな」

「ありがとうございます」

「ケスラーして首尾はどうじゃ」

「はっミッターマイヤー家の皆は落ち着いてくれました、相当思い詰めた様子でしたので、

最悪の場合亡命或いは一家心中もあり得たかも知れません」

うわ最悪あの疾風ウォルフを其処まで追い詰めるなんて、

エヴァちゃん死んじゃったかどうかどうするつもりじゃ!!

超ムカムカ更にしてきたぞ!!

木っ端役人め絶対許さんぞ!!!!!!

「それは気の毒な事をしたものよ」

「真許せませぬな」

「許せないです!」

「ケスラー此からの事じゃが、あの文だけでは安心せんじやろう」

「御意、ミッターマイヤー候補生には近いうちに責任者と会わせる

と伝えておきましたので、
そこで話をすれば安心すると存じます」

みんな頷くね、けど責任者って誰になるんだろう、
事件の責任者なら宮内尚書のノイケルンだけど、
部隊の責任者は爺様かケスラーだけど誰が会うんだろう？

「ほーでは予が会うとするか」

お父様其れは余りに凄すぎるのではありませんか、
ケスラーが絶句してますよ。

爺様は涼しい顔ですけど、
私も驚いてますよ。

「陛下お戯れが過ぎます」

「忍びで会えば良からう」

「儂が会いましょう」

「ふむグリーンメルスよ今回はそちに任せよう」

「判りましたぞ陛下」

「ケスラー早速ミッターマイヤーとの密会準備をいたせ」

「御意」

「お父様、私もミッターマイヤーとの密会に参加したいのですが」
「テレーゼ様それは危険です」

いや此処で父様の代わりに出ればミッターマイヤーの不安を消し去れるだろう。

皇女自らなら信用するはず、打算だが信用して貰えれば此方へ引きずり込み安くなる。

此処は一戦するべし。

「お父様、お願いします此処で私が会えばミッターマイヤーは信頼してくれるでしょう、

今こそ陣頭に身を曝さなければならぬのです」

「うむ、其処までしないと駄目か」

「駄目です、お願いします」

「判ったグリーンメルス、ケスラー、テレーゼを頼むぞ」

「お任せ下さい絶対にお守りいたします」

「任せて頂きますぞ」

「それでエヴァンゼリンやミッターマイヤー家に対する保護はどうするのですか」

「ミッターマイヤー家に守護を行いエヴァンゼリン嬢にはしばらくの間影を付けます」

「重畳ですね」

「あの役人達は？」

「今回の行為を行った者への監視と共に宮内省の監視も強化いたします」

「お父様宮内省だけでなく内務省も監視しましょう、此でいずれは膿を出し切りましょう」

「やらねばならぬな」

「グリーンメルス、ケスラー頼むぞ」

「御意」

「陛下わかりましたぞ」

■ オーディン ノイエ・サンスーシ 小部屋 フリー
ドリヒ4世

ケスラーからの話を聞き儂も些か感に障ったわ、
役人共の独善は儂のせいじゃ、

此処は儂自らその者に非礼を詫びねばならんと言ったのじゃが、
反対されてしもうた、

致し方ないグリーンメルスに任せようと思うたら、
テレーゼが自ら会いに行くと言ってくれた、
心配じゃったし単なる好奇心だと思ったが、

話を聞くと納得する話じゃった。

此処まで成長したかと嬉しく思うた。
頑張るのじゃテレーゼ。

■オーディン ノイエ・サンスーシ 小部屋 ウルリツヒ・
ケスラー

ミッターマイヤー家の保護を命令し帰還し陛下の元へ参内した。
細評を伝えたあと、グリーンメルスハウゼン閣下に出て貰うつもりで、
責任者との会談を行うと伝えたところ、
陛下自らお会いすると仰ったので驚いてしまった。

結局其れはやり過ぎである諦めて貰ったが、
こんどはテレーゼ様が会談に参加すると仰った、
遊びではないのだが、話を聞くとなるほどと思い、
陛下自ら了解をしたため、安全を第一に考え会談をセットすること
にした。

帝国歴479年1月4日

■ オーディン ライニツケンドルフ地区
ミッターマイヤー

ウォルフガング・

昨日は悲喜交々の一日だった、けど今は幸せだ未だ多少の不安はあるが。

隣にはエヴァが寝ている。可愛い寝顔で寝息をたてている。

俺はエヴァの寝顔を見ながら益々守り抜くと力強く心に決めた、

エヴァを守る為なら何でもしようそう思う。

エヴァが起きたようだ。

「エヴァおはよう」

「ウォルフさまおはようございます」

にこやかに挨拶してくるエヴァ、そのまま抱き寄せキスをする。

幸せを感じる瞬間だ。

時計を見ると既に午前10時を廻っている、

寝過ぎだなしかしエヴァと一緒にだったから寝坊も幸せだ。

身支度をしてリビングへ降りると親父とお袋がニコニコしながら親父ニヤニヤするなよ。

迎えてくれた、エヴァも俺も真っ赤になってしまった。

親父が先ほど昨日の少壮の弁護士風の男から連絡有り此処へ連絡してくれて電話番号を渡された。

早速連絡すると、昨日の男が出て挨拶をした。

俺も挨拶した、男は今日責任者と会わせるが用事があるかと聞いくる。

此処で会っておかねばなるまえ、エヴァと家族の安全な生活の為だ、俺は受諾と言い、向こうからは15時に迎えが来ると伝えられた。

15時丁度家の前に地上車が到着した、昨日来た女性士官服を着て降りてきた、

玄関で挨拶し1人で行こうとしたが、エヴァが離れたくない一緒に行くと言ってきた、

万が一の時にエヴァを連れて行けないと言うが嫌ですと言う、

女性士官が困った顔をしながら、『仕方ありませんがご同行を許可します』と言い

エヴァの同行を認めてくれた。

親父とお袋が門まで来て送ってくれた。

自宅から1時間ほどで立派な屋敷に着いた、

立派な門から車は入り見事な庭を進むと車止めに車が到着した。

玄関には少壮の弁護士風の男が待っていた。

彼は俺に挨拶し中へ招かれた、彼がこの館の主人なのだろうか？

エヴァは俺の腕を握って離さないで一緒に歩く。

広い屋敷だ俺の家が何百軒はいるだろうか、

廊下の突き当たりにも重厚なドアがありそのドアが音もなく開く、

その部屋へ入ると非常に広い部屋だった長いテーブルの向こう側に、

1人の老人と少女が見えるエヴァより遙かに年下の少女だ、

少女を見た事で俺もエヴァも緊張感が無くなっていた。

老人が挨拶してくる。

『この度はミッターマイター家には大変なご迷惑をおかけしました、私は当家の主人子爵リヒャルト・フォン・グリーンメルスハウゼンと申します』

驚いた、貴族様が俺達に謝っている、俺もエヴァもあっけにとられている。

俺は慌てて、「いえどういたしまして」へんな返事をしてしまった。少壮の弁護士風の男が此方へどうぞ言い俺たちを案内した。

老人と少女の前に座り、話が始まった。

今回も行為は宮内省の一部が勝手に行った事、

陛下が俺たちに対して申し訳ないとのこと、

俺たちの安全は完全に守られる事、

俺は驚いてしまう、皇帝陛下が一平民の俺に其れだけのお心遣いをしていただける、

エヴァも同じ考えなのだろう、感動しているようだ。

少女は一々頷きながら俺たちを優しい目で見ている、

何処かで見た気がするが気のせいであろうか？

子爵は若い頃皇帝陛下の侍従武官だったそうで、

今でも現役の中將だとのこと、

少壮の弁護士風の男はウルリッヒ・ケスラー少佐だと名乗ってくれた。

緊張する俺たちに対して少女がにこやかに笑いながら、

『私はテレーゼと言います、ウォルフガングさんエヴァンゼリンさん宜しくね』

と挨拶してきた。

お孫さんだろうか？俺たちもご挨拶をした。

横でケスラー少佐とグリーンメルスハウゼン子爵が苦笑いしている、
いったい何なのだろう？

中将が『テレーゼ様そろそろお話をした方が宜しかろうと存じます』と丁寧な話し始めた。

テレーゼ?? んまさか、士官学校のシーンを思い出す、一年前だが面影がある。

しかしこんな所に来るのか?

困惑する俺をみてエヴァが不思議そうな顔をする。

「そうねミッターマイヤー候補生、直接会うのは初めてですね、士官学校では教室でお会いしたはずです」

やはりそうだ、テレーゼ様皇帝陛下の皇女様だ!!

テレーゼ様はにこりとして。

『思い出してくださいましたね、

わたくし銀河帝国皇帝フリードリヒ4世第三皇女テレーゼ・フォン・ゴールデンバウムと申します』

『この度はエヴァンゼリンさんにご迷惑を掛け済みませんでした』

俺もエヴァも絶句してしまった。

皇女殿下が平民の俺たちの前に居る。

しかも俺たちに謝っている。

2人とも何も言えずに目をパチクリさせる。

確か皇女様は8歳ぐらいにはず、

其れなのにこの受け答えには一言一言重みがある。

『お会いする機会は少ないですが、エヴァンゼリンさんとはお友達になりたいです』

驚いた皇女様がエヴァと友達になりたいなんて、エヴァも驚いている。

『是非ミッターマイヤー候補生もお友達になって下さいね』

俺はどう言って良いか言葉がでない。

皇女様はにこやかにお笑いになる。

中将閣下とケスラー少佐を見るとニコニコしている、つまりは全て任せろと言う事か、そうこうしていると、エヴァが話し出した。

『皇女殿下私のような者を友達なぞ恐れ多い事です』
『エヴァンゼリンさんはお姉さんみたいだから、たまに会うだけでも良いからお願い』

ここまで言われたら受けざるを得ないだろう、それにエヴァを救ってくれた皇帝陛下の皇女様だ、可愛い方じゃないか、エヴァも笑顔になっていった。

「皇女殿下わたくしウォルフガング・ミッターマイヤーは殿下にお仕えいたします」

エヴァも其れを聞いて、

「皇女殿下わたくしエヴァンゼリン・ミッターマイヤーは殿下にお仕えいたします」

皇女様はえっと言う顔をして、

『ミッターマイヤーさん、エヴァンゼリンさん家臣じゃなくて友達ですよ』と仰った。

『お友達の為にエヴァンゼリンさんとミッターマイヤーさんは守ります、

絶対変な人が来ないようにさせます』と仰っていただいた。

聡明な皇女様だと感動した。

俺達のように只の平民に優しくしてくれて、友達になってくれと仰

る。

皇女様の様なお方が真の皇族と言うのだろう。

何処ぞの寵姫のクソ餓鬼とは大違いだ。

あのような成り上がり者と全く大違いだ、エヴァも感動しているようだ。

皇女殿下にお仕えする事が楽しみになってきた。

我が忠誠を捧げるのはテレゼ皇女殿下しか居ないとこの時、大神オーディンに誓った。

その後夕食をご馳走になり、エヴァの料理の方が旨いけどね、皇女殿下からエヴァに銀のペンダントを賜され、俺には銀時計を賜された、

お友達の印だそうだ。

エヴァ共々大事にしよう。

夕食後、皇女殿下はお帰りになり。

俺達はケスラー少佐に応接室で話を聞いた。

『皇女様は敵に狙われやすいのです、ですから今日の事は人に言わないで下さい』

なるほどあれだけ聡明なら敵もいるかも知れん、特に他の寵姫達から狙われるかも知れないと言う訳か。
あのクソ餓鬼の姉なんかは一番怪しそうだ。

あのようにお優しい殿下を害する奴はゆるさん。

「判りましたエヴァンゼリン共々皇女殿下の事は話しません」
エヴァも同じように頷く。

クスラー少佐から『ミッターマイヤー家にはSPを張り付けてあるので安心してくれ』
其処までしてくれるのか、ありがたい益々皇女殿下への忠誠心が増えていった。

その後エヴァと共に迎えに来てくれた、女性士官に送られ家に帰ってきた。

親父とお袋が心配して門まで迎えに来てくれた。

俺は親父に「もう大丈夫心配ないと言い」

エヴァも「お父様お母様心配懸けましたけど大丈夫です」と言った。

親父もお袋も最初は心配そうだったが俺達の顔を見て安心してくれた。

皇女殿下の事は言えないので、言って良いと言われた去る子爵が守ってくれたとごまかした。

その夜もエヴァと2人で寝たが昨日のような不安は全くなかった。
エヴァ愛してるよ。

■オーディン ノイエ・サンスーシ ベーデミュンデ侯爵邸 テ
レーゼ・フォンゴルドンバウム

今日のミッターマイヤーとの会談は成功かな、
誠心誠意の対応したし最後はミッターマイヤーが忠誠を尽くしてくれるなんて、
嬉しすぎる誤算でした。

エヴァちゃんともお友達に成ってもらったし、仲良くしたいですね。
ミッターマイヤーとエヴァちゃんの結婚式は何時だか判らないけど、
お忍びでも参加したいですね。

エヴァちゃんとミッターマイヤーの子供も見たいから、
いづれ産婦人科の大家を紹介しようかな。
量産型エヴァ・・・なんてねw

そして爺様とケスラーはエヴァちゃんとお家を守るようにSP配置
したらしいから安全ですね。
後は宮内省のクソ小役人を何とかしましょう。
ケスラーが何とかしてくれるんでしょうがね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3863x/>

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

2011年11月9日03時08分発行